

---

# 15歳。

霜月 沙羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

15歳。

### 【Zコード】

N7456A

### 【作者名】

霜月 沙羅

### 【あらすじ】

ハブられないために皆と同じように流れてゆく女の子、明。彼女は素行の悪いいわゆる『不良』の里恵を少し尊敬していた。里恵の幼なじみの優等生の直史は言つ、「あいつ、本当はいい奴なんだぜ」。そして里恵の大人しくて真面目そうな友達、斐羅の隠された事実とは……。中学三年生の一年間の物語。

## 第1章 流れてゆく。

流れてゆく。

皆と同じことをして、流れに取り残されないようこしばしば自分を偽つて。こんな生活心底嫌なのに、結局皆と同じように流れでゆく。不可抗力だ、と明は思った。そうだ、これは不可抗力。クラス替えで騒然とした新しい教室の中、そんなことを考えていた。こんな風に思っていたのは、おそらくずっと前からだろう。

「スマイリーとまた同じクラスだねー」

休み時間、ナツキは明の机に寄つてみると満面の笑顔で言った。スマイリーというのは明のあだ名だ。名字の『えがわ』と『笑顔』をかけて、そう呼ばれるようになった。

「だね。良かった、知ってる人がいて」「うんうん、あ、そうだ。紀子！」

ナツキが後ろに向かつて手招きをする。すると、ショートヘアーの肉付きの豊かな少女が嬉しそうな顔をして寄ってきた。これが紀子か。

「うちの友達」

ナツキが紹介する。

「えっと、江川さんだよね。確か去年の合唱祭で指揮やった  
「うん」

うなずきながら、明は頭の中で必死に紀子の名前を思い出すと  
していた。見たことはある、田立つ体型だし。でも、どうして名字  
が出てこない。

「ね、早速なんだけど多分明田頃に係決めするじゃん？で、うち  
一緒に係に手挙げようよ」

ナツキが田を丸くしながら提案すると、明と紀子は

「そうだね」「うん」

と快く了解した。知らない人と同じ係をやるのは嫌だったので明  
は嬉しかった。

でも、ああこれでグループが固まるんだなと思う。去年は違うグ  
ループに属していたナツキが寄ってきた時点で明は確信していた。  
紀子だってほら、こんなに嬉しそう。今日までまったく親しくない  
者達が同じグループなんて、異質なようで普通なのだ、学校という  
ものは。もし、グループからはみ出したりしてしまったら一度と入  
れない。どのグループにも。

自分は大丈夫だ。はみ出さないコツを、これまでの学校生活の中  
で明は身に付けていた。

「今井さん、同じクラスなんだよね」

明がぼそっと言つと、ナツキと紀子の目が輝いた。

「なんだよねえ」

「そうそうあの人、結構ヤバいことしてるらしいよー。由紀達が学校サボって遊んでる時に見たんだって、あの人がオジサンと一人つきりで話してるの」

「マジで？ それってもしかして援助交際ぽくない？」

と、機関銃のごとく一人はまくし立てた。明も一緒に驚いたりしてみせる。こういう話題を提供してやると、お喋りは一気に色氣立つ。そして、一人一人が自分と同じことを思つていたんだと喜び、結束力が高まってゆく。分かつていた。

「あの人ってギャル系の由紀達と違つてノリ悪いんだよね。何かイヤ」

紀子が大げさに眉をひそめる。分かる分かる、と明とナツキは口を揃えた。すると紀子は安心した顔付きになる。もし、二人と考へが違つていたら致命的だからだ。考へが異なる人は次々とグループからはみ出す運命にある。

だから、私今井さんのこと少し尊敬するんだよね、他のそういう人と違つて一人で頑張つている感じだから。とは、口が裂けても言えるはずがなかった。

今井さんは、始業式の口なのに学校に来ていない。

そして今日も流れてもく。思ひこ女の子『スマイル』を演じな  
がら。

## 第2章 今井里恵。

今井里恵。それが彼女のフルネームだつた。垂らしたままの肩にかかる長さ髪は茶色く、スカートは他の生徒より短い。細かく挙げるとYシャツの裾だつてスカートの外に出しているし、上履きのかかとは踏みつぶして履いている。見た目、コワイ人。

そういう外見をしている女子達のことを指すのに、皆はギャル系という言葉を用いていた。ただの不良じやないか？と明は内心思つていたが、ギャル系には眞面目な人もいるし、クラスを盛り上げたりして多くの人に好かれるギャル系もいるので、そう呼ぶことは避けているらしい。

ギャル系の子達は好き。でも今井さんはイマイチ。

ナツキと紀子はそう言つていた。それは分かる。里恵と話したことはないが、楽しい会話になるとはあまり思えない。

ギャル系 例えば由紀と話していると面白い。もっとも、ギャル系が苦手な人は里恵も由紀も同じだろうけど。

里恵は、始業式から二日後に登校してきた。まだ名前の順の席順なので里恵は明の一つ前の席だ。これは、キツイな。そう思いながらも、明は元来人見知りをしないたちだ、なので朝学活の前に話しかけてみた。

「あの、今井さん」

席についたばかりの里恵はいぶかしげに振り向く。

「私、江川明っていうんだけど、ようじくね」「うん」

えくぼを浮かばせて言つと、里恵も口元をほじほめた。どんな反応をされるかドキドキしていたので、笑ってくれたことが嬉しくて明は更に話しかけた。

「あ、私のこと知ってる?」「知らない」

今度はこじりともせずに言われた。明は心なしか緊張する。

「去年合唱祭で四組の指揮をしてたんだけど……覚えてないよねえ」

紀子も覚えていたことを口にしてみたが、言つてからこれは失敗したと思つた。だって里恵は、あまり学校に来ていないので、声がだんだん小さくなる。

「アタシ、行つてないし」

口の中が苦くなつた氣がした。それでも明は笑顔を顔面に貼り付けて

「そつか」

と明るい声色で返す。

その時、教室の一角でじつと笑いが起こった。明と里恵は笑いのあがつた方を向く。そこには、後ろにある生徒用ロッカーの前で不自然な格好をして倒れている一人の男子生徒がいた。うずくまつてるようだが右足と右手は伸びている、そんな格好。彼の周りには数人の男子達が立って馬鹿笑いをしていた。明は倒れている男子生徒が誰だかすぐに分かつた。あの、マッシュルームのようなお洒落のかけらもない髪型。クボタだ。

「お前、馬鹿じゃねえの？」

なおも笑いがおさまらない様子で、ジャージ姿の杉沢という男子が言った。

「何もないじりで、そんな派手にすつ転ぶなんてさあ。カッコわ  
りい」

その言葉に、ただ見ていただけの女子もくすくすと笑い出した。しかし明は、杉沢の言葉よりも、更にはクボタがむくりと起き上がったことよりも、ジャージのズボンを下げすぎて履いているせいでちらりと見える杉沢の下着が気になっていた。

青地に黒いペンキで落書きしたかのような模様。みつともない、そう思っているのに初めて見る同級生の男子の下着から目を離せない。段々とそれをじつと見ている自分が恥ずかしくなつて目をそらした。

クボタはもう立ち上がりっていた。可哀想なほどに顔を真っ赤にして。そして足早に一番前の自分の席についた。ナツキと紀子の様子をちらりと窺うと、一人とも同じように忍び笑いを浮かべている。

しかし明は笑えなかつた。どうしてみんな笑えるんだ？  
理解し難かつた。

「ばつかみたい」

里恵がつぶやいた。明は思わず彼女に顔を向ける。里恵は杉沢に冷ややかな視線を向けていた。そして教室全体を一瞥した後、「ばつかみたい。クラスの奴全員」

「えつ」

明は驚いてみせたが、本当はつなぎたい気持ちだつた。これが、今井さんなんだ。自分といつもの強くもつていて、私が密かに尊敬する今井さん。嬉しさが身体の中を駆け巡る。

チャイムが鳴り、担任が出欠をとり始めても胸が熱くなるような興奮はおさまらなかつた。

### 第3章 ぐずだらけの空間

「クボタには本当笑わされたねー」

「あんなダイナミックな転び方、紀子でも真似できないよね」

「ちょ、それどういう意味ー？」

紀子はわざとらしく頬を膨らませた。それを見てナツキが笑う姿に明は寒気を覚えた。そんな風に演じ合つて、馬鹿みたいだ。だけど自分だって人当たりの良い明るい女の子を演じている、他人からどう見られているのかと考え出すと怖くなつた。でも明は言つ。

「クボタって目が細いから、視野が狭くて見えなかつたんじやない？」

「あ、そつか！　スマイリー頭良いじゃん」

あはは、とナツキと紀子は笑つた。結局明は、笑いをとるために彼を使つていて。こんな自分が一番嫌なのに、どうしてもやめることができない。窓際にある紀子の机に手をつくと、窓から溢れる春の陽光で温もりを帯びていた。窓辺に立つナツキと紀子の髪の毛はいつもより茶色く見える。この儂げな感じが明の心に深く食い込んだ。この光景を大事にしよう、そう自分に言い聞かせた。

「今更だけど、今井さん、今日学校に来たね」

ナツキが里恵の空いた席を見つめて言った。

「来なくていいのに」

紀子が低い声でつぶやく。彼女はナツキと田を合わせ、くすりと笑った。悪寒のようなものが背中に走る。明は何も言わず、窓をにらんで爪を噛む。初めて、本当の『悪意』が里恵に向けられた瞬間だった。

自分はまた今井さんの悪口を言つたり聞いたりしなければならないんだ、そう思つと心じょうもない無力感に襲われた。

絵の具のにおいが鼻をつく。美術室、ここが明の班に割り当てられた掃除場所だ。同じ班の里恵は氣だるげにごみを掃く。明の持つたちりとつにごみが入れられてゆく。まだほこりがちりとりに沿つて線のように残っていたが、里恵は何気無い素振りでほこりを上履きでひそつた。

「あとは男子が雑巾かけるんだよ」

里恵はぶつめいぽうな口調で言つた。男子達は少し不満気な顔をしながらも、無言で床を拭き始める。

教室に床ひつとして背中を向けた里恵を明は呼び止めた。

「何？」

不機嫌そうに振り向く。そんなきつこ田つきを向けられるとたじろいでしまう。

「うーんと

話題くらいに考えとけよー」と明は自分を叱った。視線を宙に漂わせていると、ふと思いついた。

「今井さん、高校どこ行くの?」

明はここにこじて尋ねた。男子達のぞつきんをかける手が止まつていることからして、聞き耳をたてているのだらうと思つた。里恵は明に身体を向け、皿を見据えて言い放つた。

「ほんなくずだらけの空間をまた三年間過ごすなんて、ただの時間の無駄だ。それでも行こうとする奴は、よほどのくずか低能だね」

明は思わず息をのんだ。男子達も驚いて里恵を見つめている。

「うよっと、廊下に出て話そいつ」

「何か言つたことある?..」

里恵は軽に捨てるし、乱暴に口を開けた。慌てて明もつぶつと呟く。

里恵は壁にもたれ髪の毛先をいじりながら尋ねた。

「ある」

「何?」

「人を馬鹿にして、そんなに楽しいの?」

明は里恵をにらんだ。高校に進学しようとするものの全員を、里恵はのしつたのだから明は怒りを覚えていた。そしてののしられたことよりも、里恵には他人の悪口などを言わない、そんな人でいてほしかった。明は何だか裏切られた気持ちでいっぱいだった。

「馬鹿になんてしてないよ。眞実を言つただけさ」

「今井さんみたいな人には、友達と学校を過ごすことの楽しさとかが分からぬだけじゃないの」

「アタシみたいな人つて？」

里恵は明をまっすぐ見つめた。ナツキから聞いた援助交際疑惑が頭をよぎる。しかし口に出すことはせず、負けじと見つめ返す。

「だいたい、江川さんは楽しいの？」

里恵が質問してきた。うつすらと笑みを浮かべている。何だか馬鹿にされていくようだと思つた。

「楽しいよ」

でも、正直疲れる。という言葉は飲み込んだ。ここで肯定したら負けだ。

「じゃあ何でアタシに構つんだよ」

明は答えられなかつた。密かに尊敬していたといつて口に出したら、彼女の思考を肯定することになる。

「江川さんなら、と思ったのにな」

里恵はそう言い残し、くるりと背中を向けてその場を立ち去った。  
もひ、明には引き留める気力も残っていなかった。

「惨敗、お疲れ様」

後ろからいきなり声をかけられた。ゆっくりと振り向くと、そこにいたのは、同じ班の和泉直史いすみなおふみだつた。背が異常に高く、目もとても大きいから明はよく覚えていた。

「……見てたの？」

「いや、聞いてた。つーか、聞こえた」

直史のさわやかな笑顔が恨めしい。すると直史は真剣な顔になり、言った。

「あいつ、本当は良い奴なんだぜ」

一瞬、周りの音が全てなくなつたような気がした。

## 第4章 和泉直史。

「俺、小三の時からずっと同じクラスなんだよ。あいつと。家もかなり近い。結構優しい奴だった。中学生になつてからだな、あなつたのは」

明は、里恵の幼い頃の姿を思い浮かべてみた。黄色い通学帽をかぶり、髪の毛の黒い彼女。しかしそれは、果てしなく今の姿からは想像出来ず、そして控えめに聞いてみた。

「……好きなの？」

直史は一瞬驚いた表情になり、すぐに弾けたように笑い出した。

「江川、幼なじみの男女だからって幻想を抱いたらいいよ。あいつは、恋愛対象外だな、俺とタイプが違うすぎむ」

それは納得だ。直史は過去に学級委員を務めていたこともある、気さくでみんなからも好かれている男の子だった。

「それで、今井さんは何であんな風になつちやつたの？」

「江川、それは間違っているよ」

「え？」

耳にかけた髪の毛がぱらりと落ちた。

「口も素行も悪くなつたし、決して見た目の印象も良くない。でも、あいつはあれで良かつたんだ」

「……和泉の言つてること、分からぬよ」

「分かるのは今井だけだと思うな、俺は」

意味の分からぬいつぶやきを残し、直史は教室へ戻つてゆく。薄暗い廊下には明だけが残された。もうみんな何を考えているのか分からないよ、何だか泣き出しそうな気持ちになつた。

「あ、スマイリー！ 今井さんがひどい」と言つたんだつて？」

教室に戻るなり、目を大きく見開いたナツキが聞いてきた。

「ひどいこと？」

「掃除の時間だよ！ ぐずだらけとか高校に行くのは低脳だとが言つたつて聞いたけど。紀子なんか泣いちゃつてるんだから！」

最後の方は小声で言つた。明は机に突つ伏している紀子を視界にとらえた。どうして紀子が泣く必要があるのか明には分からなかつた。呆気にとられる明をよそに、ナツキは紀子に歩み寄り背中に手をあてて、

「大丈夫だよ、うちは紀子の気持ち分かつてるから。ほら、他の人に泣いているのがバレちゃうよ？」

紀子ははつとして顔をあげた。少し鼻は赤くなつていたが、もう涙は出でていない。明も紀子に近寄り、優しい声色を作る。

「大丈夫？」

「うん」

紀子は小さくうなずく。里恵の発言の何が彼女を涙へと走らせたのか尋ねようとするが、ナツキが口を開いた。

「仕方ないよね、紀子はとっても頭が良いから。あんな頭からっぽの人にくずだとか高校に行く奴は低脳だとか言われたら傷つくよね」

すると紀子は救われたような表情になり、

「だよね！ 何で私がくずなんて言われなきゃいけないのか分からないよ……」

と言った。おいおい、別に紀子ちゃんが名指しで言われた訳じゃないでしょ？、と思わずつっこみを入れたくなった。デリケート？・違う、これは、

「スマイリー、ちょっと一緒にトイレに行こう！」

ナツキの顔は険しくて、嫌と言える雰囲気ではなかった。

「ナルシスト」

廊下に出るなり、ナツキがつぶやいた。それはさつき自分が思つたことだ。何も言わないでいるといふ

「『だよねー』って何なの？ 自分のこと完璧だとか思っちゃつていののかなあ」

明は即座に理解した。紀子はとっても頭が良いから、と言われてあつたりと肯定したことがナツキは気にくわないのだ。きっと『そ

んなことないよ~、ナツキの方が頭良いって』みたいな返答を期待していたのだね。

「うなの方が紀子よりは頭良いと思つただけど、どう思つ~。」

そんなこと口に出さず心に閉まつておけよ、と明は心の中で毒づいた。しかし無理に笑つて言つてあげる。

「私、紀子ちゃんのことまだよく知らないからなあ。でも、ナツキはす」く頭良」と思つよ」

「だよね!」

ナツキは大げさに喜び、さすがスマイリー、ありがとね、と笑顔で明の背中を叩いた。そして何事もなかつたかのように本当にトイレに行つた。場所は違うものの、また明は置き去りだ。自分では気づいていないんだろうな、紀子ちゃんと同じ言葉を口走つたこと。思わずため息がもれる。

その時、どこからか物が割れるような音が鳴り響いた。

## 第5章 ……落ひでるよ。

教室にいた生徒達が驚き顔で廊下へ出てくる。ざわめきが廊下を支配し、やがて右に向かう生徒、左に向かう生徒。まるで避難訓練をしているときのようだ。明はその場から動けなかつた。今の音何なのー? と甘つたるい声で紀子が話しかけてくる。明は紀子の方は見ずに首を振つた。ナツキが人ごみをかき分け、無事トイレから戻つてくると、

「きつとヤバいよ!」

と言い出した。落ち着きのない様子で、瞳をせわしなく動かしている。主觀性のない言葉だが、明は何となく分かるような気がした。ただ事じやあ、ない。

突如、悲鳴がほとばしる。

明の心臓が縮み上がつた。悲鳴は下の階からだ。生徒達は一瞬固まり、内心いつもと違う日常にわくわくしていたであろう人達も青ざめてゆく。金切り声の余韻が止んだ頃、男子数人が見に行く、その後。恐怖を覚え、床にぺたりと座り込む女子。奇妙な静かさをもつたその空氣に明は息苦しさを覚えた。しゃがみ込んだ紀子が明のスカートの裾を握っていた。その手は小刻みに震えている。もしも振り払つたら、彼女はどんな顔をするだろうか?

見に行つた男子の何人かが走つてくるのがつかがえた。意外にも、その中の一人は直史だった。みんな、彼らの言葉を待つていて。一瞬、ざわめきが止んだ。一番早くこちらに着いた男子が息を切らせながら、

「ヤベえ……窓突き破つて、……落ちてるよ」

と、じぎれどぎれに言った。明の身体が熱くなつた。自分は今動揺している、だつてこんなにも身体が火照つているのに、乾き始めた汗で背筋は冷たい。ああ、嫌な汗だ。鳴り響いた音と悲鳴の真相を知る人達の声は、ばらばらに喋り出す生徒に紛れてもう聞こえない。

でも、そんな、落ちているだなんて。とにかく、知つてゐる人でなかつたらいい、願うのはそればかりだ。紀子はパニックで泣き出している。先ほどまでは『頭がとつても良い』彼女が弱さを見せる度に皮肉を言いたくなる明だが、今はさらさらない。

落ちてゐるだなんて。

その内、見に行く人が多数現れた。見たいというナツキに明はついて行くことにした。何があつたのか、明も知りたかったのだ。

「嫌だ、そんなの見たくないよお」

と泣き顔でぐずる紀子は置いてゆくことにした。この頃には教師も来つていて、じつとしているように言つてゐるが混乱したこの状況では効力をなさなかつた。

早足で階段を降り、三階。すぐそこに、その光景はあった。一年一組の教室の前に、小さな人だかりが出来ている。割れた窓ガラスの破片にこびり付く血、人と人との間から見えたのはそれだけだった。ナツキは手前の窓から下を見た。目を大きく見開いて、声にならない悲鳴を上げる。

「何が見えた？」

「見てみたら分かるよ」

見るのが怖いから聞いているのに。そう思いながらも、唾をごくごく飲み込んで窓から下の方をのぞき込む。その光景に、明は思わず顔を歪めた。せめて、うつ伏せで着地してくれればいいものを。無駄に視力の良い自分を今だけは恨んだ。

男子だ。大柄な体型で、ジャージの色からして三年生。左足が変な方向に折れ曲がっている。生きているのかは判断できない。緑色のジャージのズボンのウエスト部分から、鮮やかな青が見えていた。嫌な予感が明の頭をよぎった。

「ナツキ、落ちた人って誰だか分かる？」  
「分からない、うち、丑悪いし」

人だからの中から聞こえてきた声に、愕然とする一方やっぱりなという思いがあつた。

「落ちたの、杉沢なんだってな」



## 第6章 青ざめた顔。

ナツキは詳しいことを聞き出す為に人だかりに寄つていた。明はもう一度窓の下を見る。  
正直、杉沢のことは好きではなかった。問題はよく起りますし、口も悪いし 同じクラスになつたのは初めてだつた。

なのに、苦しい。

本当は良いところもあつたのではないかとか、そんなことを考え始め、いやいやまだ死んでいるとは限らないぞと思い直す。その内何故か気持ちが悪くなつてきて、人のいない所に行けば少しは落ち着くのではないかと思い、トイレへ行くことにした。

「つむいたまま人だかりの横を過ぎ去り、しばらく進むと左側にぽつかりと空いた二つの空間があつた。女子トイレ、と書かれた方へ入ろうとする。しかし、明の歩みは入り口で止まつた。トイレの中にある手洗い所にある誰かの影。手に水をくみ、顔を洗つている。明は隠れるように入り口からその様子を窺つた。心臓が高鳴つているのが自分でも分かる。

その誰かは頭上にある棚へ手を伸ばし、新品のトイレットペーパーを取り出した。そして何ロールか手に巻き取ると、ブレザーを強くこすり始める。使つたトイレットペーパーは紅く染まつていた。明の顔がこわばる。新しくトイレットペーパーを巻き取り、次はスカートの裾を持って拭きだした。やはり紅くなつていて、そして、汚れたそれらを流そづとトイレの個室まで歩いてゆく。

その際、顔が見えた。

真っ青な顔色をした彼女。

うつろな目で、明の姿に気付いていないところからして周りが見えていないようだ。耳元で心臓の鼓動が聞こえる。見てはいけないものを見てしまった気がした。浴びていた血は、きっと杉沢のものだろう。事が起きたとき現場にいた者でなければ、制服に血が付着するはずがない。それは、何を意味するのか。

明は大きく息をはいた。ナツキの元へ戻ろう。とにかく、人がいる所へ。何も考えたらいい。そう思い、明はきびすを返した。

トイレには、今井里恵だけが残された。

杉沢は生きていた。複雑骨折などで全治四ヶ月の怪我を負い、しばらくの間入院することになつたがそれでも命に別状がないだけましだった。打ち所が悪くなかったことと、彼の身体の柔らかさが幸いしたらしい。何故、あんなことになつたのか。大体のことを明は耳にしていた。

『何か他の男子とふざけて遊んでもいたら、あんなことになつちゃつたらしいよ』

しかし明は納得がいかなかつた。話の中に里恵の名前は全く出でこない。しかし、あれ以来彼女が学校に出てこないのが気にかかつた。いつものことだと皆は思い特に気にしていないみたいだが、トイレでの彼女の青ざめた顔が頭から離れない。 今井さん、どう

しているだろ？ そんな矢先だった、直史が話しかけてきたのは。

## 第7章 小さなシャープペンシル。

「…何？」

「放課後、あいてるか」

掃除の時間。辺りには誰もいない、一人きりだ。明は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、

「えっ、もしやあれ？ よく少女漫画で見る、『放課後、中庭に来てください』とかいう……」

「馬鹿、違うに決まってるだろ。大事な話があるんだよ」

直史は呆れた様子で笑った。

「だから大事な話つていうのは……」

にらまれた。「冗談が過ぎたと思い、明は口を閉じる。

「部活、何入っているんだつけ」

「吹奏楽」

「悪いけど今日は休んでくれ」

「ええー」

明は不服の声を上げた。だって、コンクールが近かつたのだ。引退前の、最後のコンクール。だから少しでも多く練習をしておきたかったのに。

「部活終わってからじゃ遅くなるし、人も多いから変な噂立てられ

たら困るだろ。それに 今井の話なんだ

はつとして直史の顔を見た。いつもより真剣な顔、そして里恵の話。明は首を縦に振った。

放課後、直史の数メートル後を明は歩いていた。校舎の中で二人きりだと、もし同級生に目撃されたら誤解を生んでしまう。なのでとりあえず公園で話そうと言つことになった。

「ねえ、まだ？」

直史の背中に声をかけた。もつ十分以上歩いているような気がする。

「！」を右に曲がればすぐだよ。 ほら、見えてきた

ブランコとジャングルジム程度の遊具しか置いていない、小さな公園が少し先にあった。

「ちっちやー てか、誰もいないじゃん

「穴場だぜ。独りになりたい時とかに使えるし」

そう笑つて公園に入つてゆく直史に、明も続く。

「ブランコに乗るの久しぶりだなあ」

地面を蹴り、少しだけこいでみる。手に握る鎖はひんやりしていた。直史は隣のブランコに座り、雲一つない空を仰いでいる。

「で、今井さんの話つて？」

彼の方を向く。少しの間、沈黙があった。

「……杉沢の事故、あつただろ。それで、俺見に行つたじやん」  
明はうなずいた。

「それで、や二二二二これが落ちていったんだよ」

おもむろにブレザーのポケットから何かを取り出した。明に見える  
よう、ゆっくりと手を開く。

手に握られていたのは、動物の足跡の絵がプリントされた、小さ  
なシャープペンシルだった。

「シャーペン……だよねえ」

十センチメートルくらいの、持ち歩きが便利そうな黄色を基調と  
したシャーペン。いかにも女の子好みそのものだ。

「これ、今井の物なんだ」

「わざとした。どうしてそんな物が落ちていいのだらうか。

「何で、今井さんの物だつて言つ切れるの？」

心の底では里恵のことを怪訝に思つてゐるのに、いや眞実を知るのは怖かつた。心に重いものがのしかかる。

「見たことがあるんだよ。あいつが持つていていたの。ほら、そういうの使つてゐる女子は少ないから、印象に残つてた」

直史は早口で説明した。

「とりあえず、返しに行こうと思つ」

「え、今井さんに」

驚いて言つたので途中でせき込んだ。直史は「ブラン」から立ち上がり、前を向いて言つた。

「このままだと、あらぬ疑いまで持つてしまつ。だから、本人に真相を確かめるのが一番良いと思つんだ」

和泉は、今井さんを一人の人間として氣にしているんだ、と明は少し感動した。自分は彼女を疑うばかりで、何もしようと思わなかつた。

「そうだよね。……私もついていっていい？」

言つてから恥ずかしくなつた。自分は直史と親しい間柄ではない。その点、里恵と直史は幼なじみだ。なのに、ついていっていい？ だなんて何を考えているのだ。しかし彼は振り向いて言つ。

「もちろん。その為に、江川にこの話をしたんだ」

名前を呼ばれて明の顔の赤みが増した。直史は男子なんだ、今更

りじへ意識する。

「何で、私だつたの？」

「そりやあ、友達には言えないし、他の女子には疎まれているだろ  
?」

確かにやうだ。

「じゃあ、ここから歩いて一、二分だから」

そして直史は歩き出す。明はジャンプして廊下にから飛び下り、  
彼の背中を追いかけた。

## 第8章 屋上。

少し歩くと、十階建ての立派なマンションが見えてきた。

「ほり、あそこだよ。俺んちの下の階にあいつの部屋があるんだ」「へえー。いいな、大きくて。……もしかして、杉沢の家って金持ち！？」

「馬鹿、ローンだよ」

直史が真面目な顔をして言い返すので、思わず明は吹き出した。マンションに入ると、直史はオートロックを解除するための部屋番号を入力する機械にある鍵穴に、制服から取り出した鍵を差し込んだ。ドアがすうっと開く。明は彼の後を付いてゆく。

「いいだ

直史が立ち止まつた部屋の表札には『IMA工』と書かれていた。すぐ隣にある格子のついた窓には、里恵の物と思われる青色の傘が掛けている。生活感を漂わせる光景を見せつけられて、彼女も家族の元で育つた一人の人間だという当たり前のこと今初めて気付かされた。

直史は少しも躊躇せずに呼び鈴を押した。明は緊張した面持ちで制服のリボンを正す。しばらくしてドア開かれ、顔を覗かせたのは茶色い髪を一つに束ねた三十代後半と見られる女性だった。

「あり、なおくん？ 久しふりだねえ」

女性は、田尻に細かいしわの刻まれた目を細めた。この人が母親か。意外と普通の人だ。

「そうですね。あの、里恵はいますか？」

明は愛想笑いを浮かべる直史に視線を向けた。彼女の名前を呼び捨てするなんて、と驚いたからだ。「『めんねえ、今いないのよ。どこへ行つたんだか』

ど、すまなそうな顔をする。そうですか分かりました、と直史は言い帰る様子を見せたので明は彼の後ろで軽く頭を下げた。

「どうに行くの？」

マンションのエレベーターに乗り込む直史。返事が返つてこないので、仕方なく明もエレベーターに乗る。直史は『10』と書かれたボタンを押した。

「何しに行くの？」

「屋上だ」

短く答える。屋上に何しに行くの？と聞きたくなつたが、エレベーターはどんどん上昇して行き、既に五階を過ぎたので着けば分かることだと思い何も言わなかつた。

上昇する時特有の、耳鳴りが止まつた。エレベーターは一瞬がくと揺れ、その後ゆっくりと扉が開いた。直史は降りるとまっすぐ階段の方へ向かい、屋上へと上つてゆく。明は黙つて彼の後を付いていった。上り終わると、上部が曇りガラスになつたドアが現れる。直史がドアノブを回すとギイツと音が鳴つた。

屋上に入つてゆくと、里恵の後ろ姿が明の田に入った。

ラフな普通の格好だ。灰色のパーカーに長めのGパン。落下防止の柵に組んだ両手を乗せている。足音で気付いたのか、里恵は振り向く。明と直史の姿をとらえると予想していなかつたのだろう、驚いた顔になつた。里恵のすぐ田の前まで歩いてゆくと、直史は

「よつ」

と軽く右手を上げた。里恵は明のことを見つめながら見つめ、彼に向き直り不機嫌そうな顔で言つ。

「何でいるの」

「お前に用があつた」

すると里恵は鼻で笑つた。

太陽の下、彼女の目の人間に出来た青黒いくまが目立つていた。あまり健康そんには見えない。その姿が色々と無理しているように思え、明はつい声をかける。

「今井さん、」

言つてからしまつた、と思つた。また、話の内容を考えていない。

「あの、怪我はしなかつた?」

言葉が口をついて出て来た。里恵は明を見つめ白嘲氣味に笑う。

「なーんだ、見られちゃつたのか

失言した、と思った。彼女の、あの血を浴びた姿を見てなければ  
言えないことだ。明がうろたえていると、

「あの血は、確かに杉沢の物だよ。しばらくして野次馬しに行つた  
時、ふとした拍子に付いたからトイレで拭いたのか。ただ、  
それだけ。他は何もないよ」

そのことを知らない直史にも分かるように詳しく述べた。

「お前に、渡したいものがある」

ちゅうど良いタイミングだと思つたのか、直史は口火を切つた。  
明が横田で見ると、彼は既にあのシャーペンを後ろに握つてゐる。

「何?」

「杉沢が落ちた場所に、これが落ちていたんだ」

里恵に見えるように手を開く。それがすっかりと見えるようにな  
った時、里恵の顔色が変わつた。

## 第9章 他人同士。

直史の手にあるシャーペンを無言で見ている里恵の目は、大きく見開かれていた。怯えているように見える。

「なあ、教えてくれよ。どうして今井のシャーペンがあそこに落ちていたんだ？ 野次馬、つていうのは嘘だよな。だって、それならすぐ気付いて拾うはずだ。移動教室もないのに筆箱から落ちた、つていうのも有り得ない。多分制服のポケットから落ちたんだろう。よほど急いでなければ、落けることはない、そうだよな？」今井

直史はすがるような目つきで里恵を見ていた。里恵は足元に視線を落とし何か言おうと口を開くが、返す言葉が見つかなかつたのだろう、再び口を閉じた。直史は無理矢理里恵の手にシャーペンを握らせた。

里恵は無言でシャーペンを目線の位置まで持つてきてまっすぐと見つめる。明は戸惑つて何も言えなかつたし、何も考えられなかつた。隣の直史の顔をうかがうと、切実な眼差しを里恵に向けていて、やはり否定してほしかつたのだろう、本人の口から。

「疑つている訳じゃないんだよ。ただ、今井の口から真実を語つてほしいんだ。ちゃんと、説明してほしいんだ。事故が起きた時、今井は杉沢のそばにいた。違うか？」

里恵は顔を上げる。直史と目が合つと、切羽詰まつた顔から一変、観念したかのようなあきらめの表情になつた。

「やつだよ

つなるよひな声で認める。

「でも」

やつと息を吸つと、一息で言つた。

「アタシは杉沢を落としたりなんかしてにいない。あの事故と関係ないのかつたら嘘になるけど、何もやっていないんだ」

明は無言で彼女を見つめる。里恵と直史は小さい頃から知っている、きっと仲も良かつたのだろう。自分が発言するところではない、そう思つていた。

「やつか

直史が言つた。

「分かつた。じゃあ、これ以上は何も聞かない

明はびっくりした。まだ、分からぬことはたくさんある、なのにこれで終わり？ そんなあぶらりんの状態でいいといつのか。

「うん

里恵が小さく囁つ。

「帰りう、江川」

明は曖昧につなぎいた。

「じゃあな」

と直史が短く言い里恵に背中を向いたので、明は慌てて彼女に

「またね」

と声をかけて彼につぶやく。その時、後ろから里恵に声をかけられた。

「ねえー！」

明と直史は振り向く。

「……また、来てくれる」

明は一瞬嬉しくなったが、すぐに自分に言つたのではないと思い直す。和泉に言つたんだろうな。そう思つとちょっとびつてしましくなる。

「江川さんもや」

里恵は白い歯を見せる。どうこう意味なのか理解したとき、明はすごく嬉しくなった。だから満面の笑みを浮かべ、思い切りうなずいた。

「ここから帰れるか？」

「大丈夫、ほとんど一本道のよいなものだし」

Hレベーターを降りた一階のフロアで、直史は明に言ひ。

「どうもな、付き合つてくれて」

「うん。でも……和泉は氣にならないの？ 本道の」とが

自分は氣になる。昔から、知らないことがあると明は不安になるのだ。直史は宙を見つめながら、

「そりや、氣になるよ。でも、今井は何もしていなくて言ひこ、信じてるから。あいつのこと」

と言い切つた。それから帰らうとした時、直史は表情を曇らせてぼつりと言つた。

「何が、あつたんだと思つよ。誰にも言つたくないことが

思いつめた顔で、うん、とうなずく。ただ、何があつたのか分からないと、生ぬるい水のような不安が胸に押し寄せてきて、たまらず直史に聞いた。

「和泉は、このままいいと思ってるの？ 知らないまま」「俺は逆に、このまま知らない方が良いと思つ。といふが、知りたくない」「何でー？」

明は思わず大声を出した。

「今井自身が誰にも知られたくない」となんだから、知らない方が幸せだと思つし、聞きたくない。……俺は、あいつの苦しみまで背負いたくはないんだよ」

「そんなのつて……」

しかし続く言葉がなかなか出て来なくて明は目を伏せ、コンクリートとの床にある直史の大きなスニーカーをじっとにらむ。里恵を気遣つて聞かなかつた訳じやない、直史は知るのが怖かつたんだ。知つてしまつたら、彼女が感じたであろう負の感情が自分の心にも流れきてしまつから。

その内やつと湧き上がつて来た感情を表す言葉が見つかり、彼と目を合わせると鋭く言い放つた。

「そんなのつて、自分勝手だよ……！」

「そんなものさ。所詮他人だし」

直史がため息まじりに言う。別れの言葉も交わさず、明は逃げるようになるとマンションを飛び出した。

明日は敵になつてゐるかも分からぬ人と喋つて、遊んで、それらはあまりにも刹那的で無駄なこと、でもそんなものなのかもしない、と人生に見切りをつけ始めていた明にとって、直史と里恵の関係はある意味衝撃的だつたのだ。派閥も何もなく、天真爛漫に遊んでいた子供の頃に知り合つた彼と彼女は、例え何十年も話さなくても、深い絆で結ばれていると思っていた、けれど。

「結局、他人同士なんだ」

屋上で見たものと変わらない青い空を仰ぎながら、明けつぶやいた。

## 第10章 第一回進路希望調査

杉沢のいない教室は平和だ。問題も起きず、授業も妨害されることがなく穏やかに進む。あまり嬉しいことではないが。退院するのはまだまだ先のことだらう。里恵はもう十日以上学校に来ていないし、直史とはあれ以来口をきいていない。もうすぐ五月がやってくる。

「……死んだ」

机にあごを乗せたナツキが先ほど返された数学の答案用紙を見ながらつぶやいた。

「ひひひひ、まだ死ぬのは早すぎるだ」

明はおどけて言った。点数はそこだけ紙が折り返されているので分からぬが、教師の口から出る正しい答えを書き写した赤字の多さからして、事態は深刻だ。

「気にするなつて。ナツキ数学以外は良い点数だし」「でも内申がなあ……」

明の胸がちくり、と痛んだ。内申、それは受験する高校へ送られる通信簿。

「ナツキ、高校どこ行くの？」

「市立川田、とか出来れば行きたいねえ」

そう言つて答案用紙を適当に机の中に突っ込む。明は意外の感に

うたれた。自分の席で提出期限の過ぎたノートにナツキから借りたノートを見て「写す」紀子に田をやる。

「紀子ちゃんもそこに行きたいやつて言ひてたよねえ」

「そうだけ」

今回の実力テストで、ナツキと紀子は五十点以上の差があつたらしい。市立川田は普通より少し頭の良い高校だった。紀子はともかく、ナツキはきわどいような気がしたが、口には出さなかった。それにしても紀子は本当に頭が良かつただなんて、いつも眠たそうな目をした彼女からは想像が出来ない。前に里恵の言葉で泣き出した時、ナツキが言つた『すついぐ』といつほどではないが。

「スマイリーせんじに行くの?」

頬づえをつきながらナツキが聞く。明は一瞬固まり、返答につまる。ようやく無理に笑みを浮かべ、

「まだ、分からないな」

とだけ答えた。考へていなかつた訳ではない。どこにも受からないほど頭が悪い訳でもないと思う。ただ、行きたいところが見つかなかつた。高校を卒業し、その後のこともまったく分からなかつた。自分はいつたい、どこに行くのだろう? そう考へる度、先の見えない不安が押し寄せてくる。こつそり直史に視線を移す。笑つて男子と話す彼、きっと偏差値の高い高校に行くんだろうな。

明の視線に気付いたのか、ナツキも直史を見ながら言つた。

「和泉とかは、どうせ浦高辺りに行くんだろうね」

公立では県内トップの浦吉高校のことだ。頭の良い大学に行って、給料の良い仕事に就く、まるであらかじめルートが決められているかのような幸せな人生がきっと彼には待っている。羨望と少しばかりの妬みが交じった眼差しでもう一度直史を見た。

それが配られたのは翌日のことだった。

「進路かー」

『第一回進路希望調査』と書かれたわら半紙を明は見ながら鉛筆を手でもてあそぶ。斜め前に座る直史に目をやると、彼はもう書き始めていた。提出日は三日後だ、その言葉を聞くと明は丁寧に一つに折り、クリアファイルに挟んで机の中にしまった。

提出日前日、担任が言った。

「誰か今井の家を知っている人はいるか？ いたら進路希望調査の紙を届けてやってほしいんだが」

しかし手を挙げるものは誰もいない。直史を見たが、だらんと下げた右手はまったく拳がる様子が見られないで遠慮がちに明は手を挙げた。

掃除の時間、明は直史をつかまえた。

「ねえ、何で手挙げなかつたの？」

自分のとがつた声が耳につく。

「他の奴の目もあるし、江川はもう行けるだろ?」

他の奴の目つて……。明は手に持つまつきで彼の頭を一撃してやりたくなつた。

「そんな目で見るなよ。『めん』でも、無理なんだ」

「もういいよ

明はそつ吐き捨てて直史から離れた。そしてふと氣づく。女子にはあんなにほつきついたことがないなあ、って。

わずか数日前のことなのに、やけに懐かしく感じる。あの無人の公園や、そびえ立つマンション。今日は一人だから前より緊張する。深呼吸をして呼び鈴を鳴らすと、里恵の母親が出てきた。

「あの、里恵さんと同じクラスの江川ですけど、これを渡すよ」  
頼まれて

進路希望調査の紙を差し出す。しかし母親は受け取らず、

「あい、わざわざありがとねえ。里恵は今自分の部屋にこもるから、  
どうぞ上がっていいって

と言つので明は驚いた。

「いいんですか？」

「直接渡した方がいいでしょう。きっとあの子は呼んでも来ないから。友達が遊びに来ているみたいだけど」

友達、か。里恵の友達とはどんな人だろう。明は気になった。だから、

「じゃあ上<sup>う</sup>がります」

はつきつとそう告げた。

おじやまします、と言つて明は黒いスニーカーを脱いで端に揃えた。両端にダンボールが置かれた狭く薄暗い廊下を、母親の後をついて行く。リビングの手前にあるドアを母親はノックした。

「里恵、入つてもいい?」

返事が返つてくると、彼女はドアを開けて首を入れ、明のことを簡単に説明した。

「入つてどうぞ」

と促され、明はどきどきしながら部屋に入る。里恵は小さなテーブルの前に座つていた。テーブルの上にはコーラが入つた二つのコップが置いてあつた。そういうば友達の姿がない。

「あの、これを先生に渡すよつ頼まれたの」

「あ、後ろ閉めて」

明は慌てて背後のドアを閉めた。

「何の紙?」

そう聞かれたので里恵の元まで歩いてゆき、進路希望調査の紙、と言つて差し出した。

「ふうん」

里恵は受け取るとまじまじとその紙を見た。

「こつ提出口?..」

「明日」

「江川さんはもう出した?..」

「まだ」

明の進路希望調査の紙は空白のままだった。母親にも相談したが、『そんなのお母さんには分からなによ』と言われてしまったのだ。

その時、いきなりドアが開いた。現れたのは、すらりとしたとびつきり肌の白い少女。切れ長の目に長い漆黒の髪。美人だ。淡いメイクもしているだらうか、明は言葉を失つた。

「あ……」

少女は戸惑いの色を見せた。明が何か言おうとするが、里恵が説明した。

「この人は、アタシのクラスメイト。先生から頼まれてこれを届けに来てくれたの」

手に持つた紙をぴらぴらと揺らした。

「江川です」

明はぺこりとお辞儀する。

「あ、安藤です」

少女が頭を下げるとき長い髪がさりげと揺れた。彼女の頬は紅潮していた。明はそろそろ帰ることを里恵に告げようとしたが、

「江川さんもコーラ飲む？」

と聞かれた。

「でも……」

「ああ、別に気にしないで。斐羅、いいよね？」

斐羅と呼ばれた少女はうなずく。だから明は遠慮がちに腰を下ろした。里恵はテーブルに手をついて立ち上ると、コーラとコップを取りに部屋を出て行く。斐羅は明に一礼すると、テーブルの前に座った。彼女は黒い服に白いGパン、大人っぽい服装だ。

「安藤さんって、何歳なんですか？」

「あ、里恵と同一年です」

彼女がうつむき加減に答える。高校生かと思っていたので、明は少し驚いて聞いた。

「そうなんですか。え、じゃあどこの中学校？」

「芝山中学校……」

ドアが開き、里恵がコーラの注がれたコップを手にして入ってきた。器用に足でドアを閉めると、明の前に、

「はいよ」

と「コップを置いた。

「ありがとー」

両手でコップを持つとぐびぐびと飲む。炭酸がのどを刺激し、明は少し涙ぐんでしまつ。

「それで斐羅さあ、本当にこりの?~」

「うん。塔のカードも出でていたし、私には見えた。空想の産物かもしけないけど」

「いや、斐羅は能力があると思つから実際にいたんだね!ナビさあ、でもやっぱりアタシには信じられないなあ」

「あの、何のお話を……?」

明は田を白黒させながら一人の会話に入り込んだ。

「ああ、アタシの部屋に幽靈がいるかいなかつて話

「」の部屋に、ユーレー……?

「何ですとー?」

思わず声を出していた。

「ちょっと、そんな怖いこと真面目な顔して討論しないでくださいよ!

「幽靈つて、あのヒュードロドロ……つて出るやつでしょー?~」

言しながら膝をついた体勢で相手に手の甲を見せ両手をぶらぶらと揺らす動作をする。

「江川さんって面白い奴だなあ

里恵が高らかな笑い声を上げた。実際、明には笑い事ゼンジではなかつた。

「安藤さん、幽霊見えるの？」

控えめに笑つていた斐羅は真顔になると「べつとひなずいた。

「幽霊、今ビニにこる？」

明は膝で歩き斐羅に密着する。すると彼女より先に里恵が声を作り答えた。

「後ろに立つよお……」

「やだやだやだ！」

「せり、髪の長い女の子が……」

「里恵、悪ふざけはいけないよ」

あきれた声で斐羅が言つた。

「だいたい、髪の長い女の子じやあまるで私じやない」

「あ、確かに」

「安藤さん、今はいないの？」

明が知りたいのはそれだけだ。斐羅は部屋全体を見渡すと、小さく言つた。

「いないと思つ」

その言葉に安堵する。急に力が抜け、先ほどの会話を思つ出した。

「今井さん、おどかすなんてひどいよー。私本当に幽霊とか苦手なんだから」

「いいじゃん。夏だし」

「……まだ春です」

「それよりも、そろそろ斐羅から離れたらい？」

気が付けば明は斐羅の服の裾をつまんでいた。彼女の髪が明の喉元をくすぐる。

「あっ、『めんなさい』…」

「ううん」

明はすぐさま斐羅から離れた。彼女の顔面は真っ赤になっていた。赤面つながりで前教室で派手に転んだ時のクボタを思い出した。それにしても、こんな大人しそうな人が里恵の友達だなんて。斐羅について知りたいと思った。こんな気持ち、里恵と初めて喋った時以来だ。

窓を見ると、いつのまにか日没が始まっていた。

## 第1-2章 小石は死ぬ。

「直史、じゅうじの？」

和泉直史だよ、と言いつたまでも誰のことか分からなかつた。彼の顔が浮かび、明は里恵の背後にかけられた黄ばんだ世界地図を見つめた。

「和泉があ」

複雑な気持ちになる。里恵は、直史のこととじう思つていいのだらうか。

「なおくんか」

ぱつぱつとぶやいたのは斐羅だつた。

「え、和泉のこと知つてるの？」

「だつて斐羅とアタシ同じ小学校だつたもん」

前髪をかきあげながら里恵が説明する。わざといしその仕草、少しだけ彼女を身近に感じた。

「いつから友達なの？」

「小四くらいじゃん」

「そりなんだ……」

幼なじみに入るだらうか、うん、さつと入る。里恵と斐羅が厚い

膜で包まれているようで、明はこの部屋にいるのが少し息苦しくなつた。自分は場違いかもしれない。まるで天井が迫つてきそう。でも、これだけは聞いておきたかった。先ほどの幽霊議論の中で気になつた言葉。

「塔のカード、つて何？」

「ああ、タロットカードの話」

さらりと里恵が答えた。明はまだ話が飲み込めない。

「タロットカード？」

「知らない？」

「いや、知ってるけど……」

「そのタロットカードで斐羅がこの部屋について占つたわけ。そしたら塔のカードが出たんだよ」

「それって、どういう意味を持つたカードなの？」

「さつきから質問ばつかだな」

里恵が歯を見せて笑う。だつて、ここは自分の知らない世界なのだ。少し変わつたギャル系少女に、見とれてしまふほどの美貌を持つた靈感少女。この廃れたような四角い部屋に射し込む夕日陰は里恵が背中でさえぎられていて、彼女の顔に出来た陰影がとても美しい。

「塔のカードが持つ意味は、災難や危険とかなんですか？」

斐羅が不安を帯びた声で言つた。テーブルに視線を落としながら髪を手ぐしですいている。明はそうなんだ、としか言えなかつたかが占い、などと笑い飛ばせる雰囲気ではない。

「大丈夫だよ。アタシは」

「分かつてる」

「斐羅は大丈夫?」

「大丈夫」

淡々とした会話。明は心の中でうなる。分からぬ、つかめぬ、自分は入ってゆけない。壁にかけてある時計が、聞いたことのあるようなメロディーで六時をまわつたことを知らせた。

「あっ、じゃあ私もそろそろ帰るね!」

明は明るい声を出す。実際、帰らないといけなかつた。腰を上げると里恵もすっと立ち上がり、

「そつか。じゃあ

「うん。……今井さん、明日は学校来てね」

言った瞬間、彼女の顔に険悪なものが漂つた。

「言ひなよ。アタシはそういう言葉が大つ嫌いなんだ。もつと考えろよー斐羅がいるんだし」

ひとりで謝るひとしたが、言葉がのどにつまつて出でこない。視界の端に斐羅をとらえる。彼女は背中を向けたまま、微動だにせず。SOS信号を必死に送つたが、振り向くことはなかつた。

「……」  
「許せない」

「……」  
「……」

明は言ご返さうとしたが、斐羅の手前みつともない、止めておく。  
里恵に、

「帰る」

と一言言ご、背を向ける。ドアノブをひねって廊下へ出る。閉めるために身体の向きを変えた時、ドアの隙間から部屋をちらりと見る。縮こまつた斐羅の背中に里恵が手を当ててこる。何故だらう。湧き上がる疑問を頭の中で整理しながら、明は今井家をあとにした。

明は道端に落ちた小石を蹴る。小石は宙を舞い、やがて道路に飛び出した。一台の車がやってくる。しかし、一度信号機の近くだったので小石の手前で車はとまつた。信号が青になつたら、明は横断歩道を渡り、小石は死ぬ。

外はもう薄暗い。煮えたぎつた落陽が落ちてゆくその時、明はあの部屋で時を過ごした。そしてあの部屋の主を怒らせた。今、里恵は何を思つているのだらう。からすが鳴きながら明の頭上を通り過ぎた。あれほど怒るようなことだとは思えなかつた。そして冷静になつた今疑問に思つる言葉、『斐羅もいるんだし』。斐羅の背中に当てた手。つながるようでつながらない。

「あの言葉は安藤さんにも失礼だつたのかな」

辺りに誰もいないので声に出してみる。すると余計分からない、明は首をかしげた。今井さんてキレイやすい、のかな。直接怒りの言葉をぶつけられると明は腹ただしいというよりも不安になる。気が付かない内に、怒らせるようなことを自分が言っていたなんて。里恵も結局、自分とは他人同士なのだろうか。直史の言葉がよみがえる。

そこまで考えた時、信号が青に変わった。とまっていた車は排気ガスを吐き出しながら走り出す。タイヤがあの小石を踏み跳ね上がった。小石は向こう側の歩道に落ちる。

小石は、死なかつた。

## 第1-3章 サンキュー。

放課後、教室に残るのは里恵と明、そして担任。無精ひげをはやした担任が椅子に座つたまま、

「進路指導の先生が集計を取らないといけないんだ。だから、明日には提出してもらわないと困るんだよ」

「……分かりました」

もういいや。適当に近くの高校名を書いて提出すればいいじゃないか。明は妥協することにした。しかし、隣に立つた里恵は食い下がる。

「だつて高校行く気ないし」

「なら就職希望に丸を付けて提出しなさい」

「就職？ しないよ」

里恵がそう言つて鼻で笑つと、担任の眉がぴくぴく動いた。

「じゃあどうしたいんだ」

担任が机に身を乗り出した。すると里恵はそっぽを向いて何も答えない手段に出たようだ。本当に強いな、この子は。

「どうあえず江川はもう帰つて良い。明日は必ず持つて来るんだが

あ」を触りながら担任は少し困り果てた顔をする。里恵の扱いに悩んでいるらしい、新米教師じゃあるまいしと明は毒づいた。机の

上の通学バッグを持ち、さよならと挨拶をし教室を出る。振り返ると、担任がぐだぐだと高校へ行かなかつたらどうのこのと世間論を語りだしたのが目に入り、里恵にはそんなの通じないのこと少しだけ笑つた。

「そんなんならもう部活に来なくていいからー。」

部活動のため音楽室の扉を開けると、いきなり怒声が明の耳に飛び込んできた。ピアノの前で、部長が一列に並んだ三人の一年生に対する何やら怒っているらしー。

「ねえ、どうしたの？」

楽器を持ち出しこれから廊下で練習に入ると、さすがに部員に聞いた。

「何か、いつもへの態度が悪いんだって」

かつたるそつて答える。うちら、とこのは三年生のことを差す。一、二年は三年生に対して敬意なるものをはらわないといけない、それが暗黙のルールだった。明も去年までは敬語はもちろん、部活の先輩を見かける度に頭を下げ、何か言われたら大きくハイと返事をする、そんな日々を送っていた。

小さなことで叱られる度、私達は優しい先輩になろうと言つたものだった。その会話には今の部長もいた、なのに。

「だから、先輩に会つたらけやんと返事をする。分かつた？」

大分怒りの冷めた声で部長が言つ。涙混じりの小さな返事が二つ

聞こえた。

怒る人もいれば、慰める人もいる。共通するのは酔いしれているのだ、『先輩』という肩書きに。

「元気出してね」

音楽室を出た一年生に二年生の一人が声をかける。

「部長、性格キツいとあるから」

廊下でチューイングをしていた明は、ちらりと一年生を見る。すると、彼女達がジャージの裾を折つていて気が付いた。本校のジャージは、ズボンの裾がすぼまつていて何とも格好悪い。だから、折りたい気持ちもよく分かる。しかし、吹奏楽部には決まりがある。ジャージの裾を折らないこと。それは校則でも禁止されているが、無視している人がほとんどで二年生ともなると折らない人を見つける方が難しいのだった。

だが、吹奏楽ではそれがかたくなに受け継がれてきていて、少なくとも部活中に折っているものは皆無。

明は無性に腹が立つてきた。自分は守っているのに、一年生の分際でと思つてしまつ。チューイングを再開するがトランペッタの音はよく出でくれない。ふと、些細なことに怒る自分が情けなく思えてきた。

「よつ」

部活の帰り道、自動販売機でジュースを買つ里恵がいた。思わず人の登場に明は驚き、

「今井さん、何でここにいるのーー？」

と聞いた。

「ジャスコ行つた帰り、のどが渴いたから。一いちだつてまさか江川さんがいるとは思わなかつたよ」

確かに里恵のすぐ横には自転車がとまつている。彼女は部活に入つていない、しかもこの道の先にはジャスコがあつた。

「でも今井さん、ムカついてるんじやなかつたの」

尖つた明の声に、里恵は少し小馬鹿にしたようないつもの笑い方をする。

「ああ、別に。一いちには一いちの事情があるんだよ。ムカついてなんかいないよ、けどさ」

そこまで言つと里恵は買ったジュースを開けた。プシュッといつ音が人気のあまりない道に響く。

「ガツコに行つてないやつがそう言われてどういう思いをするのか少しさは考えてみたら? 何もそいつのことを分かつちゃいないのに、あんな軽薄に『学校来てね』ってさあ

別に軽い気持ちで言つた訳じやない。しかし、確かに自分は彼女のことをほとんど知らなかつた。安藤斐羅という友達がいるという

ことだけ。でも、今日学校に来てくれたこと、それが明には嬉しかった。これも口に出したらきっと怒られるだから、誰にも聞こえないよ、

「サンキュー」

とつぶやいた。ちょっとだけ、里恵口調で。

## 第14章 バージン。

「江川さん」

顔を上げるとこきなり缶が飛んできた。とつ もに 缶をつぶりながらも、どうにかキャッチする。それは、りんごジュースだった。しかも、まだ未封の。

「やるよ」

里恵は自分のジュースを一口飲んでにこにこと笑った。

「あ、ありがとう」

戸惑いながら缶のラベルに目を通す。

「賞味期限は切れてないから安心しなよ。たった今買ったやつだし」「やつこいつ訳じやないけど」

すると、このジュースはわざわざ自分のために買ってくれたのだろうか。里恵を愛おしく想う気持ちが明の心に広がる。明は上を向いて一気に飲む。冷たい液体がのどを通り胃に落ちるのを感じた。

「江川さんてやあ」

後ろにある自転車のハンドルに手をかけて言つ。

「バージンなの？」

明はむせかえった。水が入ったときのよつて鼻が痛くなる。

「ちよつと、いきなり何言ひのー。」

なおも咳き込みながらポケットティッシュを取り出して口を拭いた。

「あ、意味通じた？」

「当たり前だよ」

里恵は悪氣のなさそうに、

「いや、もう中三だし彼氏とかいるのかなつて  
「だからつて何故そこから聞くー！」

まるでコントのようだ、と明は思つた。にじみ出た涙も拭き取る  
と、ティッシュを丸めて自動販売機の横にあるごみ箱めがけて放り  
投げた。

「ゴーール。

「まだに決まつてるよ」

言いながら顔が火照つているのを感じた。今井さんは？ と聞く  
ほどの勇気は持ち合わせていなかつた。だつて、援助交際疑惑は晴  
れていないから。

「何だ」

里恵も飲み終わった缶をごみ箱にぽいと投げ入れて笑つた。

「斐羅、人見知り激しいんだよね」

「みたいだね」

斐羅の赤くなつた顔を思い出す。彼女は赤面性の氣があるのかもしれない。

「美人だよなあ」

そう呟くと、里恵はブレザーのポケットに手を入れて、

「でも、昔はダチに『目が小さい』とか言われたりしてたんだよ」「えつ」

「まあ、今は目が『力いやつがもてはやされる時代だからね、斐羅はそう言われる度へこんでた。でも、普通に可愛いよな、特に化粧し始めてから』」

確かに斐羅の目はさほど大きくはない。だけどああいうのを和風美人といつのか、とにかく綺麗だと思つ。

「化粧、いつから始めたの?」

「今年に入つてじゃん」

「へえー」

明はまだ化粧をしたことがない。しかし少しだけ興味はあつた。自分が化粧をしたら、どういう顔になるのだろう。

「もししてみたかつたら、今度斐羅に言つてみれば?」

考え方を見透かしたかのよつて里恵が言つた。その後、付け足した。

「まあ、江川さんはそのままで十分可愛いけど」

「いや、そんなことないよ。全然」

とつてに否定する。褒められたらそんなことないと答える、それは長年の学校生活で身に付けた『技』だ。しかし里恵は突然ごみ箱を蹴った。倒れはしなかつたが、大きな音が鳴り響く。明はびくりと肩を動かした。

「何かさあ、そういうのやめない?」

「そういうの、ついて?」

「わざと否定するの。何で、お前らはありがとつて素直に受け止めることが出来ないのか?」

里恵の視線に圧倒され、明は押し黙つた。お前ら、つていうのはきっと私みたいな建て前ばかりの人のことだらうな。そして、それはほとんどの人に当てはまる。里恵は少し優しい口調になって、

「せめて、アタシの前くらじでは本音で話してもいいじゃん

里恵は、自分を認めてくれたのだろうか?

「……いいの?」

彼女は返事をしなかつた。そっぽを向いている。照れているのだらうが、やう思つと自然と笑みがこぼれた。

「また、安藤さんに会わせてくれる?」

「うん」

風になびく髪を押さえながら返答する。

「結構暗くなってしまったね。それとも、帰らなこと」「あ、どうすんの？ 進路希望の紙」

自転車の鍵を開けながら里恵が聞く。

「適当に書くよ」

「ふうん。アタシは出でなこなさ」

低く笑つ。

「また、担任がつるやへまつてゐるごじゃなこ」

「せつとくわ」

里恵の意志の強さに明は感心した。でも、いりこつのを世渡り下手といひのではないか。

「じゅあ」

「うそ、」

自転車にまたがり手を上げる。

また明日、と書おくとして明は口をつぐんだ。彼女は、明日来るのかどうか分からぬのだ。

「またね」

と言い直す。明は少し歩いたところで振り返った。里恵はただ前を向いて自転車を飛ばす。遠ざかる茶色い髪。他人同士、でもただの他人じやないと漠然と思つた。

## 第15章 三者面談。

午後一時をまわったところだ。明は廊下に置かれた椅子に座つて、隣にはスーツをまとつた母親も座つている。目の前には明の教室があつた。その時教室の扉が開き、背の低い厚化粧の女性が出てきた。続いて出てきたのは、

「あ、和泉」

直史は扉を閉め、明の母親に一礼すると、

「よつ」

と言つた。

「江川が次なんだ。三者面談」

「うん」

「頑張れよ」

そう言つて笑みを浮かべるが、ビヨンとなぐきこちなかつた。江川さん、と教室の中から声が聞こえ、母親と明は腰を上げた。

「江川は、川田総合高校だよな」

手元にある明が出した進路希望調査の紙を見ながら担任が言つ。

「は」

「どうしてそこがいいんだ?」

言葉につまる。何度も志望動機について考えてみた。しかしあそこのことは何一つ知らなく、教室の本棚にある高校情報誌を読むのも、クラスに誰かいると気が引けた。だって、皆まだ真剣に考えてはいない。

「近いからです」

苦悶の末そう答えると、担任はあからさまに眉をひそめた。隣に座る母親の視線が痛い。

「まあ、まだ高校のことをあまり知らないのは仕方ないからな」「娘は、そこに入れるんでしょうか」

たまらず母親が口を挟んだ。母親に視線をつつした明は、短い髪の毛に白髪があるのを発見する。

「まだ五月ですからねえ。この先まだまだ偏差値なども変動するでしょうし。ただ、今のままだと少し厳しいかもしれませんね」

と言つてあごをかく。そうか、厳しいのか。しかしさほどのショックは受けなかつた。ここ川田市には高校がたくさんあるから、自分の行けるところに行けばいい。

「実力テストの結果から考えると、川田工業などなら余裕があると思うな」

担任の口から出た高校名に明は愕然とした。川田工業……確かに川田市で一番偏差値が低い公立の高校とかいう。自分が、そんなに頭が悪いなんて知らなかつた。明は思わず、

「私つて馬鹿なんですか？」

と聞いた。すると担任は小さな目を見開き、

「いや、そんなことないぞ。江川は授業態度も良いし、内申も悪くない。ただ、成績の波が激しいんだよな」

どういう基準で悪くないと言っているのかは不明だが、波が激しいというのは明も分かっている。平均値こそこの時もあれば、ぐんと三十番以上順位を落とすこともある。

「とうあえず、中間・期末テストが終わってみてからだな」

担任は話を切り上げる。暑いわけでもないのに、明は背中に汗をかいっていた。

「あんたさ、真面目に勉強した方がいいんじゃない？」

帰り道、母が不機嫌そうな声で言った。

「担任のあの言い方じゃあ、あんたの言つてた高校は受からないよ

断言されて力チンときた、何にも分かっていないくせに。足元の小石を蹴り飛ばすと、小石は路上駐車された車のボンネットに当たった。やばいと思ったが、気にしないようにと明は口を開く。

「大丈夫だよ。まだ先のことだし」

しかし母親はぴしゃりと言つた。

「大丈夫大丈夫って言つてゐる内に、受験は来ちゃうんだからね。二学期までには志望校が決まる子が多いんでしょ。早めにコツコツ勉強したら？」

「つむさいなあ」

つい声を荒げた。不穏な空気が漂つた。

「私、ちょっと約束してゐる友達がいるから先に帰つて」

明はそつと出ると、母親の返事も待たず逃げるよつに来た道を引き返した。

約束してゐる友達なんて、いやしないんだけどね。明にはもう行く場所が決まつていて。迷つたが、エレベーターで最上階まで上る。降りると階段を上り、目の前に現れたドアを開けた。そこには、髪の長い女の子と長身の男の子が一つ高くなつたコンクリートの上に座つていた。

## 第16章 信じ合へる。

「あれ、江川」

直史が声をかける。明はやあ、と挨拶し一人がいる落下防止用の柵の前まで歩み寄った。

「オハヨ、安藤さん」

斐羅ははにかんだ。えくぼが可愛いと思つた。

「おはよう

「今はこんなにちばじやないか?」

直史が突っ込み、明はそつだつたねと頭をかく。本当は分かつていた。でも、同年代に『こんなにちは』というかしこまつた言葉をかけるのが苦手なのだ。背中がむずがゆくなつてしまつ。明は一人の前にぺたりと座つた。

「どうして來たんだ?」

「親にムカついて」

「つーことは、三者面談の内容があまり良いものではなかつたと」

「イエス、アイドゥー」

思いつきり日本語の発音で明は肯定した。

「俺と一緒にじゃん」

直史は乾いた笑いを漏らす。

「え、だつて和泉頭良いじやん  
「でも、上には上がいるんだよ」

頭が良い、ということは否定はしない。だから里恵は、直史と仲良くやつてられたのかもしない。明は斐羅に尋ねた。

「安藤さんの学校も三者面談期間なの？」

普段ならこの時間はまだ授業中だ。三者面談期間中は、午前で帰れることになつていて。

「うそ」

斐羅は明の手を見ずに小さくつづいた。そういえば今日は敬語を使わずに話してくれてる、何だか明は嬉しくなった。

「そういえば、今井さんね？」  
「まだ三者面談だと思ひづ。……にしても遅いけど」「じゃあ今頃、先生にじめられてこるんだ。『将来どうするんだー』とか言われて」

その光景はリアルに想像出来た。それでも里恵は涼しげな顔をしているだらう。だからきつとなかなか釈放されないな。

「ねえ、そういえば安藤さん、どうこうきつかけで今井さんと友達になつたの？」

明は興味津々に尋ねた。彼女はどう見ても眞面目で、里恵と接点がないように思えたからだ。斐羅は赤くなりながらも、思い出

すかのよつに田を見つめて話し始めた。

「四年生の時初めて同じクラスになつて、なおくんが私に声をかけ  
てきたの。それで、里恵となおくん、仲が良かつたから  
『何で言つたんだっけか』

直史が話をやえぎつた。

「確か……『給食当番代わりにやつてくれ』じゃなかつた?」

「えつ、俺そんなこと言わないつて」

「言つたでしょ」

斐羅は冷ややかな視線を直史に向けたが、目は笑っていた。

「それで、いつの間にかなおくんとも里恵とも、親しくなつてたの  
かな。多分」

「へえ……」

言い終わると昔を懐かしむよつに田を細めた。優しく吹く風が心  
地よい。

「和泉は、どこの高校に行くつもり?」

明は伸びをしながら聞いた。そして足を放り出す。

「一応、浦高だけど」

出た、県内トップ高。あまりにも予想通りなので明は笑うしかな  
かつた。

「安藤さんは？」

その問いに斐羅は目を伏せた。聞かれたくなかったのだろうか？  
気まずい空気が流れ、明は下唇を噛んだ。

「やつこが前はどうに行くんだよ」

直史がぎこちない笑みを浮かべて聞く。だから明も無理に笑って、

「それが、行きたいところないんだよねー」

と頭をかきながら答えた。

「おーおー。そりゃマズいだろー

「やつぱり？」

一人の笑いが尾を引いた。

「江川、さん」

斐羅が小さく呼んだ。何やら深刻げな表情で、口は真一文字に閉じていた。

「何？」

だから明も真顔で尋ねた。斐羅は視線を泳がせ、言つか言わない  
か迷っている様子だ。

「安藤」

直史が心配そうに声をかける。彼には、斐羅が何を言おうとしているか知っているのかもしれない。

「大丈夫」

そう答えた声は震えていて、全然大丈夫そうではない。その時、屋上の扉が勢いよく開かれた。入ってきたのはもちろん彼女だ。

「三人ともおそろこじやん。本当、うざいよあの担任。しつこいつたらありやしない。……ん、何皆して暗い顔してんの？」

里恵はきょとんとした顔をしながら大股でこちらへ歩いてくる。明と直史の隣に腰を下ろすと、口の字のような形になつた。

「何の話？」

直史は斐羅の方にあいこを動かした。その意味が分かり、斐羅と田を合わせる。彼女はこくりとうなずき、

「あの」と江川さん、「

「何でだよ

里恵が泣きそうな顔をして言ったので明は驚いた。彼女もこんな顔をすることがあるなんて。

「やうだよ。無理すんなよ」

直史も止める。明は不安になつてきただ。自分の知らないことが増えてゆく。

「和泉、他人同士とか言つたくせに……」

今の状況に関係ないと、自分でも思つ。しかしこの憤りを口に出さずにはいられなかつた。

「ああ、言つたさ」

直史に見つめられ、明はたじろいだ。一二で黙り込んだらいけない、

「なのに、何でそんな顔してるの？ 安藤さんだって他人でしょ」

口が滑つた。氣を悪くさせたと思い、斐羅の顔色をつかがうが表情に変化はない、少し安心した。直史が断言する。

「他人だからこそ、俺達は信じ合えるんだよ」

## 第17章 最低な子供。

明には分からなかつた。風が吹き、髪の毛が口の中に入る。

「分かんないんだけど」

「俺達の、モツトーみないなものかな」

ますます分からぬ。ちゃんと説明してよ、と明は言った。

「小さい頃はさ、誰でも悪いことをしたことがあると思う。正直だし、世間のことを何一つ知らないからさ。でもその悪いこと、親だけはいつになつても覚えてたりするよな。あなたあの時はああだったとか、そんな小さい頃の悪事を蒸し返されたつて本人は苦しいだけだろうな。子どもは成長するにつれ変わっていくつていうのに、あまりにも身近な存在すぎるから気付かないんだろうけど。自分のしたことが消えてしまえばいいのに、と思つていても」

「……それ、誰の話なの？」

「別に、誰の話つてわけでも……。それなら、江川は何にも思い出したことないようなことないのかよ」

後悔すること、あつた。苦い記憶がよみがえつてくる。確か、あれは小学三年生の頃。明はクラスメートの男の子に髪型を揶揄されたことがあつた。泣きたい気持ちになり、だからそのままの下敷きを盗つた。しかし黙り通す根気がなく、つい他の子に漏らしたら担任にバレてしまいこつぴどく怒られた。

他人が聞いたら些細な出来事、しかしこの話を他人に話したことはない。いつか、笑つて話せる口が来たりするのだろうか。

「アタシは、クラスメートのやつ泣かせたことがあるよ」

そう言つて鼻で笑つた。

「ムカつくやつだったんだよ。大人しくてか細い女の子に悪口をよく言つてきてさ、仕返しに突き飛ばしたんだ。ちょうど雨上がりで地面ぐちゃぐちゃでさあ、そいつの顔は泥だらけになつたよ」

笑いながら暴露できる里恵はすごいと思つ。これは絶対に、思い出したくない」となどではない。ふと明は気が付いた。

「ん？ 大人しくてか弱い女の子の子つて誰」

「アタシに決まつてんじやん」

真顔で自分を指差した。すると斐羅が横目で里恵を見ながら、

「たくましい腕だったし、体育の時間は人一倍騒がしかつたような気がするんだけど。私の思い違い？」

「それはきっと勘違いだよ」

里恵は首を振つた。一人のやり取りつて面白いよな、と直史がこぼし、明は笑いながらうなづいた。

「ま、そういうことだよ」

穏やかな笑顔を明に向ける里恵の姿に何か引っかかった。斐羅に目を向けると、とっくに笑顔は引っ込んでいて口を真一文字に結んでいる。 そうだ、斐羅は何かを話そうとしていたんじやなかつたか。心の声が聞こえたかのように、斐羅は口を開いた。桃色の唇が綺麗だと思う。

「私……。最低な子供だった」

「え？」

思わず明は聞き返した。里恵も直史もうつむいているところから、どうやら知らないのは自分だけみたい。仲間外れにされているような感覚を取り払うために明はわざと明るい声色を作った。

「え、安藤さんはいい人だとと思つよ。頭良さそうだし、それに、

「そんなことない」

斐羅の声に遮られる。哀しそうな表情で、膝に置かれた自分の白い指先を見つめながら言った。

「……学校に、行つてないんです」

## 第18章 ……いじめ？

一瞬、時間が止まつたよつて感じた。明は田を見開いて斐羅を見つめる。斐羅はうつむいたまま何も言わず、唇を噛んでいた。里恵が何度も口を開いたり閉じたりしているのが田に入つたが、斐羅は自分に話してくれているのだから自分が何か言わなければと思った。

「……いじめ？」

一番始めに頭に浮かんだ言葉だつた。大人しそうな彼女のことだからあり得ると思ったのだ。しかし、斐羅は小さく首を振り、

「違うの」

と言い切つた。明はますます分からなくなつた。どうして真面目そうな彼女が？ 困惑したまま直史に田をやる。しかし彼は明の方を向いておひす、まつすぐ斐羅を心配げな瞳で見つめていた。

沈黙が重い。明はいつも、沈黙にならないよつ一生懸命に会話をつなげてきた。そのためなら時に嘘だつて言つたりもした。でも、今ばかりは嘘を言つことなんて出来ない。斐羅が何か言い出すのを待つしかなかつた。

「斐羅はさ、すいべ眞面目なんだよ」

里恵がぽつりと呟つた。触っている髪の毛を見つめたまま、言葉を続ける。

「だから、仕方ないんだよ」

「どうして意味？」

明は眉根を寄せた。眞面目なのにどうして学校に行っていないのか、理解が出来なかつた。

「眞面目な奴は学校なんて腐つた場所には行かないんだよ」

里恵は明に視線を移した。

「何それ。じゃあ、学校行つている奴は馬鹿だつてこと?」

たまらず明は口にした。こんな風に学校を見下してばかりで、ただ単にあまり学校に行かない自分を正当化しているだけのような気がしたのだ。

「やめろよ」

直史が口を挟む。里恵が他人を馬鹿にするかのような発言をするのはよくあることだから、さすがに呆れているようだつた。

「学校に耐えられなかつたの」

明は斐羅に視線を移した。横を向き遠くを見ているかのような視線で、慎重に言葉を紡ぐ。長いまつげが綺麗だと思った。

「行事をするのも辛かつたし、友達と喋るのも嫌だつた。だから」「何で辛かつたの?」「うん……」

斐羅は曖昧な返事するとまた口を閉じてしまった。

「だからさ、学校つて馬鹿ばっかじゃん。斐羅はそれに耐え切れきれなくなつたんだよ」

「違うよ」

斐羅が否定した。里恵は意外そうな表情になり、

「だつて斐羅、学校が嫌になつたから行つてない訳だろ？」

「そうだけど、馬鹿ばかりだからつて訳じやない。あくまでも、私が耐えきれなくなつただけ」

「ていうかさあ、やつぱり行つた方がいいって。受験生じゃん」

さう直史が言つと、斐羅はとても哀しそうな顔になつた。

「なおくんも分かつてくれてなかつたんだ」

明は直史と同じ気持ちだつた。学校は面倒くさいことじゅうだけど、絶対に行つていた方がいい。行かないのは单なる逃げだと思つ。けれど、斐羅の目が赤いことに気付いていたから口にすることは出来なかつた。

「お前、馬鹿じやねえの。学校なんて人を駄目ににするだけじゃん。教師みたいな」と言つたよ」

里恵は立ち上がり声を荒げた。明は不安な気持ちで里恵を見上げる。彼女は隣に座る直史をにらんでいた。

「アタシは、斐羅は間違つているとは思わない」

明は斐羅を盗み見た。彼女の目はうるみ、しかし涙をこぼさぬた

めだろう、唇を強く噛んでいる。

最低な子供『だつた』と過去形で話した訳も、学校へ行つていな  
い理由も、何一つ分からなかつた。なのに里恵は分かつていいよう  
で、明は仲間外れにされたようで少し寂しかつた。

## 第19章 もつ駄目だな。

明はふと以前直史が言つた言葉を思い出し、不機嫌そうな表情をあらわにしている彼に言葉をかける。

「ねえ、和泉。前、『あいつはあれで良かつたんだ』とかつて言つてたよね？ 今井さんは良いつていうの？ それって矛盾じゃない？」

「何、アタシのこと何か言つたのかよ」

里恵が口を挟むと、直史は『しまった』といつ顔になった。

「今井の場合は、ほら、全然来てないつてわけじゃないし」「でもあまり良くないんじゃないの？」

「そりだけじや……」

里恵はイライラした様子で身体を揺すつていた。

「つまりさ、アタシが昔酷かつたからでしょ？ マシになつたってことを言いたいんだり。つーか、勝手に人のこと分析するなよ」

どういう風に酷かつたというのだろう。明は気になつたが、里恵がまた喋り出したので黙つているしかなかつた。

「マシだからつていうなら、斐羅だつてやうじやんか。学校に行つていた頃よりはずつと良こと思つよ」「でもまあ」

直史は、あぐらをかいている足の組み方を入れ替えて反論する。

「今の安藤、あんまり楽しそうには見えねえよ。体調を崩す」とだつて多くなつたし

言い終わると斐羅をちらりと見た。斐羅の背中はどんどん曲がり小さくなつてゆく。あまり自分の話はそれたくない、そんな様子だつた。

「でも今の方が精神的には絶対マジだつて。斐羅も何か言い返せよ」

里恵の言葉に斐羅は顔を上げた。右田を隠す長い前髪を脇に分け、「なおくんは正しこよ。私は、もう駄目だな。浦高に行けるといいね」

首を傾け、直史ににこりと笑いかけた。斐羅はビリビリの気持ちで諦めの言葉を口にしたのか。考えるとその笑顔も痛々しく感じてしまい、明は思わず言つた。

「大丈夫だよ。色々な道があるし、諦めることなんてないよ」

すると斐羅の笑顔はしほんでいった。マズいことは言つていなければつもりなのに、と心拍数が速くなるのを感じた。

「お願いがあるんだけど」

無表情で明を見つめながら里恵は言つた。

「……何?」

「 もへ、じるには来ないでほしこんだ」

そう冷たく言い放つた。直史に視線を移し、

「 直史もだよ」

と囁く。

「 え、エーハ?」

笑つて尋ねてはみたが、頬の筋肉がこわばつていて泣きそうな顔になってしまったかも思つた。  
シコックだつた。

「 お前ら、分かつてねえよ。所詮、学校に毎日通つて先生の言つことを聞く操り人形なんだ。だから斐羅のことなんて分からないんだ」  
「 何だよそれ」

直史が立ち上がつた。止めて、と斐羅が小さい声で言つたが一人には聞こえない様子だった。

「 先生の言つことも聞かないで遊び歩いてる自分を正当化していふようにしか聞こえねえよ」

直史の言つてこぬ」とせ合ひてこぬと思つ。だけどじぶんな風に言

い合っている姿、明は見たくなかつた。明は中学生になつてから一度も言い合いをしたことがないし、見たことだつて皆無に等しかつた。散々陰口は言つても本人には決して言わない、そんなものだ。

「正門化なんて感じるのは図星だからじやないの」

里恵は鼻で笑つた。どう見ても挑発しているよつこしか見えない。

「 もう止めて」

今度は一人にも聞こえるよつこに斐羅が叫んだ。みんなの視線が彼女に集まるとい、斐羅は背筋を伸ばし、

「 なあくん達が正しこよ。だから、もう止めて」

『達』といつことは自分も含まれていてるのだよつ。

「 そんなことないよ」

里恵の言葉にも斐羅は首を振る。

「 私が止めるよ。ここに来る」と

口元に微笑をたたえ、優しく言つた。

## 第20章 泣いてた。

何言つてんだよと呟ねつとしたのかもしない、里恵は口元を歪ませた。

が、頬の筋肉がつてしまつたかのような不自然な形で口の動きは止まつていた。斐羅の強い眼差しが本氣で言つてこのだといふことを物語つている。それくらい斐羅ははつせつと言つた。

「うん。私が止めるよ」

斐羅がもう一度言つた。自分に言い聞かせるよつとつなずきなが  
ら。

「……何言つているんだよ」

「『めんね、里恵』

斐羅は立ち上がりお尻をはたぐ。このままじゃ本当に来なくな  
るかもしれない、謝るのは自分だと思つた。でも、どんな風に謝つ  
たらいいのかどうしても分からぬ。グループからはみ出さない口  
ツはよく知つていたけれど、そんなの今は全く役に立たなかつた。

「逃げるのかよ」

苦々しく呟いたのは直史だ。ポケットに手を入れたまま斐羅を見  
据える。

「うん」

そう言つて微笑むと視線をアスファルトの地面に落として、『めん、』と再び同じことを口にした。

「じゃあ」

斐羅はみんなに背を向ける。少しだけ振り向いたその時、彼女と目が合つた。行かないで。そう明は言おうとしたが、斐羅は顔を前に戻して歩き始めた。

「待つてよー！」

里恵が落下防止用の柵を叩いて叫んだが、斐羅の歩みは止まらない。明は唇を噛みながらどうしてこんなことになったのかと考えていた。悪いのは、私？

里恵が走った。

扉を開けかけた斐羅の腕をつかみ、前に回り込む。

「斐羅、」

しかし言葉はそこで途切れ、次の瞬間には一人の手は離れていた。斐羅は里恵の横をすり抜け、やがてこちらからは見えなくなつた。

「……斐羅、泣いてた」

里恵は戻つてくると、抑揚のない声で言つて振り向いた。里恵が勢いよく閉めたため、扉はまだ揺れていた。泣かしたのも自分、なのだろうか。

「マジかよ」

「嘘なんて言つわけないじゃん」

「だつてあいつ、泣いたことないじゃん  
「だからびっくりしたんだよ」

もう「ここには来れない、明は思った。自分がいなければこんなことにならなかつたはず。一方で自業自得だ思う自分もいて、そんな自分が汚らわしくて、醜くて、本当に嫌になる。ソックタツチできちんと止めたはずの白い靴下は、とっくにずり落ちてたるんでいた。

「お前が俺達にもう来るなつて行つたから帰つちやつたんじゃねえの」

「元は直史が悪いんじやん」

小さな言い争いが始まる。責任の押しつけ合いみたいだつた。全部を引き受けて去つていつた斐羅。自分に真似出来るものではない。今井さんと、和泉と、私。

斐羅に会つ前に戻つただけかもしれないが、自分は知つてしまつた。会つてしまつた。髪の長い人見知りの女の子と。もつ、本当に来ないのかもしれない。

「斐羅がマジで来なくなつたらどうする気?」

か細い声で言った。

「……ここに来てるからつて学校に行くようになるわけじゃねえじやん。逆に悪影響のような気がするんだけど」

そして、尖つた直史の声。

「お前、そんなこと思つていたのかよ。何が他人だからこそ信じ合

えるだよ。アタシの」とも艦羅にのじても、信用なんてしてないじ  
やん」

「信用とは別問題だつて。何で分かんないのかなあ……」

「いいよもつ。やつぱり優等生には分からぬよな。……もう、お  
前来るなよ」

里恵の溜め息混じりのその言葉に明は固まつた。本当に、もう駄  
目なんだ。今後、直接来るなとは言われなかつたとしても平然と遊  
びに来れるほど明はタフじやない。

「あ、あの私そろそろ帰るね」

こんな空氣の中よく言ったと明は自分を褒めたくなつた。集中す  
る一人の視線を振り払うかのように明は元氣よく立ち上るとスカ  
ートの皺を伸ばす。

「俺も帰る」

顔を上げると既に直史は歩き出していた。つるりと感じるのはじ勢  
いよく扉を閉め、大きな音が立つた。

「……あ」

一人で話すとこのはどうだらうか。そしたら修復出来るかもし  
れないと思つたのだ。

「……」「めぐね」

[安藤さんの気持ち、本当は少し分かるな。和泉って酷いよね。あ  
あこう言い方は最低だよね。何であんな奴と友達になつたの……？]

やうにねりとじていた。しかし里恵は構まじかくと罵ば聲中を向けたまま、

「歸るんでしょ」

と冷たく言つた。拒絶だ。いつもはぶつかり合いがあつても、すぐ謝つたり他人の悪口にすり替えたりして平和を保つてきたから、こんな言葉を浴びせられるのには慣れていなかつた。心音が耳に響くのを感じながら、無言で明は走り去つた。

もうやつて、少しあつ壊れてゆく。

## 第21章 嫌だなあ。

空いでいる一つの席は、明達にとつて見慣れた光景になりつつあった。教師は出席簿に田を落としたまま欠席と記入する。近くの席の生徒はさも当たり前のように、自分机のスペースを確保するために一人の机を利用する。あれから里恵は一度も学校に来ていない。杉沢の太い声も、もう一ヶ月以上聞いていなかつた。

直史がクラスの男子とふざけ合つてゐるのを見かける度、明は嫌な気持ちになつた。あんな風に斐羅、そして里恵と別れて、何とも思つていないのでどうか。彼女達をその程度にしか思つていなかつたのだろうか。だけど本人に尋ねられる勇気なんて、自分はあいにく持ち合わせていない。

「スマイリーはどう思う？」

いきなりナツキが話を振つてきた。明は黒板を消す直史を観察していたので当然聞いているはずもなく、

「ごめん、聞いてなかつた」

と素直に答えた。ナツキと紀子から失笑が漏れる。ジャージに着替え終わつたナツキはズボンの裾を折り、制服を畳んで自分の席の椅子の上に置いた。しかしどスカートは単に丸められただけでぐしゃぐしゃ、ブレザーは片腕が飛び出していた。大ざっぱな性格なんだろう。ナツキは髪の毛を手櫛でとかしながら言つた。

「修学旅行の班さー、うちら三人じゃ一人少ないじゃん。だからどうするつて話」

「あまつてゐる人つて誰いたつけ」

近くから移動させた椅子に座つてゐる紀子は、明とナツキを交互に見る。

「うーん、あ、野崎さん達つて六人グループだから一人あまるよね？」

明が言つた。バレー部とテニス部が合体した、このクラスでは一番大きいグループだ。教室に姿が見えないことから、今日も中庭で遊んでゐるのだろう。

「でも歩美とかメグと一緒になりそうじやん。他のグループの人つてうちらのグループに入つてくれそうにないしでー」

他のグループから一人だけ抜けて明達の班に入るるなんて、誰が好き好んでするだろう。解決策は一人ぼっちの人を引き入れることしかないような気がした。

「修学旅行つていつだっけ？」

「六月一四日」

でも班を決めるのは明日だ。部屋割りも決めることになつてゐる。一部屋につき二班で三日も過ごすのだから、苦手な人とは一緒にないたくない。

「やっぱりさあ、今井さんを入れることになるんじゃない？」

そう言つた紀子は心なしか沈んだ表情だ。

「えー、超ヤなんだけど」

とナツキは言い、

「嫌だなあ」

と明は呟いた。あんな別の方をしてしまった以上、同じ班で寺を回つたり、土産物屋をぶらぶらしたりするのは避けたいところだ。仲直りなんて出来るはずがない。

そう考えたところで、どうして直史はともかく自分までもう屋上に来るなど言われたのか分からなくなつた。斐羅を傷付けることは言つていなければずだし、むしろ励ましの言葉をかけたと明は記憶している。だつたらどうして。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「あ、そろそろ移動する?..」

言いながら紀子は立ち上がつた。五限は体育、校庭で持久走をすることになつていて。授業が始まるまであと五分ほどあるが、体育の教師は時間に厳しかつた。授業に一秒でも遅れると、校庭一周というペナルティが課されるのだ。

ガシャン！ と背後で音がしたので振り向くと、ナツキの左斜め後ろの机の側に蓋の開いたアルミ製のペンケースが床に落ちていて、数本のシャープペンシルが散乱していた。

「やべっ」

落としてしまつた犯人が言つた。直史だ。

「……の席つてクボタだろ？ 大丈夫だつて。早く行こ」

直史は悪戯がバレたような表情で落下したペンケースを見つめていたが、他の男子の急かす声に従い教室を出て行つた。

「……うちらも早く行こ」

「あ、うん」

明達も教室を後にして廊下を駆け下りている最中、ナツキが「和泉も悪い奴だね」と冗談めかして言つた。

「でも拾つてたら間に合わないもんね」

相変わらずのんびりした口調で、紀子は直史を庇う。一段抜かしで先頭になつて階段を下りる明にもちゃんと一人の会話は聞こえていた。

「いや、あいつも普通の人間なんだなつて思つてさ」

「頭は普通じゃないけどね。偏差値七くらいあるらしいよ。そういうのつて遺伝なのかなあ」

「そうじゃない？ 和泉のママ、塾の先生やつてたらしいし」

明は二者面談の時に会つた直史の母親を思い出していた。ふうん、そつなんだ。

よつやくげた箱に着いたところで授業開始のチャイムが鳴つた。もう喋つていい暇はない、明達は急いで上履きを脱ぎ、スニーカーを出すのとほぼ同時に上履きを入れる。明は土足厳禁なのも構わず汚れた白いスニーカーに足を入れ、外へ飛び出した。

## 第22章 来てたんだ。

「スマイリー置いてくない！」

ナツキの声が聞こえたが、ここは気のせいとこうとしておこう。

明はぎりぎりでチャイムが鳴り終わるまでにクラスの女子の列に並ぶことが出来た。昨日雨が降ったせいで地面の色はいつもより濃くなつていて、時折生ぬるい風が吹く。

大抵はジャージの上だけを着ていて、ナツキのようにズボンまで履いている人はあまりいなかつた。間に合わなかつた生徒は、ナツキと紀子を含め六人いた。

「はい、お前達は遅刻ー。校庭一周走つてきなさい」

体育教師の町田先生は校庭のトラックを指差した。

「殺す気かよー」

と言いながらも彼女達は走り始める。大変だなあ、と明は他人事のように思つた。

「スマイリーって持久走何分?」

隣に並ぶメグが訊いてきた。彼女も吹奏楽部だが、あまり会話をしたことはない。同じクラスになつたのも今年が初めてだから、メグが速いのか遅いのか全く分からなかつた。

「えーっ、遅いよお。メグは？」

「あたしも遅いよ。何かスマイリー速そつな氣がする」

実のところ、明は速い方だった。でもやつぱり本当のことは言えない、謙遜するのが当たり前で、ルールだから。前ならえの号令がかけられたが、真面目に両手をぴんと伸ばしている者はあまりいなかつた。この年になつて前ならえなんて恥ずかしい。明もいかにもだるそうに片手を伸ばすだけだった。

「……あれ」

メグが声を出した。喋っていると教師に怒られるので小声で。何？ という意味合いでメグに顔を向けると、

「今井さん来てたんだ」

と言つた。メグの視線を辿ると、昇降口の入口にあるコンクリートが一段盛り上がつた場所に、他の見学生徒に混じつて里恵は座っていた。茶色い髪と着崩したジャージのおかげで、遠くからでも彼女だとよく分かる。

「本当だ。でも今日来てなかつたよね？」

メグの発した言葉を聞いていたのだろう、メグの後ろにいる女子が言つた。

「うん」

「いつ来たのかなあ」

「さあ」

「そい、お喋りするんじゃない」

先生がこちらを見ながら注意したため、明達は口をつぐんだ。遅刻した生徒全員が走り終わったところでやっと体育委員による号令がかけられる。そして準備体操、ウォーミングアップとしてのトライク一周。その間も明は里恵の方をちらちらと窺っていたが、彼女は爪や髪の毛をじじつていたりして、一度もこちらを見ようとしなかった。

持久走は何度やつてもきついものには変わりなく、三周もするとどうして仮病なりなんなり使って見学にしなかつたのかと考えてしまう。スタート地点を通過とまだ走る番が来ていないナツキに、

「頑張れー」

と声をかけられるがそちらをひりひと向くので精一杯だった。笑顔を向けられるのはせいぜい一周までだ。息がとつても苦しくて、こめかみを流れる汗は冷たく感じた。しばらくしたところで振り向いてさり気なく里恵の様子を窺うが、やっぱり彼女は下を向いて自分の爪を触っていた。ここまで見てくれないというのは哀しかった。そんな風によそ見をしていたものだから、

「あつ」

周りの風景が上へ流れゆく。転んでしまったのだ。反射的に手をついたので顔面を地面にぶつけることはなかつたものの、急いで起き上がらうとしたら膝に鋭い痛みを感じた。

「おい、大丈夫か？」

ストップウォッチを持った町田先生が近寄ってきた。脇を通り過ぎる生徒はみんな自分のこと見ていて恥ずかしかった。

「大丈夫……だと思います」

明は立ち上がりジャージについた砂を払う。膝を見てみると血が出でていた。

「あー、怪我してるね。保健室に行つてきなさい」

「え、大丈夫ですよ。水で洗えば」

「なーに変な遠慮しているんだよ。菌が入つたら大変だから行つてきなさいって」

町田先生は笑つて明の背中を叩いた。先生は女性、しかも結婚もしているのに男みたいな口調で話す。だけど、そういうところが明は好きだ。町田先生は、この学校で一番好きな教師だった。

走る人の邪魔になるのでトラックから出ると、膝についた砂を軽く払う。血痕が手に少し付着した。洗つてから保健室に行こうと思つて水道の方に視線を向けたら、心臓がびくりと大きく跳ねた。

水道を囲むコンクリートに里恵は寄りかかっているのだった。

## 第23章 アタシの家に来い。

そのまま水を出したら里恵は水しづきで濡れてしまう。でも、わざわざ声をかけなくても察してどいてくれるかもしれないし、保健室で洗うという方法だつてある。だけど……明は迷っていた。

今しお走り終わった生徒の、荒い息づかいが後ろから聞こえてきた。自分も里恵のよくなはつきりした性格になりたかった。こんなことで迷うなんてくだらない。

明は意を決して、湿った地面へ一步を踏み出す。その間も心臓はどきどきしていくさかつた。怪我をした方の足を引きずるよつにして、水道までの距離は短いから歩みはゆっくりと。一度だけ里恵がこちらを見た。が、すぐに目をそらしてしまつ。もう水道は目の前だった。

じんなに里恵に近付いたのは屋上で話した以来だ。里恵は明より五センチほど背が高い。だから里恵のつむじを見たのは初めてだった。髪の生え際が黒くなっている。

明が水道の蛇口に手を伸ばしかけても、里恵が移動する気配はない。水道は里恵の後ろにあるのだから明が何をしているのかは見えないので、水道へ向かう姿は絶対に視界に入つていたはずだ。わざとだ、と明は理解した。無視される可能性も踏まえながら思い切って声をかけることにする。

「あの、水跳ねちゃうから

里恵が振り向いた。その顔は無表情で、心なしかいつもよくす

んで見える。そして怪我をしてこの明の膝をじっと見つめた後、

「だからっ。」

と訊いてきた。その言葉に明はつむたえた。

「えっと、ひょっとどこでくれる?」

「イヤ」

里恵が即答する。明は益々困惑して、身体の温度が下がってゆくような感覚を覚えた。イヤと言われたらどうすればいいのかなんて考へてもいなかつた。とりあえず、

「え……どひしー」

と詰めてみる」とにする。膝がキリキリと痛みの悲鳴を上げていた。

「何かやつこいつ態度ムカつぐ

「やつこいつ態度って?」

「被害者ぶつてるといふだよ。アタシが悪こいつと思つてゐんじょ

「え、そんなことなによ。何言つてゐるの今井さん」

罵声を浴びるとなんて思つてもいなかつたので、明は焦つていた。ホイッスルを吹く音が聞こえ、しばりくじてアラックを駆ける複数の足音が後ろを通り過ぎた。

「やつこつのがウザい。アタシとあんまり話したくなつて思つてるのが分かるんだよ」

「でも」

明は反論した。「それは今井さんだって同じだと思つんだが。  
私と田を合わさないよにしてたじやん」

突然里恵が声を出すと同時に笑い出した。

「江川さんも結構言つよつになつたじやん。前は氣まずくなつても  
笑つて流す『スマイリー』だつたのにさ」

皮肉のつもりだつて、里恵は『スマイリー』のところを強調して  
発音した。数メートル離れた所に座る他の見学生徒達の視線が自分  
達に集中してこむことに気付く、少し緊張した。

「……そろそろ洗わせてくれる?」

「やつぱりそうなんだよね」

「え?」

里恵は立ち上がり少しせ離れた場所に移動したが、そんなことを  
言われたら洗えなくなるではないか。

「結局婆羅のことなんかどうでもいいんだ」

「……」

「いいよ、気にしないで洗つて」

明は気が引けながらも蛇口をひねつた。水はふくらはざわを吹つて  
靴下に染みてゆき、傷口はすぐに綺麗になつた。

「直史に言つとこじよ」

周りの生徒に聞かれても構わないと思つてゐるのだつて、里恵は

声量を上げて言った。

「今日、アタシの家に来いって」

一瞬、聞き間違いかと思つた。あんな別れ方をしたところのに自宅に呼ぶ神経が理解出来ないし、何よりもどうして自分は誘われないのだろう。

「えじや、よへじゅく」

そう叫びと里恵は授業中だといつても構わぬ校門へ歩いていった。途中で町田先生が気付き呼び止めたが、歩みを止めることはなかった。里恵が授業中に抜け出すことはよくあるらしいから、先生はまたかと叫び風な顔をした。

「……江川さん、今井さんと仲良じの？」

完全に里恵の姿が見えなくなると、見学生の一人が好奇の目で訊いてきた。

「つづく」

明は首を振り、保健室へと歩いていった。仲間外れにされた気持ちを噛みしめながら。

## 第24章 この弱虫が。

保健室から教室に戻る途中、授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。階段を一段ずつ上がつていると、数人の体育着に身を包んだ生徒が明の脇を駆け足で通り過ぎていった。

「あ、スマイリー。大丈夫？」

振り向くとナツキと紀子がいた。さすがに暑かつたのだろう、ナツキは脱いだジャージを手に持つていた。前髪が額にへばりついている。

「大丈夫。擦りむいただけ」

「そつか。持久走疲れたよー」

そう言つた紀子の頬は今も紅潮していた。最後まで走らなくて済んだのだから自分はラッキーだったのかもしれない。ちょっと痛いけれど。

ナツキ達と一緒に教室に行くと、クボタが床に散乱したシャープペンシルを兔跳びをしている人のような格好で拾つているのが目に入つた。直史の姿を搜すが、まだ彼は教室に帰つて来ていないみたいだ。自分の持ち物が落とされている状況を、クボタは何て思つているのだろう。

明は自分の机の上に置いたスクールバッグから、ミッキーの柄が付いた青いハンドタオルを取り出して顔を覆つた。三 分近く保健室にいたのだから汗なんてかいていない。だけどタオルというのは肌触りが良くて、このまま机に突つ伏したかった。

「おい、和泉」

後ろで男子生徒の声がした。教室はみんなの喋り声で騒がしいはずなのに聞き取ることが出来たのは、和泉という言葉に対しても敏感になっていたのかもしれないと思つた。タオルをどかしてそつと振り向くと、直史と他の男子がクボタの方を見つめている。クボタはやつと全てのシャープペンシルを拾い終わった。

和泉は、きつと言わない。自分が落としたなんて、絶対に言わない。明は直史の様子を見て思つた。

「いじめに合つたつて勘違いしちゃうんじゃね？」

と笑いながら友達は直史を小突いていたが、彼はあからさまにクボタからも、友達からも視線をそらしていた。

……何故だかは分からないが、急激に怒りがわいてくるのを明は感じていた。それほど正義感が強いわけじゃないし、クボタに好意を持つてはいるわけでもない。でも、今手に持っているタオルを投げつけたくなるような乱暴な感情が芽生え、全身の体温が一気に上がるような感覚がした。ふざけんな、この弱虫が。明は心の中でそんな汚い言葉を呴いた。

「あ、俺トイレ行ってくる」

その言葉を明は聞き逃さなかつた。考えるよりも先に身体が動いていて、明は廊下へ飛び出して直史を待ち構えた。

「和泉」

「何だよ。いきなり」

まさか入口で声をかけられるとは思つていなかつたのだろう、口調は冷静でもその瞳はこぼれ落ちそうなほど見開かれていた。明は思わず笑つてしまつ。怒りを覚えていたといつのことこのことで笑つてしまつとは。悔しかつた。

「おい、人の顔見て吹き出すなんて酷くねえか」

「だつて……あ、伝言。今井さんから」

「今井から?」

駆け足で教室を出てきたために傷口がちよつと痛むが、表情には出さないようにする。

「今日アタシの家に来いだつて」

「え、お前いつ会つたんだよ」

「体育の時。今井さんは見学していく、私が保健室に行く時にちよつと喋つたの」

「保健室?」

「別に大丈夫だから」

直史が心配そうな表情をしたため、明は苛々していた。

「そつかよ」

ムツとした表情で直史が言つたので明は余計に苛々した。多分、直史に対する妬みのような感情もあつたのかもしれない。直史はクボタに本当のことすら言えないくせに里恵の家に招かれているのだ、自分を差し置いて。

「 もひいいだる」

うん、と小ちく返事をしてうなずくと直史は背を向けて廊下を歩いていった。

「バカ」

誰にも聞こえないように明はつぶやいた。  
二人は何を話すのだろう。

\* \* \*

翌日、直史は学校に来なかつた。皆勤賞を狙つて、友達と話していくくせに。

胸騒ぎがした。

## 第25章 引つかれた。

さて、修学旅行の班を決める時間がやつてきた。直史は欠席でも、いつも遊んでいる男子達のグループに入れられるのだろう。既に決まって黒板に名前を書き込んでゆく男子の学級委員を明は横目で見た。男子はすぐに決まつてうらやましい。

「じゃあ、とりあえず人数は気にしないでグループを作つて」

学級委員の野崎さんは、滑舌が良く声量もあるので全員に指示が行き届きやすい。しかしそれほど大きな移動をする者がいないのは、クラスの女子が集まつた時には、既にグループで固まつていたからだ。

「じゃあ、そつちは丁度四人だから決まりだね。じゃあ後は……」

そうして野崎さんは手際良く班分けを進めてゆく。ジャンケンをするのを指示したり、他の子の意見を聞いたり。自分達のグループに言われることはもう分かつていた。

「明ちゃんところは三人かー。うーん……人数的に今井さんを入れてもらえれば助かるんだけど、入れてくれる?」

ほら、来た。ちょっと困ったような笑みで言つ野崎さんの願いを断れる雰囲気ではなかつた。女子全員が明達に視線を向けていた。

「……どうしても?」

口を開いたのはナツキだつた。紀子が心配げな表情でナツキの顔を見つめる。それは明も同じだつた。野崎さんはうーんとうなり、「やつしてもらえないと嬉しいなあ。早く決めなことうるをこし、担任

と答えた。里恵を自分達のグループへ入れる方向へ話が進んできていると明は感じたが、皆も視線からしてそれを望んでいるようで、ここに嫌と言える空氣ではない。勿論、ナツキも。

「……うん、いいよ」

渋々ナツキが了解すると野崎さんの顔がぱつと明るくなつた。皆もほつとしたような表情をしていて、丸く收めるには誰かの犠牲が必要なのだ。

「ありがと。じゃあ私書いてくるね」

野崎さんの姿が遠ざかると明はため息混じりにつぶやいた。

「はあ……どうしよう」

「今井さん来るのかな？ 最近あんまり来ないし、もしかしたら来ないんじゃない？」

ナツキは貪り揺すりをし、明らかに苛々している様子だ。明は知つていて、どうやらナツキは野崎さんのことがあまり好きではないとこつこつとを。

「来なければいいなあ……。私、今井さんと会話をしたことないんだけど」

先ほどまで無言だった紀子が不安そうに言った。やっぱり、明のグループは里恵と同じ班になつたということを誰も快く思っていないのだ。他のグループは耳につく高い声で私語を交わしている。耳をすますと、京都に行つたらどういふ句を見よ、そんな内容ばかりだった。

確かに、来なればいいと思う。でも、修学旅行を機にまた元のように屋上で喋られる日々が戻るんじゃないかと淡い期待を抱く自分がいた。

そういえばクボタは誰と一緒に班になつたのだろう。彼と仲の良いものはいなかつたはずだ。そう思つて黒板を見てみると、直史のグループに入つていた。班のメンバーを知つたら、直史も里恵を入れられた自分のような心境になるのだろうか。そう考えると何故かほつとした。

和泉、風邪でもひいたのかな？

彼が来たのは丁度昼休み、明が満腹と春の陽気のせいであつらつらとしている真っ最中だった。

「あ、和泉だ」

先ほどまで明の肩を突ついていた紀子が言った。明がぱっと机から顔を上げると、視界の脇を誰かが通り過ぎた。

「おー和泉。お前、その田比ひしたんだよ」

直史のすぐ近くの席に座っていた彼の友達が笑つた。既に背を向けていたので顔は見えない。

「ああ、猫に引っかかれたんだよ」

答えながら、直史は机の脇に通学バッグをかける。その時に横顔がちらりと見えた。右目にはガーゼがあてられていた。

「マジかよー。ダサくね？」

「つるせえつ」

直史は笑つて友達の頭を小突いた。あんなに身体の大きい男の子が、猫に引っかかれた……それは確かに間抜けだ。明もくすりと笑つた。しかし紀子は素直に受け取らなかつたらしい。

「和泉つて猫飼つてないよね」

「え？」

「だつて、マンションじやん」

でもマンションでもペット可の所はあるし、秘密で飼つている人だつて沢山いるよと明は言おうとしたが、紀子の続けた言葉に口をつぐんだ。

「それに、『お前、猫なんて飼つてるんだ』って前男子と喋つてた。飼つているならそういう言い方はしないと思わない」

「あー、確かに」

なかなか観察眼が鋭い。紀子はまるでアニメの中の、犯人を探す探偵のような眼差しで直史を見つめている。明も頬杖をつきながら直史を觀察した。もしもこの場にナツキがいたら、直接本人に訊いていたかもしれない。彼女は今給食委員の仕事をしていて教室にはいない。

「あ、でも野良猫に引っかかれたのかもよ？」

思い付いて言つてみた。すると紀子は名探偵の「」とく、

「それはないね」

と立てた人差し指を振りながら否定した。推理ドラマの探偵に成りきるかのような彼女に、明だけでなく紀子自身も吹き出してしまう。

「それで、どうしてないと言いつ切れるの？」

「猫『』なんて『』って言つていたから。猫が好きなら『』なんて言つつかなあ？　あ、シャレじゃないからね。あんなに背が高い和泉にジャンプして猫が届くとは思えないから、抱いて飛び降りるとき引つかいたしか有り得ないでしょ？」

「ほお……確かにそうだねえ」

筋の通つているような氣のしてしまつ推理に明は納得してしまつ。最後に紀子は、

「それに、和泉が猫を抱いている姿なんかあまり想像したくないもん」

と言い、明はノッポで頭の良い直史が、にやにやしながら名前通り猫なで声なんか出して猫を撫でている光景を想像してしまい、吹き出しちゃった。

もしも紀子の推理通り猫に引っかかれたわけではないのなら、何故嘘をついたのかということだ。隠したい理由なのだろうか？そういうことを考えると、直史の笑顔も仮面を被っているだけのように見えてくる。

「……まあ、どうでもいいや」

直史の怪我を負った理由なんて、明はあまり興味がなかつた。

「えー、気になんないの？　スマイリー訊いてみてよ」「ヤだよー。何で私が訊きにいかなきゃならないの」「だつて結構仲良さそうじやん。たまに一人きりで喋つてるしさあ耳にへばり付くような声になつとして直史から紀子に視線を移した。明の視線に気付いたのか、

「そんなんじやないそんなんじやない。面白いなあつて思つただけ」「面白いって何だよー」「そういうえば、和泉つて小学生の時は結構モテてたんだよねえ」「えつ」

それは初耳だ。紀子はふくらとした頬にえくぼを浮かべている。

「私、和泉と同じ小学校だつたんだよね。友達も言つてた、和泉のことが好きだつて」

明はもう一度直史を見た。机から教科書を出す彼の後ろ姿は、隣の今井さんの机に腰掛けている他の男子よりも頭一つ分高く、きっとこのクラスで誰よりも目立つ。人は目立つ者に惹かれる本能がある。だから今のこの瞬間、直史に想いを馳せる人がいてもおかしくはなかつた。

\* \* \*

明から訊かなくとも、直史は自分からカミングアウトした。

「Jの怪我、本当は猫に引つかれたわけじゃないんだよな」

掃除が終わり教室に戻ろうとした時に呼び止められ、美術室の前の廊下に一人きり。直史と初めて喋ったのもこの場所だつたなんてふと思った。口マンチックのかけらもないというのが残念なところだ。やっぱり恋愛とかには憧れてしまう。

「じゃあ何で怪我したの？」

相変わらず明は怪我の原因になんてあまり興味がなかつたが、建て前として訊いておく。

直史が口を開きかけた時に後ろから足音が聞こえ、振り向いてみると音楽教師がこちらに歩いてきていた。

今日は、と明と直史が言うと教師は微笑みを浮かべ満足げにうなづきながら挨拶を返した。……ああ、これは絶対に誤解されている。

私と和泉はそんな関係じゃない、と心の中で言つてみたところで、勿論教師に伝わるはずもなかつた。つぐづく人間つて複雑だと感じる。

教師の姿が見えなくなつてから直史は口を開いた。

「それでさ、実は……今井にやられたんだ」

苦笑しながら田にあてたガーゼを指差す。明は目を丸くしてガーゼを凝視した。どの程度の怪我なのかは知る由もないが、病院に行つたらしいしそれなりの傷なのだろう。

「マジで？」

「マジ！」

「…………？」

直史は言つのを少しためらつてこむよつだ、唇をなめて「うーん」とうなつた。話すつもりがないのならわざわざ話しかけてこないでよ……なんて言えるはずもない。

「屋上に行つて顔を会わせた瞬間、『お前のせいだ』って。そう言って殴られたよ。顔面パンチなんて女のすることじやねえよなあ

「凄つ」

思わず声を上げてしまつ。里恵が直史を殴るシーンを想像してみよつとしたが、そんな光景はドラマくらいでしか見たことがないのでもう頭の中に描けなかつた。

「あいつの爪でぱつくり切れちゃつてさ」

「痛たたた」

「いつも話は苦手だ。聞いているだけで痛くなつてくるよ」だ。雑巾を持った一人の女の子が黄色い声をあげながら明達の脇を通り過ぎていった。

「で、このことは、やつぱり安藤さんあれから来てないの？」

鼻から鼻を吐き出しながらずく直史。

「でも、別に私達のせいじゃないよね？」

「俺とお前を一緒にするなよ」

直史はムスッとしたような表情になつた。自分でもこんな言葉が出来るとは思つていなかつた。明は直史の考えに大筋賛成をしていたから、責任を感じていたのだと思つ。だから、私達だなんて言葉が出てきたんだ。

明はうつむいて自分の爪先を見つめた。上履きにマジックで書かれた『江川』の一文字はお世話にも綺麗な字とは言えなくて、何度も手洗いをしたせいでじんじんになつた。

「正しかつたのかどうかとかは置いといて、少なくとも俺と江川の責任はあると思つ」

責任、といつ言葉は心に残つた。重い、言葉だった。

「でも私は安藤さんに酷い」とは言つてないと思つ  
「お前はやつでも向ひま違つかもしれないじゃんか

嫌なことをいう奴だ。人の柔らかくて触れられたくない所をつくような、そんな物言いを直史はする。

「どうあえず、今俺達が何をしてても無駄だつてことだよ

明は両手に拳を作り強く握った。何でそんな風に言い切れるの？  
そんな風にすっぱりと割り切られるの？でも口に出すことなん  
て出来ない、明は黙つたままだった。

「あいつ、修学旅行には行くつて言つてたからさ。ま、頑張れ」

何を頑張れと言つているのかは分かつていて、待ち遠しかつた修  
学旅行も、暗雲のような重い気持ちが心に垂れ込めることとなつた。  
話した内容も具体的に言つてくれないし、私は誰を信用したらい  
のだろう。

どんなことがあっても毎日は過ぎてゆく。時間が止まることがなん  
て有り得なかつたのだ。修学旅行は刻々と近付いてくる。

## 第27章 修学旅行。

昨日はなかなか眠れなかつた。楽しみな気持ちと里恵と同じ班だという緊張感が交錯し、布団に入つても頭は冴えたままだつた。只今の時刻は、午前五時を少し過ぎたところ。明は赤色の大きな旅行バッグを抱えながら駅まで歩いていた。静かな町中には朝もやがかかつており、冷たい空気が身体に染みる。まるで自分しか存在していないみたいで、何だかすごく気持ちが良かつた。車の通りもほとんどない。

駅前まで来ると、数人の背広に身を包んだサラリーマンや地味な色のスーツをまとつたO・しなどが、カツカツと足音を響かせながら歩いていた。自分と同じように旅行バッグを持つ人も何人か見かける。あまりにも同級生らしき人がいないため時間を間違えたのかと心配になつていたので、その姿を見て安心した。

駅の階段付近には数十人の生徒と教師が立つていて。明はナツキ達の姿を捜す。ほどなくして、電柱に寄りかかるナツキの姿を発見した。

「おはよー」

明は駆け寄つて挨拶をした。

「オハヨ。てか死ぬほど眠いんだけどー。スマイリー何時間くらい寝た?」

「私だつて眠いよお。ナツキは何時間寝た?」

「うーん……四時間くらいかな?」

「じゃあ私の方が短いや。三時間半くらいだもん」

四時間も二時間半も大して変わりはないのだが、負けたくないと思つてしまふ自分がいる。明は旅行バッグを地面に置いてあぐびをした。

「紀子ちゃんはまだ来てないんだ」

「うん、あいつはよく寝坊するからねー。あの人は多分来ないだろうし」

再び出でいたあぐびが途中で止まってしまった。あの入、どいづのは彼女のことだ。

「今井さんは来るらしいよ」

「え、何でスマイリーが分かるの?」

ナツキが目をくりりとさせて訊いてきた。まさか和泉が言つてたなんて言えないし、マズいなあ。明はめぐるましく頭を回転させて適当な理由を探した。しかし良い理由が見つかるはずもなく、仕方なくとつとこに思い付いた言葉を口にしてみる。

「……占い」

「は? 占い?」

思つた通り、ナツキは怪訝そうな表情になった。何か付け足されればと再び頭を回転させて、

「あの、えつと……タロット占い! 私の友達がそれ得意で結構当たるんだ、それでこの前占いつもらひつて今井さんは来るかもしけないつて結果になつたの」

自分でも何を言つてゐるのかと思いながら明はいっぺんに喋つた。

こんなことを口走ったのは斐羅のことが頭にあつたからだ、と氣付いたのは後に落ち着いてからだ。

「……ふーん。 そつなんだ」

どうにか納得してくれたようではほつとした。スカートで手のひらにかいた汗を拭う。

「スマイリーって今井さんと喋ったことあるの？」

「……うん、少しほね。 同じ班だし」

半分ホント、半分嘘。喋ったことがあるのは事実だが、学校外で何度も会話をしていたのだから『少ない』とはとてもじやないがいえない。

その後数言言葉を交わすと会話は途切れ、明は黙つて他の生徒達を観察した。段々人數は増えてきていて、班員全員が集まり駅へ入つてゆく生徒達もいる。掲示板の前に集まつた三人の女子の中に一年生の時の友達がいた。そこからちよつと離れた場所に、一年生の時に初めて隣の席になつた男子が一人でいた。

もしも、一年生の時のクラスで、または二年生の時のクラスで修学旅行に行つていたら……。何年生の時が一番良かつただろうか。いつだつて友達と過ごすのは楽しかつたし、氣を使つたり多少嫌な思いをすることもあつた。だから比べられるものではないだろうし、答えは出ない。

「あ、來た」

考えるのを中断してナツキの視線をたどると、車から降りた紀子

の姿があった。腕時計に手を落とすと、待ち合わせ時間より七、八分過ぎていた。

「「めんね！ アラームかけ忘れひやつてさあ

明達の元まで小走りで来たせいで、紀子の呼吸は少し乱れていた。

「まあ、別にいいよ。じゃああと一人か……」

「来ないんじやない？」

「でも明の友達がやつた占いで出たんだよね？　あの人は来るって話を蒸し返されて少し戸惑つたが、うなずいておくことにする。続々と駅に入つてゆく生徒が増えている。明より後に来た班までもう出発してしまっている。班員全員がそろわないとここを動くことは出来ないのだ。

「うひ、先生に訊いてみる」

返事も待たずにナツキは近くに立つ教師の元まで行つた。それなりに距離があるので会話の内容までは聞き取れない。明の脇を直史達の班が通り過ぎた。三人の少し後ろをクボタがついて行つている。階段を上る直前、直史が後ろを振り向いた。きっと、里恵が来ているか気になつたのだろう。

「欠席の連絡は来てないって」

ナツキは戻つてくると溜め息混じりにそう伝えた。もう一度時計を確認すると、待ち合わせ時間から一五分が過ぎようとしていた。

「遅い。これは絶対寝てるでしょ」

「私もそう思う。夜とか遊んでそだしね」

もし、そのまま来なければ緊張のない楽しい三田間を過ごすこと  
が出来るだらう。そう考へると全身の力が抜けたよつだった。

「遅れて」めん

突然聞こえてきたその声に、明だけではなくナツキや紀子もびっくり  
とした。振り向くとそこには、やっぱり彼女だった。

## 第28章 悪かったよ。

里恵は髪を一つに束ねていた。髪を縛りなさいと教師に注意をされても決して束ねなかつたのに。髪型以外はいつも通りの彼女だった。

ナツキと紀子に視線を向けると、一人も自分と同じようだ田をぎょぎょろと動かしていた。誰か喋つてくれといふのがうまい。

「ふーん、皆シカトするんだ?」

里恵が言つた。何か言わなければと思つたが、頭が真っ白になつて言葉が出てこない。里恵が怖く感じた。

「ううん! じゃあ歸るから行こうか?」

場に合わない明るい声を出すナツキ。彼女のおかげで明は救われた気持ちになつた。そうだね、と明と紀子はつづく。

「じゃあ先生に会つてくるね」

そう言つとナツキは走つていった。また沈黙が訪れる。

「……」

明は何も言えなかつた。紀子がいるのに話せる訳がない。口には出さなくとも、今井さんと仲良くしてはいけない、という決まりが存在しているかのような状況で話しかける勇気は明にはなかつた。

「江川さん」

名前を呼ばれてびくつとした。まさか、里恵の方から話しかけてくれるとは想わなかつた。

「……何？」

「IJの前は悪かつたよ」

「え……」

まさか、里恵の方から謝つてくれるなんて。どんな風の吹き回しだ  
るべ。

「IJの前ひどい？」

紀子が口にした。まさか彼女は明と里恵が時々会つていたなんて  
思いもしないだろ？

「何でもないよ。ちよつと話しただけ」

明は早口でさう言つて笑顔を浮かべた。

「せうやつヒスマイリーの仮面を被るわけ、か」

里恵が低い声でぼそっと言つた。そうだ私は仮面をかぶつている。  
明は自分の心を見透かされたような気持ちになつた。  
しかしこの仮面は絶対に剥がせない。

「先生に報告してきたよ。じゃあ、電車乗ろっか」

ナツキが戻ってきた。明はまた救われた気持ちになつた。

電車の中では里恵と一緒に話さうとはしなかつた。ナツキや紀子

とお喋りをする明。里恵は窓の外を無表情で眺めていた。明はまだ里恵に謝っていない。けれど人前では絶対に謝れない。明は謝るタイミングを探していた。

「トライ」

東京駅に着くと里恵が口にした。

「あつ、私も」

明も急いで里恵の後を追う。もちろん、ナツキたちには里恵の後を追っていると気付かれないよ！」

「皆の前ではシカトするんだね、アタシのこと」

里恵はトライに入るなりそう言つた。

「……」めん

明は目を伏せる。里恵は苛ついた様子で腕組みをしながら言つた。

「それで、言いたい」とは？」

「その、どうして今井さんが謝るのかなって」

「あなた、ばつかじやないの？」

「そんな……」

今井さんに言われたくない、ところの言わないでもね。

「あの時は言こ過ぎた。だから謝ったんだよ。それよりも、江川さ

んに力を貸してほしいんだ」

「私の力……？」

「斐羅が、あれからうちにても屋上にも来てないんだ」

## 第28章 悪かったよ。（後書き）

何年も投稿していなくて本当にめんない。体調不良により小説を書ける状況ではありませんでした。これからまたしばらくの間お付き合い頂ければと思います。

## 第29章 未来。

「安藤さんが……」

「電話しても出ないんだよ」

里恵は苦い顔をした。

「家には？ 行ったの？」

「行けねえよ。明らかにアタシのこと避けてるんだし」

「でも……私に出来ることなんてあるの？」

幼なじみの里恵ですら無理なことを、自分は何が出来るかのうのか。里恵がトイレの個室に入つたので、明はこの前斐羅に言つたことを思い出していた。色々な道があるし、諦めることなんてない。この発言にどんな問題があつたのだろうか。分からぬ。でも、直史は『俺たちの責任』だと言つていた。

「ねえ、今井さん」

トイレから出てきた里恵に訊いた。

「安藤さんのこと、傷つけちやつてじめん。でも、私にはどじが悪かつたか分からぬんだよ」

すると里恵は流しに唾を吐いた。

「分かんないなら教えてやるよ。斐羅にはな、未来なんて見えていないんだよ」

「え……」

「今生きることで精一杯なんだよ。だから将来のことを話すと斐羅は嫌がるんだ」

そういうことだったのか。胸のつかえが取れた気がした。明は大事なことを訊こうとしたが、トイレに同じ中学の人に入ってきたのでつい無言になる。里恵から目線を逸らして、手なんか洗つてみたりして……。

「じゃあ、今日も頑張れよ、スマイリー」

通りすがりに耳元で言われた言葉は、皮肉にしか聞こえなかつた。

「スマイリー遅ーい」

トイレから出るとナツキに言われた。

「『めん』めん、便器に收まりきらなくて」「ちょ、それだけ溜めてんだしーー！」

ナツキと紀子が笑う。

「じゃあ並ぼつか」

「そうだね」

そして先生の長つたらしい話を聞いた後、明たちは新幹線に乗つた。席順は明の隣に里恵、ナツキの隣に紀子。

「お願いつ、スマイリー。今井さんの隣になつて」

と言わされて決まつた席順だ。明が人の頼みを断るとこうことばめ

つたになかつた。

里恵は頬杖をついて窓の外を眺めている。明は周りを気にしながら、小声で里恵に話しかけた。

「ねえ、今井さん」  
「何だよ」

先ほど訊けなかつたことを訊く。

「私の力を貸してほしい、って言つたけど私に何か出来ることがあるの？」

「ある」

「何？」

「一緒に斐羅の家に行ってくれればいい。もう少しだけ、直史も

里恵は明の目を見つめた。

「……そんなことでいいの？」

「みんな仲良くなれば、斐羅だつて戻ってくれるかもしない」

屋上で里恵と直史が言つたのを思い出した。

「じゃあ、和泉にも話をしないと、」  
「スマイリー」

ナツキの声だ。振り向くと、後ろの席で彼女が手招きしていた。

「ちよつとじめんね」

そう言い残してナツキと紀子の元に行く。

「スマイリー、一緒にトランプやるのよ」

「うん……」

「ねえねえ、わざわざ今井さんと何話したの?」

そう訊いたのは紀子だった。明は歯を噛む。

「いや、ちょっと……」

「ちょっとして?」

「そんなことまで話わないといけないわけ?『トモダチ』って

里恵が振り向いて言った。紀子の目が大きくなる。

「いや、でもやつぱり気になるから……。今井さんってあまり他の人と話しないじゃん?」

ナツキが焦りの色を見せながら言った。

「話そうとしてこないだけじゃんよ」

沈黙。明には他の生徒の笑い声が遠く聞こえた。

「ねえっ、今井さんも一緒にトランプやらなーい?」

明が精一杯の笑顔で言った。

「アタシはバス。その人たちに嫌がられてるみたいだからさ「そんなことないよ、ねえ?」

と明が言った。

「そ、そりゃ勿論」

やう言つたナツキの笑顔は引きつっていた。

「わづかよつと嘘が上手くなつてからにしな」

やう言つて里恵は顔を前に戻した。ナツキと紀子は顔を見合せた。明は耐性が付いたのか、さほど驚いてはいなかつた。

「何、あの態度」

ナツキが呟いた。

「ねー！ 最悪じゃん」

紀子が田をまん丸にさせた。

「スマイリーはづく思ひ…」

「えつ……」

「もしかしてあんな人のことが好きなの？」

ナツキが『あんな』のところを強く発音した。それでああ、わざと里恵に聞こえるよう言つて居たのだと分かつた。里恵のことは嫌いではない。しかし、本当のことを言つたらハブられるかもしれない。明はしばらくの間口を開けず、下を向いていた。

「ほんと喋つてんじゃねえよ。アタシのことが嫌いならほつとき  
言えよ」

里恵がもう一度振り向いた。そして明に顔を向けると、

「江川さんもアタシのこと嫌いなの？」

と訊いた。明の心拍数が速くなる。好きだと言つたらナツキと紀子に嫌われる。嫌いだと言つたら今井さんに嫌われる。まさに板挟み状態だった。

「私は……」

脳裏に浮かんだのは里恵から缶ジュークをもらつたときのこと、屋上で「江川さんもまた来てほしい」と言つた笑顔、そして斐羅、直史。

「私は好きだよ、今井さんのこと」

はつきりと口にした。

### 第30章 スマイリー。

「え……」

ナツキと紀子が口にした。

「私は好きだよ、今井さんのこと」

明が再び言った。それには里恵も驚いた様子で、

「マジかよ……」

と叫んだ。

「みんな、今井さんのこと誤解してる。いい人だよ、今井さんは」

明がきつぱりと叫んだ。

「そんなこと言つて大丈夫なのかよ」

里恵が心配した様子を見せた。「こんなことを言つたらグループからハブられる可能性がある」とは、明が一番良くなかった。

「こつこつと今井さんと仲良くなつたの?」

紀子が訊いてきた。

「少し前。今井さんの家にも行つたことがあるよ」

「スマイリー……」

「私、トランプ止める。今井さんの隣に戻るね」

そう言つて明は睡然としている一人を横田に、里恵の隣に座った。

「いいのかよ。あんなこと言つて。グループに戻れなくなるぞ」「いいの。もうスマイリーは止めにした」

ミッテーのことを聞いたときに芽生えた決意。彼女が気になつてしまふがなかつた。

「なあ  
「ん?」  
「明、つて呼んでもいいか」

明が里恵の目を見た。里恵はまっすぐ明を見つめていた。  
「いいよ。私も今井さんの」と、下の名前で呼んでいい?」

里恵は前髪をかきあげた後、「いいよ」と言つた。明は嬉しくて、ガツツポーズをした。

「里恵、安藤さんに仲直りしたつて報告しちよつよ」  
「まだだ。直史と仲直りしていな」

明は直史の姿を捜した。すると彼は、後ろの方の席で隣の男子と話していた。

「んじや、突撃しますか」

里恵がにやりと笑つた。

「はいっ」

明は敬礼のポーズをした。里恵は立ち上ると、何の迷いもない  
ように一直線に直史の元へ行つた。明も後に続く。

「直史」

直史は田を丸くさせた。

「何だよ、今井」

やういえばクラスメイトの前で里恵と直史が話しているのを見た  
ことがない。周りの田を気にしているのだろうか。直史が明を見た。  
明は田をそらさなかつた。

「話がある。ちょっと来い」

やう言つて里恵は直史に背中を見せつ歩き出した。

「お願ひ。来て」

明も頼んだ。すると直史は頭をかきながら席を立つた。

里恵は自分の席に座ると、

「」の前は殴つて悪かつた

と始めに言つた。

「今井が謝るなんて雪でも降るんじゃねえのか  
「つるせえよ」

里恵が笑つた。

「京都に着いたらアタシのいる部屋に来いよ  
「え、ヤダよ。勘違いされそうじやんか  
「もう遅いんじゃねえか」

直史が周りを見渡した。すると明たちの方を見ている生徒が沢山いた。ナツキと紀子もこちらを見てなにやらひそひそ話をしている。

「和泉、私たち勘違いされてるよ」

明が眉をひそめた。

「……分かったよ。行きやいいんだろ」「  
「よし、じゃあ話は終わり。自分の席に戻りな  
「和泉、ごめんね」

自分の席に戻る直史をみんなが不思議そうな顔で見ていた。

### 第3-1章 板挟み。

京都に着いて明が一番先に田を止めたのは茶色い外壁のマクドナルド店だった。他の建物も皆茶色く、遠くにはお寺が見えた。東京よりも少し涼しく感じた。

「<sup>ミ</sup>波羅は修学旅行に行かなかつたんだ」

ホテルへ向かうためのバスに乗るなり里恵が言った。明は隣の椅子に腰を下ろして、

「安藤さん、いつから学校行つてないの？」

と険しい表情で尋ねた。

「中一の一学期から」

「じゃあ、もう一年も行つてないんだ」

「ああ」

明は少し迷つたが、「何で行かなくなつたの。私、まだ具体的な理由聞いてない」と言つた。

「だから、真面目だからだよ」

里恵が苛ついた様子でトップコートの塗られている爪を触る。

「じつして真面目だと行かないの？ 里恵が言つて学校は腐つてないよ」

「あー、もつめどじくせこなあ。明は『友達』と一緒にトイアレに行

つたり興味のない話題に付き合つたりするのが嫌じゃねえのかよ

里恵の声が大きくなつた。明は椅子に深く腰掛け直すと、

「私だつて嫌だよ。でもそれだけで不登校になるなんておかしいよ。  
他に何かあるんじやないの?」

「それは本人に訊けよ」

「聞きづらいから里恵に訊いていいの?」

里恵が大きくため息をついた。

「話してくれるまで待つってことが明は出来ないのか?」

「だつて気になるんだもん」

もう一度ため息をついてから里恵が言った。

「いじめだよ」

思つてもいゝ言葉に明は目を丸くして「えつ?」と言つた。

「だつて安藤さん、いじめはなかつたつて……」

「いじめられたのは斐羅のグループにいた奴。いじめていたのはグルーブの奴ら」

里恵は制服のポケットからリップを取り出すと乾いた唇に付けた。

「斐羅はどつちの味方にも付けなかつたんだよ

そう言つて前を見つめた。明はクラスメイトの喧騒が水の中に入つてゐるときのよつとぼんやりとしか聞こえなかつた。

「それに、耐えきれなかつたんだ……」

「それが原因の一つだな。何せ斐羅は眞面目だから、冗談で言われたことも気にするし……。だからと言つて、グループを抜けるのも難しかつた」

「そりや、難しいよね……」

グループの複雑さは明がよく知つていた。グループが分裂したときのあの「スマイリーはどうちに入るの?」なんて言葉、その言葉に何度も苦しめられただろう。板挟みにされていていじめを止めることが出来ない斐羅。それはどれくらい彼女にとって辛いことだったのか。明には想像が付かなかつた。

「本当に喋つてるよ

「信じらんない」

後ろの座席から声が聞こえてきた。おそらく自分たちのことを言つているのだろう。ナツキと紀子だろうか。

「そういう訳で斐羅は学校へ行つてないんだ  
「ありがとう、教えてくれて」

明が言つと里恵は照れくわざつに横を向いた。

### 第32章 仲直り。

バスから降りると明たちが泊まるホテルが見えた。大きくて真っ白な建物だった。窓ガラスが日光を反射して輝いている。明は眩しくて目を細めながら、

「あそこに泊まるんだ」

と言つた。

「アタシ、寝相悪いけどよろしくな

里恵が水筒に入っているお茶を飲みながら明の隣を歩いた。

「私の布団に入つてこないでね」

「そんな約束は出来ねーよ」

目の前ではナツキと紀子が仲良さそうに歩いていた。もうあの中には入れないのでどうか。そう思つと少し哀しくなつた。

「ねえ、修学旅行終わつたらなるべく学校に来てよ  
「えー、ヤだよ。時々でいいだろ」

「だって私、もう元のグループには戻れないかもしねいんだよ。  
一人で休み時間を過ごすなんて耐えられない」

里恵が明の方を向いた。薄い眉を上げる。

「アタシは平氣だけど」

明は眉間にシワを寄せて、

「平気なのは里恵くらいだよ」

「クボタだって一人じやん」

思いもよらない名前が出てきた。クボタ。新幹線に乗っているときも、彼は一人で座席に大人しく座っていた。暗い表情で。笑った顔は見たことがなかった。

「クボタだって好きで一人でいるわけじゃないって。私、一人が嫌なんだよ」

「一人なのをみんなに見られるのが嫌なんじゃねえの」

明はドキッとして里恵の目を見た。茶色い瞳に切れ長の一重の線が綺麗。この性格とギャルっぽい見た目を変えたらモテるんだろうな、と思つ。

「……何だよ」

里恵の顔をじっと見ていて気に気が付いたのだろう。

「いや、何でもない」

「何でもなくないだろ。やっぱリ図星なのか?」

「ああ、その話……。確かに、一人でいるところをみんなに見られるのはキツい」

「他人の目なんか気にしなければいいのに」

里恵はお茶を一口飲んだ。孤高、といつ言葉が当てはまりそうな強さ。社交辞令も一切ない、はつきりとした性格。そうだ、こういうところに自分は惹かれていたんだ。明は思った。

「私も里恵のようになりたいなー」

明は唇を尖らせた。

「アタシと一緒にいればなれるよ」

「嘘、安藤さんは里恵と違つて眞面目で大人しいじゃん

「今は、な」

里恵の言い方に引っかかりを覚えた。昔は? と訊こうとしたが、ホテルに辿り着いてしまったので言葉を飲み込んだ。

先生の話が終わると、明たちは部屋へ向かった。里恵がパンパンになつた赤い旅行バッグを運ぶ姿は、ピヨコピヨコと歩くペンギンのようで可愛らしかつた。明はグレーの旅行バッグを部屋の端に置くと、ふりふりと一息ついた。

「疲れたね」

「ああ」

里恵も隣に旅行バッグを置く。明は旅行バッグを下ろしたナツキと目が合つた。逸らしたのはナツキの方だつた。ナツキは座つて一休みしている紀子の肩を叩き、里恵の方を見ながら小声で何か言つた。

「何なのあいつら。ウザくねえ?」

里恵がナツキたちにも聞こえるような声で言つた。ナツキと紀子の顔がこわばる。

「言いたいことがあるなら直接言えよ」

ナツキと紀子が目を合わせた。重苦しい沈黙が訪れる。それを破つたのはギャル系の由紀たちの声だった。

「おー、広いじゃん」

由紀が靴を脱ぎながら言つた。

「ナツキ、紀子、スマイリー、ニロ開ひみくねえ」

そこに里恵の名前はなかった。明は悪意を感じた。ギャル系の人間でも、里恵は嫌われている。

「今井」

直史がドアを開けた。

「女の子の部屋のドア開けるなんて、和泉へんたーい」

由紀が歯肉を見せながら言つた。

「しあうがねーだろ。呼ぶてたんだから」

「うつそー、和泉つて今井里恵と付き合つてんの？ 超イメージダメウンなんんですけど」  
「ちげーよ」

里恵が腰を上げて、

「付き合つてねーから」

と由紀の顔を見ながら言った。

「行くぞ、明」

「あ、うん」

明も慌てて立ち上がり、部屋を出る黒恵に付いていった。

「何か話でもあるのか」

廊下で直史が訊いた。

「ああ。とりあえず、仲直りしちゃうか」

「俺は別に喧嘩しているつもりじゃないけど」

「斐羅が来ないんだ。電話にも出ない。メールも返さない。あの日以来」

「そりなんだ。安藤は頑固だからなー、一度そりと決めたら徹底している」

「またみんなで仲良く屋上とかで話したいんだよ」

明が言つた。

「でも俺の考えは変わんないからな。安藤は学校へ行つた方がいい直史、斐羅の気持ち考えてねえだろ。斐羅だって……本当は学校に行きたいんだよ」

「そりなの?」

明は驚きながら尋ねた。

「学校を休んでこるのがどれだけ苦痛だと思つ? 時々担任から電

話が来るんだぜ。まあ、アタシは平気だけ。楽しい学校生活を送りたいに決まってるじゃんか」「

廊下を歩いてくる生徒が何事かとこりを覗ながら通り過ぎた。

「でも今学校に行つても楽しい学校生活は送れない」と  
「正解。明、察しがいいじゃん」

里恵が手を叩いた。

「行きたくても行けないのか」

直史が顎に手をやりながら言った。

「せつこうじ。ちよつとは分かつてくれた?」「  
「ああ。もうむやみに学校行けとは言わねえよ」  
「じゃ、仲直りな

里恵が微笑みながら右手を出した。直史はちよつと困惑した様子で、

「握手しなきゃいけないのかよ」

と呟いた。

「え、直史、もしかして恥ずかしいの」「  
「そんなことないけど……」

そう言いながらも、直史の顔は紅潮していた。可愛い、と明は思つた。恋愛対象じゃないと言ひながらも、女の子だと意識している

ではないか。

「分かつたよ」

直史はそう言つて、素早く握手をした。

「これで斐羅もきっとまた来てくれる」

里恵は笑顔を見せた。この日最高の笑顔だった。

「アタシ、斐羅に電話してみるよ  
「え、だって携帯電話は持つてきちゃいけないって……」  
「そんなの関係ねえよ。明の『トモダチ』はお風呂に入りに行つた  
から当分戻つてこないだろ」

里恵はスカートのポケットから青い携帯電話を取り出すと、ボタンを押した。

「でも、安藤さん電話に出ないって……」  
「留守電に入れんんだよ」

里恵はそう言つて携帯電話を耳に当てた。しばらくの時間が経つた後、口にした。

「もしもし、斐羅？ アタシたち、仲直りしたから。直史と明と。  
だから、だから来るのを止めるなんて言つなよ。またみんなでお喋りしよう？ 今、修学旅行なんだ。だからメール、待つてるから」

理恵は電話を切つた後もしばらく本体を見つめていた。

「通じた、かな？」

明が訊く。

「だといいけど」

里恵は大切そうに携帯電話を閉じた。

「じゃ、風呂に入るか」

「やつだね」

そして明たちは風呂場へと向かつた。脱衣所で沢山の裸体が目に入る。裸になるのがちよつと恥ずかしくてもたもたしている明をよそに、里恵は勢いよくブラジャーを外した。大きな胸だった。そしてパンツも脱ぎ、一糸まとわぬ姿になった。明は里恵の裸体について見とれる。この姿を知っている男がいるのだろうか。援助交際の噂が頭をよぎった。

「明、早く」  
「う、うん」

明も仕方なく全てを脱いだ。片手で胸を隠しながら、風呂場に入つた。

隣で髪を洗う里恵を見ながら言つた。

「ねえ、何で髪の毛染めてんの？」  
「みんなと同じは嫌だからだよ」  
「でも、不良つてみんな髪染めてるじやん」  
「アタシは不良じやねえよ」

泡の付いた髪のまま里恵が立ち上がつた。まさかそんなに過敏な反応をされると思つていなかつた明は、

「う、めん」

と謝つた。

「アタシはな、万引きも恐喝もしない人間なんだよ」

「そうだよね。里恵、優しいもんね」

「モチ」

里恵がやつと座ってくれた。明は止まっていた身体を洗う手を再び動かした。

「スマイリー！」

後ろから声をかけられたので振り向くと、そこにはナツキが立っていた。

「……何？」

シャワーで泡を流しながら訊く。

「一緒に湯船入ろう」

「え、でも……」

里恵を好きだと言ったあの時から友情なんて壊れたんじゃないのか。ナツキはシャワーの蛇口を閉めると、無理やり明の腕を引っ張つて湯船へと連れて行つた。湯船には紀子が浸かっていた。

「スマイリー。今井さんの新情報、教えてあげるよ」

ナツキが抑揚のない声で言つた。

「何……？」

「やっぱり、援助交際の噂は本当らしいよ」

ドキン、ど心臓が脈打つ。嘘だ嘘だ、そんなはずない

。

「証拠はあるの？」

「私、見たもん。オジサンとホテルに入ると」  
紀子が言った。

「スマイリー、そんな奴と付き合つ氣？」

ナツキが訊いてきた。明は何も言えなかつた。

### 第34章 ……おりがとい。

布団に寝転がりながら里恵は言った。

「それにしてもさー、奈良公園ってあんなにも汚いわけ？ 鹿のうんこでこいつぱこじやん」

「うん……」

明が髪をとかしながら曖昧に答えると、里恵は寝返りをうつて肘を付いた。

「何かつれないじやん。どーした？」

「ううん、別に……」

あの後、結局明は何も言ひ返せなかつた。スマイリーが戻つてくるの待つてる、と言わたったときにはどれほど嬉しかつたか。自分も里恵みたいに悪口を言われる運命なのだとついていた。なのに、ナツキたちは戻つてもいいと言つてくれた。私はどうしたらいいの？ 人に合わせるのはほとほと疲れたけど、ナツキたちが嫌いなわけじゃない。それに、里恵は……。

本当、なのだろうか。でもまさか本人に訊けるわけない。そうだ、斐羅はどうだろ。しかし、まだそれほど親しくなつていないこと気に付いた。もう少し仲良くなつて、そしたら安藤さんに訊いてみよ。明は思った。

「明、部屋出るよ

里恵が突然身体を起こして言つた。明は「え？」と言いながらも里恵に引っ張られるようにして部屋の外を出て階段へと向かつた。

「何なの……？」

「メールが来た。多分、斐羅からだと思つ」

そう言つて里恵はポケットから携帯電話を出した。新着メール、一件。メールを開いてみると、やつぱり斐羅からで、こう書かれてあつた。

『ありがとう。

でも、私なんかが里恵たちのところに行つていのつかな？ 私、迷惑じゃないかな？

修学旅行、羨ましいな。楽しんできてね』

羨ましいな、の後に泣いている絵文字が付いていた。明の胸がぎりと痛んだ。

「誰か来たら教える。斐羅に電話してみるから  
「うん」

電話をかけてすぐに里恵の口が動いた。

「あ、もしもし？ 斐羅？ 良かつたよ、出でてくれて。ああ、今は大丈夫。本当、仲直りしたからさ。直史も分かつてくれた。斐羅は何も間違つちやいないんだから。あ、明？ 隣にいるよ。友達だからな」

友達だと書いてくれていて「援助交際を疑つていい」と後にめたさを感じた。思わず下を向く。

「…………うん。じゃあ、修学旅行が終わったらまた屋上で。え？ 明

「？」 分かった

里恵は耳から携帯電話を離して明に渡した。

「斐羅が明に代わってほしつて」

「え？」

『疑惑』ながらも電話を代わる。

「もしもし、安藤さん……？」

「……江川さん？」

「うん」

「その……『めんね』

「謝るのは『めんね』だよ。安藤さんの気持ち分かってあげられてなかつた。『めんね』

「『めんね』」

沈黙。斐羅の息づかいが電話口から聞こえてきた。

「また、屋上に来てくれる？」

「……いいの？」

「来てほしくんだよ」

「……ありがと」

じゃあ、と言つて明は電話を切つた。また、安藤さんはきっと来てくれる。そう思つと嬉しくなつて飛び上がりたいほじだった。

「良かつたね。安藤さん、また来てくれるみたいで」「ああ。仲直りしてくれた明のおかげだよ。サンキュー」「うん」

携帯電話を返す際に指が触れた。この指が男を知っているなんて、そんなこと、考えたくなかつた。

「里恵は……悪いことしないよね

つい口に出してしまつた。

「…………つたりまえじやん」

表情が陰つて見えたのは氣のせいだうつか？ 気のせいであつてほしい。

「じゃ、部屋戻るわ」

明は里恵についていった。

寝る時間になり消灯してから、里恵が小声でこんな話を聞かせてくれた。

「小六の頃、斐羅と直史ともう一人の男子と肝試しで廃墟になつたアパートに入ったことがあるんだよ。そしたら、トイレの水がいきなり流れても」

「え、廃墟なのに水が……？ しかもいきなり？」

明は怯えた表情になつた。

「そう。一田散に直史が逃げ出そうとしたんだけど、斐羅が手を押さえて。そしたらその後何が起きたと思う？ 女の人のうめき声が聞こえてきたんだよ」

「やだ、怖い、怖いよ里恵」

明は横に寝そべっている里恵の腕をぎゅっと掴んだ。

「アパートを出てから直史が熱を出して三田間学校を休んださ。今思えば、行く前に斐羅がタロットで占つたら死神のカードが出いでたんだよな」

名前だけで不吉な匂いがふんふんするが、「そのカードでどういつ意味?」と訊いてみた。

「危険、災難、病気。斐羅の言つ通り、止めといた方がよかつたんだよな。アタシと直史は先にアパートから出てきたんだけど

「ひどーい、安藤さん置いてけぼり?」

「もう一人の男子は見た目も心もとても頼もしかったから大丈夫だと思つたんだよ」

「ふうん……」

そう話しているうちに、里恵は寝息を立て始めた。無防備な寝顔。やつぱり、援助交際なんて嘘だらうか? 里恵がやるはずない。そう思つても、心の引っかかりは取れないままだつた。

### 第35章 隠し事。

「つまんねー。寺見て何が楽しいんだよ」「でも、金閣寺綺麗だつたじゃん」

タクシーの隣に座る里恵に言つた。一緒に乗つてゐるナツキと紀子は無言だった。この日、明たちは専属のタクシーでお寺周りをしていた。

「次行くところには恋の神様がいるんだって」「寺なのに?」「うん。里恵は……付き合つてている人とかいるの?」「ここで発表するの?」

里恵はナツキと紀子の方を見た。一人は下を向く。明が、

「あー……」

と声を漏らした。気まずい沈黙が流れる。

「ねえ、スマイリーは? 好きな人いるの?..」

紀子が場に合わない明るい声を出した。

「えー、私の? いないよー。紀子ちゃんは?..」「私は……」

ちらりと紀子が里恵の方を見た。そして言つた。

「……今井さん、和泉つて彼女いるの」「えつ！」

明は背もたれに寄りかかるのを止めて声を出した。里恵は一瞬目を大きくして、

「……へえ、直史つてモテるじゃん」

と言つた。

「でも何でアタシに訊くの？」  
「和泉と仲いいみたいだから……」  
「いたらどうすんの？ 諦めるの？」  
「分かんないけど……」

里恵がふつと笑つた。

「安心しな。あいつに彼女はいないよ」  
「本当？」  
「ああ」  
「好きな人も？」  
「それは知らねえな。本人に訊けば？」  
「そんなこと出来ないよう……」  
「それにも恋つてすげえな。嫌いな人にまで訊けるパワーを持つているんだもんな」

それは嫌味にしか聞こえなかつた。嫌いじゃないよ、といつ紀子の小さな声を里恵は聞こえないかのように無視した。

恋の神様がいるという寺に着くと、明はその周りを二回回ると恋

が実るところ石の周りを回った。

「私、本当は好きな人いるんだ。ナツキたちには内緒ね？」

「誰だよ」

「山本くんつ」

同じクラスの男子だ。

「里恵は石の周り回らないの？」

「アタシはいいよ」

「やつぱり付き合ってる人いるの？ ナツキたちあつちにいるから

聞こえないよ」

「……言いたくない……」

そう言つた里恵の顔は、今までに見たことのない暗いものだつた。  
明は驚いた。

「里恵、どうしたの？」

「いや」

これ以上話したくない様子なので、明もそれ以上は訊かなかつた。

「あ、和泉じゅん」

他の寺を回つていると、直史のグループと会つた。グループの男子と仲良さうに話している。ただし、クボタを除いて。クボタはパンフレットをじつと見つめていた。と、彼が転んだ。しかしグループの男子は誰も声をかけようとはしない。直史がちらりとクボタを見たが、すぐに視線を逸らした。

「クボタって本当ドジだよねー」

ナツキが紀子に話しかけた。

「ドジつ娘つて奴？」

「全然萌えねー」

一人は笑った。今までの明だったら一緒に悪口を言っていたことだろう。

「クボタ、ヤバいぞ」

里恵がナツキたちに聞こえないよう小声で言つた。

「ヤバいつて？」

「あいつ、いつかいじめられるぞ」

「……かもね。杉沢が退院したら危ないかも」

校舎から転落した杉沢。あの事故に、本当に里恵は関わっていいのか、未だに分からなかつた。杉沢、といつ言葉に里恵の肩がびくじと動いた。

「里恵？」

「……何でもねえよ

またもや何も話したくない様子でそっぽを向いた。里恵は何か隠し事をしているのではないか？ 明の頭に疑問が浮かんだ。援助交際だって、もしかして本当は隠れて。考えたくないのに考えてしまう。

「いじめないよな？」

「え？」

「明はいじめないよな？」

「あ、当たり前じゃん」

「いじめなきゃ他の奴らにいじめられたる」と云なつても、いじめな

いよな？」

「……うん」

本当は自信がなかつた。

### 第36章 ヤコマン。

別の寺では由紀たちのグループと会った。

「おひ、ナツキに紀子にスマイリーじゃーん

「お茶飲んできた?」

ナツキが訊いた。

「うん。つまかったー

「かなり濃いよね」

紀子が言つ。そしてナツキと紀子は楽しそうに会話を続けた。

「アタシ、由紀たちが

里恵がほそつと言つ。

「え、どうして?」

「団体行動命ー ひとつ二つが」

「スマイリー、由紀たちと一緒に写真撮るつ」

とナツキが話しかけてきた。

「……私?」

「そうだよ。ひょ、おこでおこで

「でも……」

里恵の方を見た。

「あのむ、今井さん。これ以上スマイリーにまともにしゃべりつづけ、止めてくれない?」

由紀は里恵の皿の前まで近づくとしゃべった。すると、里恵は声を出して笑った。

「何だい、まつまつと並ぶんじやん。陰口しか呴けないのかと思つた  
よ」  
「なつ……」

由紀は怒りの表情を見せた。

「お前、馬鹿にしてんの? 前から氣にくわなかつたんだよ  
「アタシもあんたのことは気にくわなかつたよ  
「ふざけんなよー。」

由紀が今にも里恵につかみかかりそつた雰囲気だったので、明が中に入った。

「由紀、落ち着いて  
「スマイリーは今井さんの肩持つのかよ?」  
「や、そういうわけじゃないけど……」  
「もういいじゃん由紀。今井のことはシカトしようがせん

由紀の友達が呆れたように言った。

「やうだな。スマイリーも、分かっているよね?」

どうこつ意味かは明にも分かっている。自分もシカトをしない、と

「スマイリー、もし、シカトをしなかったら 」  
「うわけだ。もし、シカトをしなかつたら 」

「スマイリー、つから友達だよね？ 裏切らなー、よね？」

追いつひをかけるよつなナツキの言葉。

「う、ん……」

明は里恵の方を見ないよつこトを向いて、うなずいた。後ろめた  
れが明の心を締め付けた。

「スマイリー、一緒にお風呂入りー」

「うそ」

ナツキの声にうなずく。お寺巡りから帰ってきたとか、明は一度  
も里恵と口をきいていなかつた。しかし、

「なあ、明」

風呂に行こうとする明の腕を里恵がとつた。

「ちつスマイリーは止めるさじやなかつたのかよ

明はうつむいたまま、

「うめん。私はスマイリー、やっぱ止められない」

と言つて首を向けた。

「明……」

里恵は唇を噛み締めた。

「今井里恵の新たな新情報！　聞きたくない？」

ナツキがにやつと笑った。

「何、それ」

明は出来ることなら聞きたくなかったが、僅かに好奇心の方が勝つてしまった。

「杉沢と一緒に歩いているのを由紀が見たことあるじゃんよー。」

「杉沢と……？」

「そう。一人で仲良く歩いてたよ？　あいつって和泉ともできてるだろ？　ヤリマンじやん」

一緒にいた由紀が言った。

「和泉とはできないみたいだけ……」

紀子が遠慮がちに口を挟む。

「そうだよ。和泉みたいな優等生が今井さんの」と相手にするわけないじやん

ナツキが笑った。

「まあ、そつかもね。でも杉沢と付き合いながらHンマーしてるなんて、淫乱だな」

里恵はそんな人じやない、と言えたらどんなに楽だらう。しかし、明は里恵の何を知つてゐる？ 何も知らないじやないか。杉沢が落ちたときに現場にいた里恵。もしかしたら、別れ話のもつれとか……？ 明は考えていた。

「あ、今井だ」

里恵が裸で風呂場に入ってきた。

「あの身体で何人もの男と寝てんだぜ」

「あそこ濡れ濡れ？」

下品に由紀とナツキが笑う。明は気持ちが悪くなつた。早くここから出たい。何で自分はこんな人たちと仲良くしていんんだろう。

そう思いながらも、結局、明は修学旅行が終わるまで里恵と一緒に話さなかつた。

### 第37章 いじめ。

修学旅行が終わって四日後、里恵は学校に登校してきた。明は逃げるように席を立つてナツキたちのところへ行つた。

「あれっ……」

里恵が机の中を何やうに探ししながら呟いた。そして、大きなため息を一つ。ちらりと由紀たちの方を見る。由紀たちは里恵の視線に気付いているのかいないのか、大声で笑っていた。続いて、明たちの方にも視線を向けた。

「やだー、今井さん！」見つかるよ

紀子が言った。里恵がこちらに向かって歩いてくる。明は身体を強ばらせた。

「やつたのはあんたたち？ それとも由紀たち？」

「ねえねえ、知ってる？ 今度この街で一青窈がライブするんだってさー！」

「マジ？ あー、でも私ファンじゃないからなあ」

里恵の問いを無視してナツキと紀子は話す。

「スマイリーは好きだったよね？ 一青窈

「え、あ、うん……」

急に話を振られて戸惑つ。

「やつたのかやつてないのかくらこ答えりよー。」

里恵が苛ついた態度をあらわにした。

「何の話?」

ナツキがめんどくわわつに訊く。

「教科書。隠したの、お前り?」

「そんなことしてなによ。ねえ?」

紀子がうなずく。すると里恵はふと笑った。

「だよな。あんたたちは所詮他人に流されて生きているんだもんな

流されて生きている。それは昔の自分。みんなと一緒に行動して、みんなと一緒に悪口を言つて。そんなのが嫌で、だから、一人でいる里恵を尊敬して、友達になつて。なのに、自分は里恵を裏切つた。また、昔のスマイリーと同じ。人の顔色をうかがつてしか行動出来ないんだ。里恵の言葉が明の胸にちくりと刺さつた。ナツキは何か言いたげだったが、結局何も言わず、里恵を無視してお喋りを再開した。

「ねー。何か「ミミ箱臭いんだけど」

由紀が教室のみんなに聞こえるような声で言つた。

「何か臭いものでも捨ててあるんじゃない? 教科書とか」

と由紀の友達。里恵は「ミミ箱の中を見た。すると、そこには教科

書が捨てられていた。里恵はそれを拾い出すと、由紀たちの方を睨んだ。

「お前ら、随分姑息な手使いじゃん

「ねえ、何か聞こえた？」

「なーんにも」

「そりだよねー」

由紀たちがぎやははと笑う。

「絶対……許さないから」

里恵は怒りの田でそう言つと教科書を持つて席に戻った。予鈴が鳴り、明も席に着く。すると、前の席に座る里恵の広げた教科書が目に入った。そのページには、

『死ね！ 淫乱女』

と赤いマジックで書いてあった。これはシカトなんかじゃない。

いじめだ。

でも、今里恵をかばつたら自分がいじめられる。それが怖かった。なら、どうしたらいい？ この学校で里恵のことを相談出来る人といたら、あの人しかいなかつた。

「え、今井が？」

こじめのことを知らぬと直史は驚いた顔をした。

「やべ。でも、私には止められないし……」

「女同士で起きていることなんだから俺にも止められねえよ  
「セシをどうにかしてよ」

「無理だよ」

「そんな……」

明は落胆した。

「先生にチクるってのは?」

「そんなんでいじめが収まるとは思えないよ。それに、もし私がチ  
クつたってバレたら……」

せうやつと直史と明が廊下で話しているときだった。

「あ

先に声を出したのは里恵だった。

「お前……」

「今井……」

明は罪悪感から目を逸らす。

「二人きつで、何のお話?」

「お前のことだよ」

「アタシの?」

「こじめに遭つてゐんだつて?」

言わないでよ、と明は直史に手で訴えたが、通じなかつた。

「あー。クラスの女子ね。で、それがどうしたつて？　かばつてくれでもするの？」

「……」

明は返事が出来なかつた。

「お前なら、どうにか打開出来るだろ？　負けんなよ」

「当たり前。アタシは別に人の助けなんていらない」

それは、強がりなのか、本当なのか。

いじめはその後も執拗に続いていた。無視、物隠し、悪口……。

明は一回も口をきいていなかつたし、里恵のマンションの屋上にも行つていなかつた。斐羅だつて待つているというのに。里恵と言葉を交わすのを避けていた。怖かつた。里恵には嫌われているに違いない。そんなの分かつてゐる。だけど、それを直接言われるのが怖かつた。そんなとき、里恵が自分から話しかけてきたのだった。

「今日の放課後、屋上に来いよ

と。

### 第38章 助けてあげて。

心臓がドキドキする。明は里恵のマンションの前まで来ていた。部活を休んで、誰にも見られないようにしてひっそりとやつてきた。里恵に会つたらまず何て言おう。やつぱり、謝るのが一番だらつか。でもそれだけでは里恵が怒りそうな気もある。どうしようか迷いながらエレベーターに乗り込む。屋上に着くと、明は深呼吸をした。そして、ドアを開ける。するとそこには里恵、直史、斐羅が座っていた。

「江川……」

一番に声を出したのは直史だった。

「里恵に呼ばれてたから」「よっ、スマイリー」

里恵の言葉は皮肉めいていた。

「安藤さんも来てたんだ」「うん……。ありがとね」

斐羅が言った。

「ううん。『めんね、今まで来れなくて』  
「安藤、心配してたぜ。江川と今井がまた喧嘩したんじゃないかなって」「喧嘩はしないけど……」

里恵の方をちらりと見る。彼女は頭を搔いていた。明が名前を呼ぶ。

「里恵」「いいんだ」「え？」  
「アタシは何をされても別にいいんだ」「……」  
「里恵は強がっているわけじゃない」「……」

斐羅が明の考えてることを読み取ったかのよう言つた。

「里恵は、強いから」「本当に？ 辛くないの？」「辛かつたら何かしてくれんの？」

里恵が言つた。明は閉口する。

「ただ、やられっぱなしつてわけにはいかないな」「……やりかえすの？」「由紀たちなんかボロボロにしてやるぞ」「駄目だよ、里恵。暴力はよくない」

斐羅がぴしゃりと皿つ。

「お前また警察に補導されるだぞ」

また、といふことは以前にもあつたのだから。里恵ならやりかねない。

「あいつら超ムカつく。お気に入りのシャーペンまで盗まれた  
「それって、なおくんがプレゼントしてくれた……？」  
「え？」

何だ、それ。

「アタシが前に落としたシャーペンだよ」

杉沢が落ちたときに落としたものか。だから、直史はすぐに里恵のものだと分かったのか。

「和泉つて女子にプレゼントするような奴だったんだ」

「昔の話だよ」

直史が言った。

「そういえば……」

杉沢と一緒に歩いていた、といつのま本当だひつか。そつ訊いつとした。

「そういえばで思い出したんだけど、淫らに乱れるって書いて何て読むんだ？」

「え」

明はぽかりと口を開けた。

「……インラン」

斐羅が遠慮がちに答える。

「つむ何?」

「……」

「お前、馬鹿だな」

直史が言った。

「つむせえなつ。アタシだつて、直史と斐羅みたいに頭良く生まれたかつたよ!」

「努力の賜物ですよ、今井わん」

里恵の言葉に直史が笑った。

「江川、さん」

斐羅が小さな声で呼ぶ。

「何?」

「里恵のこと……助けてあげて。この問題は里恵の力だけじゃ解決出来ない」

「アタシ一人で充分だよ」

「どうやって? どうやって解決するの?」

「それは……今から考える」

「お願い、江川さん」

明は返事に困った。里恵のことをかばつたら自分だつていじめられるに決まっている。自分は、里恵ほど強くはない。

「……」めん

やつとわれだけ口にした。

「こじめの傍観者つてどんな気分なわけ？ 見てて楽しいか？」

里恵が口にした言葉は棘のあるものだった。

「楽しいわけないじゃん。私、里恵のこと好きだよ。でも……。でも、助ける勇気が私にはない」

すると里恵は立ち上がった。田線の高さが明と同じになる。

「明みたいなどいつもかずな奴みると町々するんだよ」

「…………ごめん」

「アタシは謝られたいわけじゃない」

「じゃあ、里恵はどうしてほしいの？」

眉間に皺を寄せながら細い声で囁いた。

「…………」

里恵が皿を伏せる。

「里恵はね、本当は自分の元に戻ってきてほしかんだよ」

斐羅が言った。

「…………私、里恵のこと裏切ったのに？」

「明はアタシのこと友達って思つてないのか？」

「友達…………だよ」

そうだ、私は里恵の友達なんだ。明は心の中で呟いた。沈みかけた夕日が四人を照らしていた。

でも、友達だからって自分をも犠牲にすることが出来るのだろうか。明は迷っていた。

「私、友達がいじめに遭ったのを止めることが出来なかつた。今まですこしく後悔してる。もう少しの勇気があれば、私だけ、こんなことにはならなかつたんぢやないかつて。なつたとしても、これほどの罪悪感に苦しめられることはなかつたと思う。だから、江川さんには後悔してほしくないの」

斐羅にしては長い台詞だつた。彼女はまつすぐ明を見つめていた。

「じゃあ、もし私が安藤さんだったら止められぬ？」  
「今度」アタシは止めた

斐羅はまつめつと口元した。

「こくら強こいつていつも今井だつてもひへトなんだよ。君は一肌脱いでやつてくれないか」  
「和泉……」

明はしゃがんで「うーん」とつなつた。一人にここまで言われた  
ら断れないぢやないか。里恵が追い討ちをかける。

「明。アタシももつ、限界なんだ

里恵がこんなことをいつひなんて思つていなかつた。明の心が揺れ  
る。

「私なんかに、里恵のことを救えるの？」

「明は証言してくれるだけでいい。由紀たちがアタシの持ち物を隠したりしてるので、」

明は決心した。

「……分かった」

「ホントか？ ありがとな、明！」

里恵は表情を明るくすると明の背中を叩いた。

「まだお礼言つのは早いよ……。それに、痛い」

「『めん』『めん』じゃあ、楽しい夏休みの計画でも立てよ! もうすぐじゃん」

「俺、夏期講習があるんだけど……」

「じゃ、直史抜きで」

「ちょっと、なおくん可哀想だよ」

一気に明るい話へと変わった。里恵がこんな風に笑うのを知っているのは、自分と家族、直史、斐羅ぐらいなんだろうな。こうこう変わる里恵の表情に明は惹かれていた。

「アタシ、花火したい」

「いいね」

斐羅が笑う。

「じゃあ私、プール！」

明が手を上げて発案した。すると、

「私、プールは……」

と斐羅の顔が曇った。

「もしかして、泳げないとか？」

「いや、斐羅は水泳得意だったよな？　どうしてだ？」  
「うん……ひょっと、ね」

言葉を濁す斐羅。そして話を逸らした。

「あ、私は祭り行きたいな」

「あー、お祭りいいな。アタシ、お化け屋敷大好きなんだ」

「私も」

「俺も好きだな」

「え、みんなちょっと待つてよ。私、超苦手なんだけど……」

明が泣きそうな顔をする。

「決定。じゃあみんなでお化け屋敷行こうつな」

「里恵酷い……」

里恵は白い歯を見せた。

「夏休み、楽しいかなあ

斐羅が呟く。

「楽しいよ。絶対

「アタシが楽しけじてやるよ」

里恵がニコニ笑つた。

「今井も夏休みはちよつとは勉強しろよ」

「えー、ヤだよ」

「お前、本当にどこの高校にも行けなくなるわ」

「だから高校は行かないって」

「安藤はどうするんだ? 高校」

「私は……」

斐羅は言ひよどんだ。

「おこ、やつこつ」と説くの止めやう

里恵が直史を突ついた。

「大丈夫だよ、里恵。私は……まだ分からぬ。迷つてゐ  
「本当は行きたいんじゃないのか?」

と直史。

「行きたいけど……私には自信ない。三年間も通えるのか。それに、  
今の内申じゃあ行けたとしてもすこく偏差値の低いところになると  
思つ」

「試験でいい点取れば大丈夫だろ。斐羅は頭良いんだから  
「つづん」

斐羅は首を横に振つた。

「頭が良かつたのは昔の話。もつ今は全然。勉強、する気が起きなくて」

「へえ、安藤にしては珍しい言葉だな。努力の塊みたいな性格してるのに」

「だって、勉強して何になるの？ 将来のため？ 将来つて何？」

斐羅が直史に畳み掛けるかのように質問した。直史は困った様子で、

「良い人生を送る為じゃないのか？」

と答えた。

「良い人生つて何？」  
「良い仕事に就いて……」  
「良い仕事つて？」  
「……」  
「私には、未来なんて見えないよ……」

斐羅の顔を見ると、泣きそうだった。斐羅は今を生きるので精一杯なんだと里恵が言っていた。確かに、斐羅には未来を考えるほど の余裕がないように見えた。

「じゃあ、安藤さん、昔は何で勉強してたの？」

明が訊いた。

「何か、とりえが欲しかったから。勉強しか能がなかつた私は、今は誇れるもの、何もない」

そう答えて哀しそうに笑つた。生ぬるい風が斐羅の髪をなびかせていた。

「斐羅には良いこと」いふことはあるじやんか。 真面目だし、優しいし

里恵の言葉に斐羅はひつんと首を振つた。

「私は、お母さんの悪いところ、犯罪者なんだよ」

## 第40章 万引き。

「犯罪者、つて……？」

明は尋ねた。

「最低な子供だった、って前に言つたでしょ？」

「うん……」

斐羅は赤く染まつた空を見上げて言つた。

「……私ね、小学生の頃万引きの常習犯だったの」

一瞬、時間が止まつたよつた気がした。

「嘘……」

「本当。何回も捕まつたことがあるの」

「だつて安藤さん、真面目じゃない」

「昔は酷かった」

そして斐羅は話し始めた。小学生の頃の自分のお話を

。

\* \* \*

「斐羅ちゃん、また、するの……？」

「大丈夫。今日は一品だけにするから」

「斐羅ちゃん、止めようよ。やっぱり駄目だよ、そんなことしちゃ」

「しょうがなこじやない。それが私のストレス発散法なんだから」

「斐羅ちゃん……」

「今朝もお父さんに殴られた。私なんか生まれてこなければ良かつたのに、って」

「酷い……」

「私には何にもないから。才能もとりえも、何にもない。だから、お父さんが私を嫌うのは当たり前のことなんだよ」

「当たり前なんかじゃないよ！ 親はいつだって子供を守ってくれる存在のはずでしょ？ 殴られるのが普通だなんて、そんなこと、あるわけないよ！」

「里恵ちゃんの両親は優しいもんね。愛されるのが当たり前に思つてゐるでしょ？ でもそれって、当たり前に見えてすくへ恵まれていることなんだよ」

「斐羅ちゃん……」

「このキー ホルダーでいいか。誰も見てないよね？ じゃあ、店出るよ」

「……」

\* \* \*

「里恵には何度も迷惑かけたよね。そんな私の側にしてくれたのは、

里恵となおくんだけだった」

「アタシは迷惑なんて思つてないよ……」

「お父さん、虐待、されてたの？」

「虐待じゃない。お父さんが私のことを嫌つてて、ただそれだけのこと」

「でも手を上げるなんて酷い……」

「お父さんはお母さんに對してもやうだから。何でこんな子供を産んだんだ、つー」

「辛い？」

「もう慣れた」

「今も安藤に暴力を振るつたり、酷いことを言つたりするのかよ」

直史が眉間に皺を寄せながら訊いた。

「うん」

「お母さんはそんな奴と何で離婚しないんだよ。斐羅、可哀想だよ」

里恵はしゃがむと斐羅の田をまつすぐ見つめた。

「金錢的に一人じゃ生活出来ないから。私ひえ、私ひえになかった

らお母さんが殴られることもないこのことね」

「何言つてんだよ、斐羅」

里恵が斐羅の肩に手を置く。

「斐羅がいなかつたら寂しくなるよ……」

「ありがとう、里恵」

斐羅はやう言つて微笑んだ。

「でも、私はいらない子なんだよ」

「斐羅……、そんなこと言つんじゃねえよつ」

里恵は斐羅を抱きしめた。一羽の鳥が鳴きながら明たちの頭上を通過していく。辺りは暗くなり始めている。明はそろそろ家に帰らなければと思った。でも、こんなムードのときに言に出せない。

「大丈夫だよ、里恵。私はいなくならないから」

斐羅が言った。

「アタシと、ずっと友達だよな？」

「もちろん。……ねえ、なおくんも、江川さんも、私とずっと友達でいてくれる？」

「当たり前だろ」「うん、当たり前」

直史と明が答える。

「あらがとう」

そう言つて斐羅は里恵から身体を離すと、立ち上がりて、

「私、そろそろ帰らなきや。江川さん、来てくれてありがとうね。また会おうね」

「うん。私も帰るー。安藤さん、一緒に帰ろ?」

「いいよ」

「二人とも、気を付けろよ」

里恵は腰を上げて手をひらひらと振った。

「あ、じゃあ俺も帰るわ

直史も立ち上がる。

「またね、黒恵」

「おひ。明日は学校行くから

「待ってる

そして翌日は廊上のドアを閉めた。

## 第4-1章 いじめられたんだよ。

「安藤さんひもじいちゃんなんだ」

「うそ。次の信号を右に曲がってすぐ」

一人は歩道を歩いていた。

「安藤さんは、どうやつて……万引き、止めたの？」

「里恵となおくんが、止めなかつたら友達止めるつて言つたから」

「そりなんだ」

「私には一人しか友達いなかつたから、止めることが出来たの」「じゃあ今ストレスはどうやって発散してるの？」

すると斐羅はふつと口元をぼくぼくさせた。

「江川さんは鋭いところをつくね。さすが、里恵に惚れられただけある」

「違うよ、惚れたのは私の方だよ」

「ううん。里恵、進級してすぐの頃言つてたよ。気になる女の子がいる、つて」

「それが私……？」

「うう」

そういうえば以前、『こんなくずだらけの空間を高校に行ってまた過ごすなんて、よほどのぐずか低脳だ』と里恵が言つた事件で、どうしてアタシに構つんだよと言われて答えられなかつたとき、「江川さんなら、と思ったのにな」と言つていたじゃないか。あの言葉は、そういう意味だつたのか。

「でも私のどこが良かったんだろ?。誰にでも意見を貰わせる『スマイリー』だったのに」

「里恵には分かったんだよ。江川さんなら変わることが出来る、って

「変えてくれたのはまぎれもない里恵だけだね」

「江川さんが来なかつたとき、里恵、元気なさうだった。やつぱり里恵には江川さんが必要なんだよ」

「安藤さんもすぐ必要だと呟つよ」

斐羅は笑つて、ありがとう、と言つた。やつぱり別れ道の信号が近付いてきた。

「ねえ、私ももっと安藤さんと仲良くなりたい」

信号のところで明は足を止めた。既に青になつてゐるため、明たちの横を車が排氣ガスを吐き出して走つている。

「仲良くなつて、色々なことお話ししたい」

「……私もだよ、江川さん」

「そしたら私、安藤さんに訊きたことがあるの」

それは言つまでもない、里恵の援助交際のことだった。

「……いこよ。私も、江川さんに話したいこと、ある

「仲良くなつてくれん?」

「もちろん」

「ありがとつ! じゃあまたね、安藤さん、…………つづく、斐羅ひやん」

そう言つて明は点滅し始めていた信号のある横断歩道を走つて渡

つた。紫羅はほんのりと頬を赤く染めて、

「『ひこばー、…… 明ひやん』」

明には聞こえない声で呟いた。

翌日、里恵は登校してきた。席に着いていた明は勇気を振り絞つて、

「おはよ、里恵」

と顔をかける。

「おはよ」

里恵は笑ってくれた。由紀たちの視線を感じつつも、明は言つた。

「じゃあ、職員室に行こうか」

明たちは職員室に辿り着くと、担任をつかまえて切り出した。

「先生。実は、大事なお話があるんです」

「どうした、江川」

明は担任をじっと見つめる。

「実は……今井さんが、いじめを受けてるんです」

担任は驚いた表情になった。里恵の方を見て、

「お前が、いじめに……？」

「情けないけどね。アタシ、由紀たちにいじめられたんだよ」

里恵が答える。

「ただの思い込みじゃないのか」

担任の言葉は、明たちを落胆させるものだった。里恵がため息をつく。

「先生、こじめを放つておく氣ですか」

明が担任に詰め寄る。

「いや、そうじゃなくて本人たちともう一度よく話しあつただな……」

「あんた、それでも教師かよ…」

里恵が担任の机をバンと叩いた。他の教師たちが何事かといった様子で里恵の方を一斉に向く。

「今井、それが先生に対する態度か」

「話を逸らすんじゃないよ」

「どうした、今井」

「町田先生」

明の氣に入つてゐる体育教師が声をかけてきた。もしかしたら、「」の人なら。

「里恵が、いじめに遭つてゐるんです」

「本当か……？」

「本当だよ」

「ただのこざらじやうじょひ。だから心配しないでトセコ、町田先生」

担任が手で顔をあおぎながら言つた。里恵の皿つきが鋭くなる。

「お前、それでも教師かよ」

「一人瀬たちにいじめられてこるとこつ証拠はあるのか?」

「あるよ」

里恵は手に持つていた教科書を広げてみせた。『死ね！ 淫乱女』と書いてある。

「……」

これには担任も言葉を失つた。

「先生、これはいじめに間違いないんじゃないですか

町田先生が担任に言つた。

「……自分で書いたんじゃないところ証拠はあるのか  
「や」今まで隠すのかよ……」

里恵は呆れた様子だった。教科書をパタンと閉め、踵を返す。

「里恵」

「明、行こう。これ以上話しても時間の無駄だ。何を言つても担任は分かつてくれねえよ」

「待ちなさい、今井」

そう言つたのは町田先生だった。

「私は今井を信じる」

「町田先生！」

担任が声を上げた。

「今井は過去にも自分で同じようなことをしてくるんですよ

どうこう意味だらう。里恵はつづむき、表情は髪に隠れて分からなくなつた。

え……？

## 第42章 自作自演。

「同じようなこと、って？」

町田先生が訊いた。

「小学生の頃、自分のノートに『死ね』って書いたんですよ。それだけじゃない。自分の体育着をハサミで切つたり、上履きの中に画鋲を入れたり……」

「自作自演、ってことですか？」

町田先生は驚いた様子だった。彼女だけじゃない。明もびっくりしていた。里恵が、そんなことをするなんて……。すがるような目で里恵を見るが、里恵はうつむいたままだった。明は里恵の肩を掴み、身体を揺らした。

「ねえ、里恵嘘でしょ？ 嘘だって言つてよー。」

他の教師たちの視線が痛い。里恵がゆっくりと顔を上げる。人形のように無表情だった。そして、

「……本当だよ」

低い声でそう答えた。

「今井、どうしてそんなことを……」

「さあ、自分に注目してほしかったんじゃないですか？」

「やうなの、里恵？」

扇風機の風が里恵の髪を揺らした。今も里恵の皿の下には青いクマが出来ている。

「やうでもしなきや、グループにいられなかつたんだ」

里恵のものとは思えないような、か細い声だつた。明はショックを受けた。里恵のこんな姿、見たくなかつた。里恵にはいつでも自信満々でいてほしかつた。それが、自分の尊敬する今井里恵なのだから。

「そんなの、里恵らしくないよ。一人でも堂々としているのが里恵でしょ？ グループとか、里恵の口から聞きたくなかつた。自作自演だなんて、そんなの信じたくなー……」

知らないうちに涙が零れた。明は里恵に背を向けて職員室を飛び出した。里恵は追おうとはしなかつた。足が鉛のように重くて、明の背中を見つめることしか出来なかつた。

「和泉！」

「何だよ、江川」

「ちょっと来て」

明は登校してきたばかりの直史をつかまえて廊下まで引っ張つていった。

「離せよ、ソシャツ伸びるだろ」

「ねえ、どうこうひと？ 里恵が小学生のときこうじめを自分で演したりつて！」

明はソーシャツから手を離し、握りこぶしを作りながら尋ねた。

「ああ、そのことか」

直史が顎を搔ぐ。何もかも知っているような表情だ。明は聞いた  
だした。

「何でそんなことしたの？ 里恵は、そうでもしなきやグループに  
いられなかつた、って言つてた。それ、どうこいつ意味？ 和泉、知  
つてるんでしょ？ 里恵にはどんな過去があるの？」

「江川、落ち着けよ」

直史は明をなだめるかのように手のひらを前に出した。

「話すと長くなるんだよな。そうだ、放課後マンションの屋上に来  
いよ。そこで話すから。いいだろ？」

「いいけど……」

「一つだけ言つておくが、それはもう過去の話だ。今の今井じゃな  
い。安藤が万引きしていたのだつて、過去の話なんだ。未だに親に  
犯罪者つて言われてるみたいだけど」

「前に和泉が言つてた、親は子供が昔した悪いことを蒸し返したり  
する、つて斐羅ちゃんのことだったの？」

「そうとも言えるかな」

その時予鈴が鳴つた。直史は、じゃあまた、と言つて教室に戻つ  
ていつた。明も教室に入つて自分の席に着く。前の席に座る里恵の  
後ろ姿を、じつと見つめていた。里恵は、どんな子供だつたのだろう。  
いじめはいつまで続くのだろう。もつ終わにしてほしい。明  
は膝の上でこぶしを握つた。

休み時間になると明は里恵に話しかけた。

「里恵」

「……明」

里恵は明と田を合わせようとしなかった。

「いいんだぜ、無理して話しかけなくて。ナツキたちのといひて実元で遅いよ」

「もう遅いよ」

それは諦めに似た言葉だった。由紀たかがいつを見で何やら話している。

「今日、屋上で待つてるから」

「え？」

「和泉に訊いたの。自作自演つてどうじつじって。屋上で説明してくれるつて書つてた。でも、私は、やっぱ里恵の口から眞実を聞きたい」

「アタシの口から……」

「分かってる。そんなの、過去のことなんだって。でも私にとってはショックだった」

「……ごめんな」

里恵が頭を伏せた。やっぱり、こんなのは里恵じゃない。

「今井里恵ー」

教室にいるみんなに聞こえるくらいの声で言つた。何事かとクラスマイトがこちらを見つめている。里恵は身体をびくつさせた。明は里恵の頬を両手で包むと、

「元気出して行こー！」

と明るべて叫んだ。

「明……」

「そんな暗い顔してないで！ 私、何があつても里恵の側にいるから

「……も？」

「え？」

声が小さくて聞き取れなかつた。

「……アタシがどんな人間でも？」

里恵がまっすぐ明を見つめた。

「……里恵、何か隠してる？」

まだまだ、明は里恵のことを知らない。援助交際疑惑だつて、杉沢との関係だつて、眞実は知らない。里恵がどんな子供だったかも、もちろん知らない。

「明は？」

「え？」

「明は、何か隠してることないのか？」

「……なこと思つけど」

「アタシ、知つてゐから」

「何を？」

「明がアタシの噂を気にしてゐ」と、知つてゐから

ドキン、と心臓が脈打つた。何で知つてゐるのだろう。

「興味本位でアタシと一緒にいるんじゃないか？」

「そんなわけないじゃん！」

思わず声を荒げた。

「私は、里恵のことが好きだから一緒にいるんだよ  
「スマイリー」

突然、ナツキが明のことを呼んだ。紀子が手招きしている。行つ  
ときな、といふ風に里恵が田で合図した。明は少し迷つたが、ナツ  
キたちの元へ行く。

「スマイリー、何してんのや」  
ナツキは小声で言つた。

「今井さんと話したらまづいっしょ。今度はスマイリーが由紀たち  
にいじめられるよ?」

「でも私、里恵の友達だから」

「あんなのと付き合つちゃ駄目だよ、スマイリー」

紀子が眉をひそめる。

「援助交際だよ? カツアゲもしてゐつて噂だし。不良なんだよ、

今井さんは

「里恵は不良なんかじゃない」

わつぱつと明が言った。

「ナツキと紀子ちゃんは、里恵のこと何も知らないじゃん。全部ただの噂じゃない」

「火のないこと」に煙は立たぬ、つて言つてしまふ？」

言ひ返す言葉が見つからなくともどかしい。本当は、自分だって里恵の知らないところが沢山ある。捲り上げたジャージの裾から伸びた紀子の太い腕が、明の頭を優しく撫でた。

「スマイリー。私たち、スマイリーのこと心配しているんだよ？ 友達でしょ、私たち？」

またかこんな言葉をかけられるとは思つていなかつた。明の心が揺れる。

「……ねえ、里恵もグループに入れるつていつ」とは出来ないの？

上田遣いでナツキたちを見た。無理なのは分かつてゐる。でも、訊かずにはいられなかつた。

「そんなに今井さんが好きなわけ？」

ナツキは呆れていたようだつた。

「……うん」

里恵の方に目をやると、彼女は「ミミ箱にゴミを捨てにいくところだつた。由紀たちの隣を通り、由紀が里恵の足元に足を出した。里恵は転倒する。

「じめーん、今井さん」

由紀たちがギャハハと笑う。里恵は上半身を起しそうと、由紀たちを憎悪のこもった瞳で見つめた。

「止めるよ」

そう言つたのは、近くの席に座る直史だった。

「いじめなんて小学生のやることだろ。格好悪」

由紀は目を大きくさせた後、ふつと笑つた。

「和泉、こんなのがタイプなわけ？」

「えー、ショックー。和泉、人気がた落ちなんですけど」

「俺はお前らみたいてモテても嬉しくない」

と、直史。

「そうだよなー。一ノ瀬たちに人気があつても、な？」

そう言つたのは直史の友達だ。

「やつてることが幼稚すぎるだろ」

「今井をいじめるなんて、よっぽどストレス溜まつてんだな」

口々に直史の友達が言った。気が付くと里恵と由紀たちに教室にいるみんなの視線が向けられている。すると由紀は顔を赤くさせ、仲間に「ちょっと、教室出よ」と言つてその場から去つていった。

「直史……」

里恵は直史を見つめていた。

「俺は今井の味方だから」

と、直史。

「今井さん、またいじめられたら俺らが助けてやるよ」

直史の友達もそう言った。

「…………あらがとう」

そう言つた里恵の頬は、心なしか赤らんでいた。

## 第44章 好きなの？

明は直史のとつた行動に驚いていた。俺には無理だと黙っていたのに、里恵を助けてくれた。そのことが嬉しくて、明は里恵に手を差し伸べながら直史に「ありがとな」と言った。

「俺に出来る最大限のことはしてやろうと黙つてさ。幼なじみだもんな」

直史はちよつと照れくさそうに元気を搔いた。

「ねえ

ナツキが口を開いた。

「和泉つて、今井さんのこと好きなの？」

「そんなわけねーだろ」

直史より先に里恵がお尻をはたきながら言つた。明の頭に浮かんだのは紀子のことだつた。紀子はどうやら直史が好きらしい。そのことは、きっとナツキも知つている。もしも直史が里恵のことを好きだとしたら、絶対に里恵と紀子が仲良くなることなんて出来ない。紀子の方を見ると、彼女は口を真一文字に結んで直史のことを見ていた。

「和泉、どうなの」

「好きなわけないじゃんか」

直史はうつ言つて苦笑いを浮かべた。

「じゃあどうして今井さんのことを助けたの？」

「それは幼なじみだからだつて……」

「嘘じやん！」

「うう叫んだのは学級委員の野崎さんだつた。みんなが彼女の方を向く。野崎さんはタオルを握り締めながら田を見開いて言つた。

「和泉くん、小学生の頃今井さんのこと好きだつたじやん」

ざわめきが起きる。　マジかよ。和泉が今井を？　嘘お。

「和泉、ううなの？」

紀子がハンカチを口にあてながら尋ねた。

「そ、そんなわけねえだろ」

「和泉くん、私と友達だつたの。小四の頃、今井さんのことが好きつて、そう言つてた」

と、野崎さん。窓から強い風が入つてきて白いカーテンを揺らした。里恵は神妙な面もちをしている。まるで、そんなことは知つていたかのような面もち。ずっと本を読んでいたクボタも、顔を上げて直史のことを見ていた。

「……そんなの、子供の頃の話だり」

「今も好きなんでしょう？」

野崎さんが尋ねる。ナツキが紀子の肩を押さえた。紀子の田は潤んでいた。

「好きじゃない」

そう直史が答えたとき、チャイムが鳴った。明はもとと話を聞きたかったが、会話はそこで終了となつた。里恵は最後まで、何も語ろうとはしなかつた。

「スマイリー、せっぱり今井さんはグループに入れられないよ」

次の休み時間、ナツキが言つた。

「そんなん……」

「紀子の気持ちも考えてあげなよ」

紀子は明らかに落ち込んでいる様子だった。やつきの野崎さんの話を気にしているのだろう。

「今井さんも和泉のこと好きなのかなあ……」

紀子がつぶやいた。里恵に視線を向けると、彼女はヤスリで爪を研いでいた。

「分かったよ、里恵のこと連れてくるから」「ちょ、待てよスマイリー！」

明は里恵に近付くと「来て」と言つて腕を引っ張つた。

「何だよ」

「いいから

そしてナツキたちのところに連れてきた。ナツキと紀子はまつむ  
いて里恵から視線を逸らす。

「なんだよ」

「本当に、和泉は里恵のこととは好きじゃないの？」

明が訊くと、里恵は眉をひそめながら言った。

「当たり前だろ」

「でも、小学生の頃……」

紀子が言った。

「小さい頃の話じゃんかよ。言つただろ？ 今、直史に好きな人は  
いない」

「今井さんは？」

「え？」

「今井さんは、和泉のこと好きなんじゃないの？」

紀子は顔を上げてまっすぐ里恵を見つめていた。

「……アタシには他に好きな人がいるよ  
「誰？」

それは明も知りたかった。もしかして、杉沢か？ しかし杉沢は  
不良だ。里恵が好きになるタイプではないような気がする。

「そんなの、言えるわけねえだろ」

そう言つて里恵は自分の席に戻る。つとした。

「待つて、里恵！」

里恵が振り向く。

「里恵もうちらのグループに入らない……？」  
「スマイリー！」

里恵は鼻で笑つて、

「そんなこと、出来るわけないって明も分かっているだろ」

里恵が明の手をすり抜けていった。手に入らない、存在。掴んで  
も泡のように消えてしまう。私はどうしたらいいの？ ナツキと紀  
子ちゃんから離れることしか、里恵と一緒にいる道はないの？ 明  
は迷っていた。

そうだ、斐羅に相談してみよう。明はそう思ついたのだった。

## 第45章 昔の話

屋上に行くと、里恵と斐羅がいた。一人は柵にもたれて話をしていた。

「あれ、和泉は」「まだ来てねえよ」

里恵が答える。斐羅は夏だといつのに長袖だつたが、それでも身体が細いのが分かった。

「ねえ、私どうしたらいいの？ 私、里恵と一緒にいたい。でも……ナツキたちのことも捨てられない。どうしたらいいと思ひ、斐羅ちゃん」「私は……」

斐羅は口もつた。

「明、そんなの無理だよ。どっちも手に入れるなんてできっこない。片方は諦めろ」「そんな……」「あの」

斐羅が口を挟んだ。

「学校ではそのお友達といつにして、放課後は里恵と一緒にいるように分けてみたらどうかな？ 里恵、学校は一人でも過ごせるから」

「でも、私は里恵ともつと一緒にいたいよ」

「――呪のわいじは履けねえよ」

里恵はもひ学校で一緒にこる」とを諦めている様子だった。

「里恵はそれでいいの?」

「いじめられさえしなければ、それでいい。どうせ学校なんてそんなに行かないし」

「もう……いじめはなくなるよね?」

「さあな」

その時、屋上のドアが開いた。直史が顔を覗かせた。

「よ、今日はあつがとな」

里恵が手を上げると、直史は「おひ」と言った。

「全員が揃つたと」りで、訊きたことがあるんだけど」

明が言った。

「いじめを皿作演したって話だい」

里恵が口にした。すると斐羅ちゃんも知っているの?

「……もしかして、斐羅ちゃんも知っているの?」

「……うん」

「どひして? どひして皿作演なんかしたの?」

里恵はとつとつと話しおした。

「あの頃、アタシのグループには女王様的存在がいたんだ。みんな  
そいつのことをもてはやしていた。アタシのことなんて、誰も見て  
いなかつた。このままじゃ、自分の居場所がなくなると感じた。ど  
うすればみんなが振り向いてくれるだろう? そう思つたんだよ」

「……その結果が、いじめの自作自演?」

「やうだよ」

どんな気持ちで里恵は自分の教科書に『死ね』と書きなぐつたの  
だろ? 今の里恵からは想像もつかなかつた。

「でも、もつそれは昔の話。今はやらねえよ」

里恵はきつぱつと言つた。

「やうだよね、昔の話なんだよね……」

明は自分に言い聞かせる。明だつて、ちよつと前までは人の言つ  
ことに合はせるスマイリーだつた。でも、今は違う。自分の意見を  
ちゃんと言えるようになつた。私も、変わつたんだよね。きっと、  
里恵も。そう考へると、心の中にあるわだかまりがすーっと消えて  
いくのを感じた。

「江川ももういいだろ? 来週から夏休みなんだから、明るい話で  
もしよ! ザ」

「あ、そうだね。ねえ、みんなでお祭り行かない?」

「賛成!」

真つ先に手を挙げたのは里恵だつた。

「私も行きたいな」

と、斐羅。

「和泉は？」

「行つてもいいけど」

「本当はすごく行きたいんだろ？ 女の子三人に囲まれて、お前も幸せ者だな」

里恵が直史をからかう。

「お前は女じやねえ」

「今、何つった？ 里恵キーック」

里恵が足を高く上げて直史を蹴る。直史はよろめいて柵にぶつかつた。明と斐羅が笑う。この幸せがずっと続けばいいと思った。

「あー、もう分かんねえ」

里恵はシャープペンシルを投げ出した。

「里恵。こにはこれをこつちに移項するんだよ」

「そうなの？ やっぱり斐羅は頭良いなあ。明とは大違いだ」

「里恵には言われたくないーーー。」

「お前ら、口ばっか動きすぎ。集中出来ねえだろ」

夏休み。明、里恵、斐羅、直史は里恵の家で勉強をしていた。

「浦高志望がなんでもうちらで勉強してんだよ」

里恵が言った。

「ちょ、みんなで勉強しようって言つたのはお前だろ」

「そつだつけ」

「私、このままじゃ川田工業にしか行けないみたいなんだ」

明が言う。二者面談で先生にそう言われたのを覚えていた。

「大丈夫大丈夫、アタシなんか私立しか受からなって言われたから。ま、行かないけど」

「今井、本当に高校行かない気なのか？」

「うん」

里恵はあつさつと答えた。中卒じゃ、世の中を渡るのは大変だろ

「。そんなこと、里恵も分かっているはずだ。斐羅は、どうなんだ  
う。高校、行かないのかな。」

「なおくん、ここ分からないんだけど」

「斐羅が問題集を指差しながら直史に尋ねる。

「どれどれ？ ああ、ここは分子にかけるんだ」  
「あ、そつか」

明は斐羅が勉強する姿を見てずっと疑問に思っていた。しかし、勇気を出して訊いてみよう。

「斐羅ちゃん、学校行ってないんだから夏休みの宿題なんてしなくてもいいんじゃない？」

すると斐羅はちょっと微笑んで言った。

「私、一学期になつたら学校に行こうと思つてゐるの」

明は驚いた。里恵も直史も知らなかつたのだう、田を丸くした。

「斐羅、マジかよ」

「うん。私、やっぱり高校に行きたい。高校に行って、やり直したい。だから、行こうと思つ。今からじや遅いかもしけないけど」

「遅くねえよ。頑張れよ、安藤」

「ありがと。」「

「斐羅ちゃん、無理はしないでね」

「うん。ありがと、明ちゃん」

みんなが笑顔で斐羅を応援する中、里恵だけは無言だった。

「里恵？」

明が里恵の表情が曇つてることに気付いて声をかける。

「いつ、決めた。学校行くって  
夏休みが始まるちょっと前だけビ……」

「どうしてだよ」

「え？」

「どうしていつも早く歸つてくれなかつたんだよ」

「……」

「アタシたち、親友だろ？　なのじびつして今まで黙つてたんだよ。  
今だって、明が訊かなければ言わなかつたつもりだろ」

里恵はうつむいて立ち上がった。

「じめん、里恵」

その言葉が聞こえなかつたかのよつて、里恵は部屋から出て行つた。

「じめん……」

斐羅が困つた顔をする。

「何で里恵に言わなかつたの？」

明が訊いた。自分に言つてくれたといひことは、もうとつくて里恵に言つていたつておかしくない、むしろその方が自然だつた。

「自信、ないからかな」

「自信？」

「本当に行けるかどうか。無駄に里恵に心配かけたくなかつたから

そう言つた後、「でも逆に里恵を傷つけちゃつたみたいだね」と咳いた。

「今井、最近ナーバスになりすぎている節があるんだよな

直史が言つた。

「どうして？」

「それは分かんないけど」

明の問ひに直史が首を傾げる。

「私、里恵に謝つてくれる」

「止めとけ。今井が謝罪なんかで機嫌を直すと思つか

「やつぱり……そつだよね」

斐羅はしゅんとした顔をする。

「大丈夫だよ。今井は、安藤のこと一番よく分かつてるから。安藤が学校行かなくなつたときだつて、『辛いことから逃げることも必要だよ』って言つて、無理に学校に行けとか言わなかつただろ？」

今井なら分かってくれるよ。安藤の気持ひ

それを聞いて、明は里恵のことを益々尊敬した。斐羅ちゃんの気持ち、考えているんだ。自分の意見も押し付けず、斐羅ちゃんのことを一番に思っているんだ。明は里恵を見習おうと思つた。

「日曜日、一緒にお祭り行つてくれるかな」

「行つてくれるさ」

「和泉、断言出来るの?」

「出来る。だつて、六年の仲だぜ?」

六年か、長いな。斐羅と知り合つたのは小四のときだから、彼女とも五年の仲。自分より、里恵のことを知つてゐる。明は思い切つて言つた。

「一人に、里恵のことで質問があるんだけど」

「何?」「何だ?」

「里恵が杉沢と付き合つてゐるって、本当?」

斐羅と直史は顔を見合せた。

「杉沢つて、誰?」

斐羅が訊く。

「同じクラスの不良だよ

直史が答える。

「……付き合つてないんじやない？ ましてや不良となんて。私、里恵が誰かと付き合つてゐなんて聞いたことないし」

斐羅が田をくつくつとさせながら言つた。

「今井があんな奴と付き合つわけないだろ」

直史もさう言つ。

「……やっぱり、さうだよね。ただの『デマかー』

明は内心ほつとしていた。煙草、酒、カツアゲ、薬。そんな噂がある杉沢と付き合つてゐるなんて聞いたら、ショックを受けたに違ひなかつた。

「あ、虹」

斐羅が窓の外を見て呴いた。

「あ、ホントだー」

「田曜日、晴れるといいな」

直史は笑つた。

## 第47章 祭り。

日曜日、空は快晴だった。明が屋上で待っていると、浴衣姿の里恵と斐羅がやつてきた。

「斐羅ちゃん可愛いーーー」

「へへ、ありがとう」

斐羅は照れたように笑った。

「アタシはどうなんだよ」

里恵は黒地に赤い花が描かれている浴衣だ。アップにした髪が、大人っぽい雰囲気を醸し出している。

「里恵も綺麗だよ」

「マジ? やつたね」

里恵はガツツポーズをした。

「明は浴衣じゃないんだな」

「あー、私持つてないんだ」

「そりなんだ」

「斐羅ちゃんも髪上げると大人っぽいね」

「そりかなあ」

「里恵、斐羅ちゃんと仲直りはしたの?」

「ああ。斐羅が心配かけたくないって気持ち、分かったからな。アタシはいつでも斐羅の味方だから」

直史が屋上に入ってきた。

「可愛い女子三人と一緒に祭りだなんて夢みたいだろ?」

里恵が言つと、直史は、

「お前は論外」

と言つた。

「ふーん、直史、また里恵キックをお見舞いされたいよ!」  
「それだけは止めてくれ! あれ、意外と痛えんだよ」

明と斐羅は笑つた。

「じゃ、そろそろ行こ!」  
「おひ」

そして四人は祭りのやつている公園へと向かつた。

「あ、かき氷! 食べよーっと。明たちは?」  
「あ、私も食べる」  
「俺も」  
「斐羅は?」  
「……ビーフによつかな」

斐羅はやつて言つたあと、

「だつて舌が色変わるんだもん」

と呟いた。

「じゃあイチゴにすりやっこじゃんか」

最もな提案だと思つた。

「じゃあ……食べようかな」

明はメロン、里恵はブルーハワイ、直史はレモン、斐羅はイチゴを食べた。

「くーっ、頭痛え」

食べ終わつた後里恵が頭を押さえた。

「それ、アイスクリーム頭痛つて言つんだよ」

斐羅が豆知識を披露する。

「さあ、次はたこ焼きだ！　いや、お好み焼きもこなあ……ベビーカステラつてのも有りかも」

迷つてゐる里恵を横目に、直史はフランクフルトを買つて食べて  
いた。

「ねえ、後でみんなで花火しない？」

斐羅が提案した。

「いいねー」「賛成」

里恵はクレープをぱぱりながら、

「アタシもしゃんせー（賛成）」

と言つた。

最後に明たちは金魚すべしをした。明や直史が一匹もすべえないので対して、斐羅は七匹もすべっていた。

「斐羅ちやんす」——

「唯一の特技なの」

と言つた。

「アタシも一匹すべつたぜ？」

「でも、ひつこいつの金魚つてすぐ死んじゃうんだよね」

袋の中の小さな金魚を見つめながら、斐羅は哀しそうになつた。

「でも、こんなに大きくなつた金魚の話もたまに聞くじやんか」

直史が手を広げる。

「育てばいいんだけどね」

斐羅は金魚の入つた袋をつんとついた。

## 第48章 傷痕。

そして明たちは公園を出ると屋上に行つた。

「ねえ、こんなところで花火なんかしていいの？」

明の問いに直史が「駄目だろうな」と答える。

「屋上なんて普段来る人いないから大丈夫だよ」

斐羅が言つた。そして斐羅の持つてきた花火セットと里恵の持つてきたバケツとライターを用意する。

「じゃ、火点けるよ」

里恵がみんなの持つている花火に火を点けた。パチパチ、という音がし、先の方がオレンジ色に輝いた。

「わー、綺麗」

明は感動した。暗くなつた夜、花火の火だけが辺りを明るく照らしていた。

「うん、綺麗」

と、斐羅。

「たまには、こうやって女子と遊ぶのも楽しいな」「アタシも直史と遊べて楽しかったよ」

「……私も

斐羅がちょっと恥ずかしそうに言った。

「また、みんなで遊ぼうね」

明の言葉にみんなが頷いた。

「じゃ、締めの線香花火でもやりますか」

線香花火の先に火が灯る。明たちはそれをじつと見ていた。やがて火はぽたりと落ちた。

「来年も、いつやって遊べるかな」

明が口にした。

「来年も、再来年も遊べるよ」

里恵が言った。多分、一年後はみんな違う道を歩いている。もひ、こんな日は訪れないかもしれない。少し感傷的な気分になつた。

時間も遅くなってきたので、明は帰ることにした。

「今日はありがとね」

明の言葉にみんなは頷いた。

「じゃあ、またね。斐羅ちゃん、一緒に帰ろ」

「うん」

そして明たちは屋上を出て、エレベーターで降りた。静かな夜だつた。

「今日は楽しかったね」

「うん」

「また遊ぼうね」

「……うん」

斐羅の顔色が優れないことに明は気付いた。

「どうしたの、斐羅ちゃん？」

「……うん」

斐羅は迷っている様子だったが、やがて決心したかのように

「今から話すことは、誰にも言わないで」

と言つた。深刻な声のトーンに明も真面目な顔になる。

「分かった」

すると斐羅は左腕の袖をゆっくりとめくつ上げた。

そこには、何本もの赤い線が街灯に照らされて浮かび上がっていた。

「……」

明は言葉を失う。

「私、リストカットしてるの」

生ぬるい風が吹いた。

「……どうして」

明はそれだけしか言えなかつた。

「辛いの。生きてることが

自然と一人の足は止まつていた。斐羅は袖を下ろすと、後れ毛を耳にかけた。

「里恵や和泉は？ そのこと知ってるの？」

斐羅は首を横に振つた。

「人に話したのは今回が初めて」

「どうして、私なんかに話してくれたの？」

「明ちゃんなら、分かつてくれると思ったから」

「里恵は？」

「心配、かけたくないから」

その言葉が明は氣になつた。

「私だつて」

「え？」

「私だつて心配するよー。『んな私でも斐羅ちゃんの友達なんだよ？』心配するに決まつてるじゃん……」

そりや、里恵の方が大事かもしれない。でも、自分だつて斐羅のことは大切なのに……。

「違うの。明ちゃんが友達だから、告白したんだよ。里恵にこんなこと言つたら、『止める』って言われる気がして。だから、明ちゃんだけに話したんだよ？」

斐羅は困った顔をしていた。そうだ、こんなことを気にしている場合ではない。痛々しい傷痕は袖でもう見えない。

「……いつから切つたの？」  
「学校行かなくなつた頃から」  
「痛くないの？」  
「切るときは痛いけど、次の日になれば大丈夫」  
「……止められないの？」  
「うん」

そして二人は無言になつた。

「あれ、まだいたの？」

里恵がマンショնから出てきた。

「どうかした？」

「里恵の方こそ」

「アタシはコンビニ。一人とも何深刻な顔してんの？」

「 何でもない。帰る、明ちゃん」

斐羅はさう言つて歩き出した。明も斐羅について行く。

「だから、プール行くのに気が乗らなかつたんだ」

「そう」

「本当に、里恵に言わなくていいの?」

「ともじやないけど、言えないよ」

リストカットをしてしまつほど辛い心境というのが明には分からなかつた。でも、分かつてあげたかつた。

「じゃあ、絶対誰にも言わないでね。特に里恵には」

別れ道にさしかかつたところ、斐羅が言つた。

「……うん」

「またね」

「バイバイ」

結局自分は何の言葉もかけてあげられなかつた。何て声をかけたらいいのか分からなかつた。そして、里恵に黙つている自信がないのも事実だつた。

## 第49章 行ひつかな。

「斐羅ちやん、お願ひつ…」

明は斐羅に向かつて手を合わせた。

「私が川田総合高校に受かるか占ひて…」

「いいけど…」

「明、止めとけ。どうせ無理なんだから」

「里恵だけには言われたくないー」

斐羅はタロットカードを混ぜ始めた。そして、一つにまとめた後、三枚のカードを並べる。ひとつと、カードが裏返された。

「呪のされた男と、月のカードか……」

斐羅の表情が曇った。

「それってどうしてカード？」

「呪のされた男は、困難とか、試練に耐えるって意味。月は、不安とか、障害が多くなるって意味」

「えー、最悪じゃん……」

「つまり明は受からない、と」

「そんなに断言は出来ないけど……」

明はあからさまに落胆した。里恵が明の背中を強く呪く。斐羅は困つたように微笑んで、

「今から努力すれば簡単に未来なんて変えられるよ」

と呟つた。ありがとひへ、斐羅ちやん、と明が言ひ。

「ひやつて、いつも通りに斐羅と接していく自分がこる。あの日の告白など聞かなかつたかのよひ。斐羅ちやんも前と同じように接してくれることを理んでいるだひつ」と明は思つていた。

「結局今年はプール行けなかつたな」

里恵がぼそりと呟つて、斐羅は身体を小さく丸めた。

「でもでも、お祭りに行けたからいいじゃん！ 楽しかつたよ、今年の夏休みは」

明が明るく呟つた。斐羅が明の方を見る。ありがとひ。心の中でそつこつといふ気がした。

「里恵ー、なおくんが来たわよー」

里恵の母親の声がした。

「よし、畠さんお揃いで」

直史が手を上げて里恵の部屋に入ってきた。

「そうだ、直史も斐羅に占つてもうえよ。浦高受かるか」

「俺は、占つとかやらない質なんだ。だつて、未来は分からぬ方が楽しいだろ？ 今井、お前こそ占つてもうえよ。将来のこと」「えー、アタシ？ 別に不安なんて全然ないけど……斐羅、占つてみてよ」「分かった」

そして斐羅は一枚のカードをめくつた。

「運命の輪の逆位置と、塔、か……。塔が出ちゃつたかー……」「塔のカードって、確か悪いんじやなかつたっけ？」

里恵が眉間に皺を寄せた。

「うん、最悪。災難とか、恋の終わりとか、病氣とか」「マジかよー。アタシの人生お先真つ暗かよおー」

里恵にしては珍しく落ち込んだようだつた。

「でも、たかが占いだし。当たるも八卦、当たらぬも八卦」

斐羅がそう言つて励ましたが、

「でも斐羅の占いは百発百中じゃん……」

と言つて頭をつんだれた。斐羅は頭を搔いた後、里恵の頬を手で挟む。

「せんなの、里恵らしくなーーー！」

すねると里恵は少し笑つて、

「やつだよなあ……。占い」とセで落ち込むなんてアタシらしくないよなあ

と言つた。

「明も斐羅も直史も高校かー。アタシも行こうかな、高校」  
その言葉に眞理あきよしどした。

「何だよ眞してそんな顔して」

「だつて里恵、あれだけ高校には行かないって言つていたの」

明の言葉に、里恵が笑つた。

「定時制とか、ちょっとは全田制よりマシかなあつて思つてて。アタシの学力でも入れるし」

「里恵は、学校の何が嫌なの？」

「ねちねちした人間関係。定時制なら年齢もばらばらだからグループとかなさそうじやん」

そうこうとか。

「私は、里恵の好きな道を選んだらいと想ひよ」

「お前、将来何になりたいの？」

直史が訊いた。

と、斐羅。

「そんなの、わかんねえよ。まだ十五歳だぜ？ 直史はもう決まつ

てんの？」

「政治家。」の世の中を変えてやるんだ」

直史の大きな夢に明たちは田を丸くした。明だつて里恵と同じく将来の夢なんて決まっていない。堂々と自分の夢を語れる直史がうらやましかった。

「明日で夏休みも終わりだね」

斐羅が言った。明日、本当に斐羅は学校へ行くのだろうか。行けるのだろうつか。一学期には杉沢も退院してくるだろう。あやふやなままで終わったあの事件の真相が分かるときが来るなんて、このときの明は思いもしなかった。

## 第50章 大つ嫌い。

新学期。斐羅は学校の門の前で立ち往生していた。もう授業は始まっている。担任には母から遅刻するとの連絡を入れてもらっていた。皆と一緒に校舎に入る勇気がなかつたから。だって、もしも知つている子に出くわしたらどんな反応をすればいいのだろう？教室に入つたらまた、戦争が始まる。どつちにも付けない永世中立国の自分。いつまで戦争は続くのだろう？ 怖くなつて、門に手をかけては離すの繰り返しだった。

昇降口から見覚えのある生徒たちがぞろぞろと体育着に身を包み校庭へ現れた。斐羅の身体が硬直する。その中には自分のグループだつた子もいた。いじめの主犯格。どうしてそんなことをするのかと尋ねたい気持ちになつたことはなんどもある。けれど、訊くことは出来なかつた。

「あ、あれ、安藤さんじゃない？」

彼女の声が聞こえた。斐羅はとつさに校門の影に身を隠す。見つかつた。心臓はうるさいほどに鼓動を打つている。でも、見つかつたことよりも友達だつたはずの彼女に名前で呼ばれたことが斐羅の頭を支配した。ああ、そうか。私はもう、友達じゃないんだな。

「安藤さん」

一年前まで友達だつた彼女が名前を呼んでいる。仕方なく、斐羅は姿を現した。

「久しぶり」

「う、ん……」

斐羅にいたりたいと訊きたいことがあった。いじめられていた女子はどうしているのか。別のクラスになつて、いじめから開放され、樂しそうな学校生活を送っているなら斐羅の罪悪感も少しほ薄れる。

「アリス、ジョシカちゃんは？」

ありつけの悪気を出して訊いてみた。

「ああ、野崎？」

「うん……」

「あいつなら、中一のときに転校したよ。青山中には

転校……。青山中とは、里恵たちが通つている学校だ。それほど離れてはいない。それがどうこう意味を持つのか、斐羅には分かっていた。

「あいつ、逃げたんだよ」

そう。ジョシカちゃんは、彼女たちから逃げたのだ。

「あ、安藤」

校庭に来た体育の先生が声をかけてきた。先生の後ろで「安藤さんって誰?」といつ声が聞こえる。

「不登校の人だよ」

そう答えたのは友達だった彼女。他人事のようにあっさりと言われたことで、斐羅の心は傷付いた。そして、怖くなつた。自分に向けられる皆の目。先生の作ったような笑顔。何よりも、友達だった彼女が。斐羅は皆に背中を向けて走り去つた。馬鹿。自分の弱虫。そう心で叫びながら。

「あ、斐羅からメールだ」

休み時間、里恵が隠し持つていた携帯電話を見て言つた。

「何何?」

「えーっと……『やつぱり学校行けなかつた。嫌だよ。もう嫌だよ……。私なんか大つ嫌い』だつて。やつぱり無理だつたかー……」「そつかあ……」

明と里恵は暗い表情になる。

「スマイリー」

ナツキが明を呼んでいた。「行けよ」と里恵が言ったので、ためらいつつもナツキたちの元へ行つた。里恵の方を見ると、教科書を通学バッグに入れて何やら帰る支度をしているようだつた。きっと、斐羅の元へ行くのだろう。

「あ、杉沢」

紀子が呟いた。彼女の視線の先を追うと、クボタの背中に冷却スプレーをかけている杉沢の姿があった。クボタは黙つて俯いている。誰も止めようとはしない。直史は、友達と喋つてまるで気付いていないかのようなふりをしている。そうだ、里恵は？ 里恵なら、止めるはずだ。

しかし、里恵は一瞬杉沢に視線を向けたがすぐに逸らし、教室を出て行つた。

「何で……」

思わず明は呟いた。

「何が？」

ナツキが訊く。

「何で、誰も杉沢のこと止めようとしないの？」

「だつて、自分がターゲットになつたら嫌じやん。それに、そこまでしてクボタを助けたい人なんてこのクラスにいる？」

そうだ。自分だつて、クボタを助けようとしない。ていいないじゃないか。自分がいじめられたつて構わない、なんて思えるほどクボタのことが好きなわけじゃない。いじめ。あれはいじめだ。里恵のいじめは収まつた。けれど、杉沢を止められる者なんて多分いないだろう。杉沢は冷却スプレーをかけ終わつた。すると、満足げな顔でその場を去ろうとする杉沢に直史が近寄つた。

「何だよ、和泉」

「お前、止めるよそういうの」

「は？」

「変わったな、お前」

「うみせえな」

「こんな姿見たらい、安藤が悲しむだらうな」

あん、じつ？

杉沢は床に睡を吐いて教室を出て行った。安藤が悲しむ。安藤つ  
て……。

「まつざわやこのことへ。」

## 第51章 赤い染み

明は和泉に言葉の意味を訊こうとしたが、チャイムが鳴ってしまったので仕方なく席に着いた。斐羅ちゃんが悲しむ？ 杉沢の姿を見て？ 斐羅と杉沢は知り合いなのだろうか。でも、前に斐羅は「杉沢って誰？」と訊いていた。考えれば考えるほど分からなくなる。

「和泉、格好良かつたね」

次の休み時間、紀子が言った。

「惚れ直した？」

とナツキ。やだあ、と紀子が笑う。

「紀子ちゃん、そんなに和泉のこと好きならさわやかえばいいじゃん」

明が言った。

「え、無理だよ！ 無理無理」

「他の人にどうられちゃうかもしないよ？」

「でも……」

「うちが代わりに言ひてこようか？」

「駄目！」

「冗談冗談」

「もう。あ、私ちょっとトイレ行ってくる」

紀子が席を立つた。

「紀子つて面白いよね」

ナツキが言った。以前、ナツキは紀子のことをナルシストと言つていたことがある。しかし、いつの間にか一人は以前より仲良くなつているようだつた。

「ナツキ、夏休み受験勉強した?」

「したした。紀子に負けたくないからな。同じ高校に行きたいし」

「私は、多分一人と同じ高校にはいけないと思つ」

「学校が離れてもうちらは友達じやんか」

その言葉が嬉しかつた。

放課後、明は部活を休み里恵のマンションの屋上へ行つた。予想とは違い、斐羅だけの姿がなかつた。

「斐羅ちゃんは?」

「朝、斐羅んち行つた。屋上に行かない? つて誘つたけど今の心境では行けないって」

「斐羅ちゃん、何て言つてた?」

「ネガティブモード突入してたな。やっぱり私なんか生まれて来なければ良かったんだ、つて」

「ほつといて大丈夫なの?」

明は心配になつた。

「ううん。アタシだつて心配だよ。でも、一人になりたいつて追い返されて」

「でも、もう一回安藤の家行つてみないか?」

直史が提案した。

「そうだな。もう一度行ってみるか」

「だね」

三人は屋上を後にして斐羅の家へ向かうことになった。

そこは薄汚いアパートだった。里恵がインター ホンを押すと斐羅の母親と思われる人物が出てきた。

「ああ、里恵ちゃん」

「度々すみません。もう一度だけ、斐羅に会わせて頂けないでしょうか?」

里恵があまりに丁寧な言葉を使つもだから明はびっくりした。

「いいよ。畠入って」

「ありがとうございます!」

そして明たちは中に入った。斐羅の部屋まで行くと、斐羅の母が声をかけた。

「斐羅。里恵ちゃんたちが来たよ。ドア開けるね

「え、ちよ、ちよつと待つて!」

斐羅の焦った声が聞こえたが、斐羅の母は構わずドアを開けた。すると、ベッドに寄りかかって座る斐羅がいた。ドアが開く瞬間に後ろに何かを隠したようにも見えた。斐羅の母はその場を離れ、里恵が、

「入つていい？」

と訊いた。

「「めん……入れられない」

斐羅はまっすぐ明たちを見つめながら叫んだ。まるで、他のものから田を逸らさせるかのようだ。

しかし、明は気付いてしまった。斐羅の座るすぐ側の床に、赤い染みがぽたぽたあることを。

「少しでいいから」

里恵が中に入ろうとする。

「駄目……！」

斐羅は手のひらで赤い染みを隠そうとするが、それより先に直史が言った。

「それ、血か？」

まだ、このときなら否定のしようもあつたかもしれない。しかし、皆の視線が赤い染みに集まつた今、血が手首を伝つてぼとりと床に新たな染みを作ってしまった。里恵と直史が驚愕の表情を浮かべる。

「……」

斐羅は何も言わなかつた。

「斐羅、おやが……」

里恵が言った。そして斐羅に近付き血が垂れている方の袖をめぐり上げた。すると、傷口がぱっくぱくと開いて血を流していた。斐羅は俯いたまま無言だった。

「斐羅……」

里恵が呟く。明はベッドの上にあるトレイッシュコを取りて斐羅に渡した。

「…………ありがとう」

斐羅は傷口をティッシュで拭く。

「どうして……」

里恵が絞り出すかのような声で言った。

「どうして言ひてくれなかつたんだよー」

明は驚いた。ところのち、里恵が涙を流していたからだ。  
直史は入り口に立つたまゝ、

「俺たちは言ひ合へてもよかつたじやないか」

と言つた。

「『』みんなさー……」

斐羅が消え入りそつた声で謝る。

「明は知つてたのか？ 驚いてないけど」

里恵の問いに明はためらいがちに頷いた。

「明には言つたのに、アタシにはおつと黙わなかつたの？ デリして？ どうしてよ……」

里恵は今も泣いてくる。

「だつて、里恵こんなこと私がしてゐつて知つたら止めるでしょ？ なおくんも」

斐羅は里恵と直史を交互に見つめた。

「当たり前だろ」

「ああ」

と里恵と直史。

「そんなに死にたいのなら、アタシに相談してくれたつて良かつた  
じゃないか」

「違う。違うの」

斐羅は首を振る。

「私、死にたいんじゃない。死にたくて切つてるわけじゃない。生きたいんだよ。生きたいから切つてるんだよー」

斐羅の語尾が強くなる。

「辛やを痛みで紛らわすの。だから、私は生きてこられた。そいで  
もしなやや、私、生きられないの……」

斐羅は涙を零した。

## 第52章 譲想い。

すると里恵は斐羅を抱きしめて、

「「めん……アタシ、斐羅のこと何も分かつていなかつた。気付いてあげられなくて」「めん。打ち明ける」との出来ないような人間で「「めん。斐羅がそんなに苦しんでいるなんて知らなかつたよ」

「里恵……」

斐羅はゆづくつと里恵から身体を離して、

「私が悪いの。「めんね、弱い人間で」

「そんなことねえよ」

直史が言った。そして続ける。

「辛い状況に耐えている安藤は、誰よりも強いよ」

「なおくん……」

「直史の言つとおりだよ。斐羅は充分強い。だから、もつと力抜いて生きていいんだよ」

里恵は口を擦りながら言つた。斐羅は背後に手をやつて、隠したカッターを持つと、

「いつかは、このカッターを使わなくなる日が来ると思つ。それまで、里恵たちにはゆづくつ待つてほし」

ああ、と里恵たちは頷いた。

「あ、そういうえばジョンシカちゃんって里恵たちの学校にいる?  
「ジョンシカって、野崎ジョンシカ?」

明と同じクラスの学級委員だ。和泉が里恵のこと好きだったと  
バラした女子。

「そう。ジョンシカちゃん、うちの中学校でいじめられていた子なの。  
私が学校休んでこる間に転校したりして。ジョンシカちゃん、元気  
にやつてる?」

「野崎さんなら元気にやつてるよ。な、明?」

「うん。友達も沢山いるよ」

「そらなんだ。良かった」

斐羅が今日初めて笑顔を見せた。

そしてたわいない話をしているうちに、日が暮れたので明たちは  
帰ることにした。

「またな、斐羅」

「うん。今日は皆、本当にありがとう」

何か問題が解決したわけじゃない。斐羅は登校出来なかつたし、  
リストカットも止めていない。しかし、明はすがすがしい気持ちだ  
った。

「じゃ、またね、里恵、和泉

「またな」

「おう」

明は里恵たちと別れ家へ向かつた。

次の日。杉沢の姿を見て明は思い出した。昨日、直史が杉沢に対して意味深な発言をしていたことを。

「和泉、ちょっと来て」

直史を廊下まで引つ張ると明は尋ねた。

「昨日、杉沢に『こんな姿見たら、安藤が哀しむだらうな』って言つてたよね？ それってどういふ意味？」

「あー……。実は、杉沢って安藤と両想いだったんだよ」

「……え！？」

あの杉沢が、斐羅と？

「だつて斐羅ちゃん、前に私が里恵と杉沢つて付き合つてゐるの？ つて訊いたとき、杉沢つて誰？ つて言つてたじやん」

「前は『本村』だつたんだけど、親が再婚して名字が変わつたんだよ」

「でも和泉、ただの不良だよつて言つてた」

「杉沢も昔はいい奴だつたんだ。そのイメージを壊したくなくて」「いい奴だつたの？」

「ああ。こつも四人で一緒にいた

数年前までは自分のポジションには杉沢がいたというのか。不思議な気持ちだった。そして、ある案が浮かんだ。

「……斐羅ちゃんが協力してくれれば、杉沢、変わるかな」「え？」

「杉沢って、もしかしたら根っからのワルじゃないのかもしれない。そしたら、変わることだって出来るかも」

「……今井がお前に惚れたの、分かる気がするよ」

「え？」

「そうやって他人のことを考えられる奴、なかなかいねえよ」

直史にそう言われて明の顔が赤くなる。不覚だった。

「とりあえず里恵に相談してみる。それじゃ

そう言つて足早にその場を後にした。

「……つていうわけなんだけど、里恵、どう思ひ？」「うーん……」

登校してきた里恵に相談すると、里恵は困った表情を浮かべた。

「多分、その作戦は成功しないと思つただよな」

それが悩んだ挙げ句に出てきた里恵の言葉だった。

「やうかなあ……」

その時、ガタンと大きな音が聞こえた。明と里恵は振り返った。すると、クボタが床に転がっていた。クボタの椅子がひっくり返っている。近くには、杉沢。

「お前、キモいから死んでくれない？」

「……」

杉沢の言葉にクボタは何も言わない。皆が彼らに注目していた。でも、助けようとすることは誰もいない。明はその光景を見ているのが辛かつた。

「杉沢、止めるよ」

そう言ったのはまたしても直史だった。

「安藤に言つてもいいのか？ 今のお前の姿」

すると杉沢はふつと笑つて、

「勝手に言えよ。俺があんな女のことにつまでも好きなわけないじ  
やんか」

「あんな女つて、そんな言い方……」

「暗いし、つまんねえし。あんな不細工、今でも好きなわけないじ  
やんか」

「お前……！」

直史は杉沢につかみかかるとした。それを止めたのは、明だつた。

「和泉、こんな奴殴つたつて手が痛くなるだけだよ」

「幼なじみをけなされて黙つていらるかよ…」

「それは私も同じ気持ち」

大丈夫、怖くない、怖くない……。そう自分に言い聞かせながら

明は杉沢の目をまっすぐ見て言った。

「杉沢、いじめは止めな」

「何でお前に命令されなくちゃいけねえんだよ」

「あと、斐羅むりやんのことそんな風に言わないで」

「何、お前、不細工の友達なの?」

「不細工って言つんじゃねえよ!」

ついに明は我慢出来なくなつた。直史を止めておきながらも、明は倒れていた椅子を杉沢に向かつて投げた。杉沢は「痛え!」と声をあげると、殺氣のこもつた瞳で明を睨み、誰かが止めるのも間に合わないほどの速さで腹部を殴つた。

「うう……」

明はお腹を押さえてうずくまる。すぐにナツキと紀子が近寄ってきた。里恵は立ちすくんだままだつた。直史が殴りかかるうとするのを、他の男子が止めた。

「死ね、江川」

杉沢はさう呟くと教室を出て行つた。

## 第53章 嫌な予感。

「スマイリー、大丈夫？」

「ん……大丈夫」

ナツキが心配そうな顔で声をかけてくる。直史も、  
「大丈夫か」

と言つてきた。しかし里恵は微動だにせず、無言で下を向いていた。明も様子がおかしいことに気が付き、立ち上がりて言つた。

「里恵？」

返事はない。明は里恵に近付いて、顔を覗き込んだ。

「そうだよね」

「え？」

「明と直史は正しいよ。間違つているのは、アタシ」

「……」

「アタシだって、皆のことが好きだよ。だから、アタシも正しいこと、しようと思つ」

明の目を見つめ、そう言つた。どういう意味かいまいち分からず  
に聞き返したが、里恵はそれ以上何も語ろうとはしなかつた。しかし最後に、

「『』めんね」

と言つた。何に対して謝つてゐるのか、それも結局分からなかつた。

クボタの件は、担任に言いつけるという案もあるが、明は出来ればそうしたくはなかつた。注意したらエスカレートするかもしれない。言いつけたとバレたら何をされるか分からない。里恵がいじめられていたときよりも遙かに怖かつた。次の休み時間が来ると、杉沢は黒板を消しているクボタの背中に黒板消しを押し付けた。

「悪い、黒板消すの手伝つてやろうかと思つたら間違えちつた。あれ？ でも消えないな。消したんだから消えろよ、クボタ」

クボタは無言で教室から出て行つた。これだけのことをされても言い返さないなんて、余程杉沢が怖いのだろうか。

「杉沢」

呼んだのは里恵だつた。ついに里恵が動き出した。

「ちょっと来て」

そう言つと廊下に姿を消した。杉沢も教室を出た。

「今井さん、杉沢を止めようとしているのかなあ」「でもあいつは注意して止めるような奴じゃないよ」「でも、今井さん強そらだし……」

ナツキと紀子が話す。今、里恵と杉沢はどんな会話をしているのだろう。一人が教室に戻ってきたところでチャイムが鳴つた。

それから杉沢は、なんと六時間目が終わるまでクボタに全く手を出さなかつた。

「あれ、里恵いないの？」

明はマンションの屋上に着くと素つ頓狂な声を出した。直史と斐羅しかいない。

「何か用事があるんだってよ」

「用事ねえ……」

どんな言葉で杉沢を止めたのか訊きたかったの。

「せういえば今日出た宿題、絶対出来ないから和泉やつたら『わせてよ』

「やだね」

「えー、ケチ

「なおくん、受験勉強大変？」

「そりやあな。あ、皆に言つておきたいことがあつてさ。俺、受験が終わるまでここに来るの止める」

「えー」

「たまには来てもいいけどな。やっぱり勉強頑張らなこといけないから

「……どうしてそこまで頑張らないといけないのかな

斐羅が呟いた。

「偏差値の高い学校に入るためだ」

「良い仕事に就く為に？」

「前言つただろ？ 僕、政治家になりたいんだ」

「やつだよね……なおくんは田舎すものがあるんだもんね。でも、あまり無理しないでね」

「ああ。さんきゅ」

「私も受験勉強しないとなあ……」

やらなければいけないのは分かっている。そのままじゃいけない。私立に通えるほど家は裕福じゃない。きっと、一年後はナツキとも紀子とも直史とも里恵とも斐羅とも別々の道を歩んでいるんだろうな。大切なものを手放すのが少し寂しかった。

「……何か」

「え？」

斐羅の弦を明は聞き逃さなかつた。

「何か、嫌な予感がする」

「嫌な予感？」

「うそ。里恵、今どうしているのかなって」

「心配なら電話してみれば？」

直史が提案した。明は嫌な予感など全くしておらず、しかし、タロット占いが出来るような神秘的な力を持つてこる斐羅が言つているのだから少し不安になつた。

「じてみるね」

斐羅が携帯電話を耳に当てる。じばりくすると表情を曇らせて、

「出ない。留守電になつちやつた」

と言つた。

「里恵、何の用事か全然言つてなかつたの？」

「言つてない」

「これまでにも里恵に用事が出来て来なかつた」とつて結構あるの？」

「いや、めつたになこよ、な？」

「うふ

里恵、今どじで何しているんだう。不安が拡大してゆく。

「私、もう一回電話してみる」

斐羅が再び電話をかけた。また出ないのかな……と思つたとき、

「あ、もしもし？」

じつやう里恵が電話に出たらしき。

「今、じこじこゐる。……あ、そりなんだ。こや、ちょっと何とな  
く嫌な予感がして。つい、なら良いんだけど。……うふ、分かつた」

話が終わらかけたとき、斐羅が、

「……本当だよね」

と無機質な声で言つたので、明は思わず彼女の顔を見た。

「……やう。じゃ、またね」

斐羅は電話を切り、

「里恵はスーパーでお母さんに頼まれたもの買つてゐるって」

「斐羅ちゃんは……その、疑つてゐるの？」

「どうして？」

「里恵に本当か確かめてた」

「別に深い意味はないよ」

そう言いながらも、夕方になつて帰るまで斐羅の表情が強張つていたことを私は見逃さなかつた。

## 第54章 良かつたぜ。

里恵はそれからしばらく学校にも屋上にも来なかつた。斐羅が心配して何度も電話をしたらしいが、用事があるの一点張りだつた。杉沢によるいじめは今のところ収まつてゐる。里恵の力だらうか？ 今度会つたときに訊いてみよつと思つていた。

一週間後、里恵が登校してきた。

「あ、おはよ、里恵」  
「おはよ」  
「最近屋上にも来てないじゃん。どうしたの？」  
「ちょっと忙しくて」  
「ふーん……。斐羅がやんも心配してたよ」  
「アタシは大丈夫」

しかし里恵の田の下には酷いクマが出来ていた。

「あ、今井」

直史が里恵の姿に気付いて声をかけてきた。

「よ」  
「江川から聞いたけど最近屋上行つてないんだつて？ 僕も受験勉強で行つてないんだけど。どうしたんだ？ 今井が受験勉強……なわけないよな」  
「忙しいんだつて」  
「そつか……」  
「スマイリーーー！」

ナツキに呼ばれたので席を離れる。

「おは」  
「おはよー」  
「今井さん、久しぶりじやん」  
「だね」  
「でも、このクラスも平和になつたよね。いじめもなくなつたし、由紀たちも大人しいし」

紀子が言った。

「あ、そうこええば昨日の夕方今井さん見かけたよ

と、ナツキ。

「え、どひで？」

「学校の校庭。昨日は学校に来てないのに何の用事だつたんだうつ

どひして、里恵が学校の校庭に？

「私もナツキと一緒に見てたけど、誰か待つてるよひつな感じじやなかつた？」

「あー、かもね」

用事とは誰かと会ひつことだつたのだろうか。でも、誰と？

「ちゅうと里恵に訊いてこようか？」  
「あー、止めた方がいいんじゃない？」  
「どうして？」

「何か周り気にしてたもん。ねー」

「うんうん」

「やつか……」

里恵が知られたくないことなら、訊くようなことはしない。でも、気になるのも事実だつた。チャイムが鳴り、明たちは席に着いた。

昼休み、明は体育着を忘れていたことに気が付き、体育の町田先生に言おうと職員室に行つた。しかし町田先生はおらず、もう体育館にいるのかもしれないと思い体育館に向かつた。

体育館にはまだ誰もいない。町田先生の姿も見つからないので、一旦教室に戻らうとしたとき、微妙に声が聞こえた気がして足を止めた。

「……だよ。皆が来ちゃう……」

女の子の声だ。じつぜん倉庫から声が漏れてくるらしい。明は倉庫の扉に耳を当てた。

「まだ大丈夫だろ」

低い、男の子の声。

「でも……あつ、あ……」

明は驚いて倉庫から耳を離した。

「や……ん、あ」

「気持ちいいだろ?」

「ん……」

誰かが……こんなところで……明の鼓動が速くなる。にしても、この一人の声、どこかで聞いたことがあるよくな。

「今日はこの辺にしとくか。今日も良かつたぜ、里恵

「…………！」

「杉沢……明日も？」

「里恵と、杉沢……？」

「明日じゃねえよ。放課後、田富神社で。分かつたな  
「…………うん」

話が終わりそうだったので、明は急いで体育館を出た。鼓動がうるさい。顔が熱くなっている。どうして？ どうして里恵と杉沢が？ 一人が付き合っているという噂は本当だったのだろうか。もし、そうとしてもあんないつもの里恵の声と違う艶めかしい声、聞きたくなかった。目をつむって頭をぶんぶんと振る。しかしあの声が耳から離れない。とりあえず、教室に戻らないと。

教室に戻るとナツキたちが話しかけてきたが、明は上の空だった。

## 第55章 もう……嫌……。

昼休みが終わってから、明は里恵に一言も話しかけられなかつた。里恵も話しかけてこようとはしなかつた。放課後、明は田富神社へと向かつた。本当はもうあんな声聞きたくないけど、会話を盗み聞きして事の真相を知るつ。里恵は、杉沢と付き合つてゐるのか。里恵のおかげでいじめが収まつたのか。

田富神社に着くと、明は木の陰に身を潜めた。しばらくして、里恵と杉沢がやつてきた。明は息を殺す。

「杉沢……今日でもう外でやるのは止めにしてくれない？」  
「ヤだよ。ホテル高えし」「誰かに見つかつたらどうするの？」  
「別にいいじゃんか」

杉沢はそう言つて賽銭箱の前で里恵を押し倒した。そして濃厚なキスをすると、里恵のYシャツのボタンを外し、下着も取り去つて乳房を舐め始める。明の心臓がドキドキする。見たくない。でも、現実から目を逸らしたら眞実が分からなくなつてしまふ。里恵が声を出し始める。

事が進むに連れて、明の目から涙が出始めた。悲しいのか何なんか自分でも分からない。しゃがみ込んで、必死に嗚咽を漏らすまいと唇を噛み締める。男の子の性器を見るのも、勿論他人の性行為を目の前で見るとも初めてだつた。

事が終わると、里恵は身体を起こした。頬が紅潮している。Yシャツのボタンを閉め、こう言った。

「もう、そろそろいいだろ？」

「まだだ。お前から言つたんじゃねえか。自分がセックスを毎日してあげるから、クボタをいじめないでくれと」

「でも、アタシもう嫌なんだよ」

「何言つてんだよ、俺のことが好きな癖に」

「あつ……」

里恵の首元に舌を這わせる杉沢。もう止めてほしい。これ以上見たくない。でも、今自分が出て行つたら里恵を酷く傷付けることになるだろ？。

「……止めて。確かに杉沢のことは好きだけど、エッチは好きじゃないんだよ……」

「俺と付き合つてるんだもん、セックスするの当たり前じゃねえか」「やつぱり里恵は杉沢と付き合つていたのか。今更ながら、ショックだった。

「やうだけど……杉沢はアタシの身体だけが目的じゃないの……？」

「里恵のことは愛してるよ」

本当だろうか？ 里恵が言つていた好きな人とは、杉沢のことだつたんだな。杉沢のどこがいいんだろう。

「斐羅のことも、もう悪く言わないよね？ 約束したよね」

「ああ、言わねえよ」

里恵は杉沢と一緒にいると、いつもより女らしく感じる。好きな人の前では彼女も女の子になるということとか。クボタと斐羅のために身を売つた里恵。これが、里恵の言つた『正しいこと』なのか。

でも、こんな間違っている。こんなことをして守られたって、クボタはともかく斐羅が喜ぶはずがない。

「じゃあ、また明日な

「うそ……」

杉沢は里恵を置いて神社を後にした。里恵はぼーっとしていたかと思えば、突然涙をこぼし始めた。

「……っく……もつ……嫌、……」

と呟く里恵。めったに見ない彼女の涙に、明は動搖した。そんなに嫌なことをしてまで、一人を守るなんて。里恵が泣くのを止め、神社を去るまで、明は一步も動けなかつた。

明は家に帰つてから、このことを誰かに言つた方がいいのか考えた。直史や斐羅に言つた方がいいのか。この秘密は大きすぎて一人では抱えきれない。でも、口に出すのはまずい。くはばかれることだし、里恵は誰にも知られたくないだろう。

「なのに私は、知つてしまつた……」

知りたくなかった。杉沢が憎い。あいつを救いなければ、誰も傷付くことはなかつたのに。

「明、夕飯だよー」「はーい」

明は考えるのをひとまず止めてリビングへ行つた。

「スマイリー、眠そうだねー」

翌日。あぐいを連発する明に紀子が言つた。昨日はほとんど眠れなかつた。ナツキや紀子にも相談なんて出来ない。話のネタにされるのがオチだらう。異性である直史にも話したい。里恵がかばつている当の本人の斐羅に話すのも気が引ける。だから、

「ちょっと悩み事あつて」

とだけ言つた。

「え、スマイリーに悩み事なんてあるの?」

「失礼な」

「スマイリー、何かあつたらいつでも私たちに相談しなよ」

思わぬ紀子の温かい言葉に明の心が少しそぐれた。だから、つい口に出してしまつた。

「……里恵、やつぱり杉沢と付き合つた……」

「えつー!?

「そうなの?」

「でも、何か嫌々みたいで……。クボタをいじめないのを約束に付き合つてるみたいな……。あと、友達の斐羅ちゃんのこと悪く言わない約束」

ナツキと紀子が顔を見合わせる。

「里恵のあんな姿、見たくなかつた……間違つてるよ、あんなの」

「つかり本音が出てしまった。

「スマイリー……何か色々あつたみたいだね」

ナツキが明の肩に手を置く。

「今井さんはスマイリーがその事実を知つて分かつてゐるの?」

紀子が尋ねる。

「うん。分かつてない」

「じゃあ本人に言つた方がいいよ。そして、こんな間違つてゐるつて言いなよ」

「言えないよ」

「どうして?」

ナツキが訊く。

「里恵は、私が知つているつて分かつたらしくショックを受けると思つもん」

「そつか……。じゃあ、今井さんがスマイリーにそのことを告白するまで知らないふりしてた方がいいんじゃない?」

「でも、里恵すぐ辛そうで……」

「今井さんが杉沢と付き合つていることの辛さと、スマイリーに知られたことの辛さ、どちらの方が辛いかよく考えた方がいいと思う」

でも、里恵は杉沢のことが好きだ。しかし性行為は嫌らしい。毎日性行為を求められることと私が知つてると分かったときのこと、どっちの方が辛いんだろう? 考えていくうちに里恵が登校してき

た。

## 第5・6章 自分のせいだ。

明は里恵の顔を見ることが出来なかつた。知らない方がいいこともあるつて、本当だつたんだ。でも、自分が何か行動を起こさなければ里恵は辛いまだ。どうすればいい？

「今井さん」

ナツキが里恵を呼んだ。

「何？」

「スマイリー、今井さんのこと心配してゐるよ。最近元気ないけど、何かあるのかなーって」

「別に、何もねえよ」

里恵が鼻で笑う。

「本当に？」

『気が付けば、明は紫羅と同じ言葉を口にしていた。里恵の目をじつと見つめていると、彼女は視線を逸らし、

「本当、だよ……」

と細い声で言つた。

「今日は屋上に来てくれるよね？」「あー……、今日も無理だな」

やつぱつ無理か……。杉沢と会うのだから。そして、また……。

「もしかしたら、もういけないかもな」

「えつ」

「冗談冗談」

あながち冗談とも言えないんじゃないかな？」と思つた。

「おー」

里恵が声をかけられた。あいつ……杉沢に。

「何？」

「ちよつと来いよ

廊下に消えた杉沢の後を追う里恵。明は何も言えなかつた。悔しかつた。何も出来ない自分が。

「スマイリー」

ナツキが真顔で言つた。

「その斐羅ちゃんつていう子、今井さんのことにな

「えつ」

「そして、その子に止めてもいいんだよ。そのままじや駄田だよ」

このままじやいけないのは分かつてゐる。でも、杉沢のことを斐羅が知つたらどれだけショックを受けるだらう。ましてや、自分のためにしているだなんて。

「斐羅ちやんつたら、もしかして安藤斐羅ちやんの」とへ。

紀子が訊いてきた。

「そりだけど……知つてゐるの？」

「私、和泉と同じ小学校だつて言つたじやん。だから、斐羅ちやんとも同じ学校だつたんだ」

「あ、そつか」

少し躊躇つたが、明は訊いてみた。

「斐羅ちやんつてどんな子だつた？」

「変わつた子だつたよ。あんまり喋らなくて、でも人の心が読めるつていふか、妙に勘の鋭い子だつた。だから、もしかしたら今井さんのこともう全部分かつてるかも」

里恵が屋上に来なくなつてから、斐羅は元氣がなくなつたように見えた。それは寂しいからだと思つていたが、本当は里恵が自分を犠牲にしていると感づいていたとしたら。いや、そこまで分かるだろうか？ それとも……。

「江川、ちよつと話したい」とあるんだけど

突然直史に話しかけられてびっくりした。里恵の話は直史には知られたくないと思つていたから余計に。直史についていくと、窓際で足を止めて言つた。

「タベ、安藤から電話があつたんだ」

「何て？」

「里恵、もしかしたら自分のせいで酷いことをされてるかもしれない

い、つて

ぎくりとした。

「ん？ 江川この話知ってるのか？」

「う、ううと！」

「何でそう思うのかって訊いても答えてくれなかつたんだよな……。ただの勘なのが、それとも……」

「それとも？」

「俺たちの知らない情報を知つているかだな」

それは明がわざと考えようとした可能性と同じだった。

「とりあえず、俺今日は屋上に行つてみるよ

「駄目！」

とにかく明が口にした。

「え？ どうして？」

「その……私が斐羅ちゃんに詳しく訊いてみるから大丈夫！ 何か分かつたら和泉にちゃんと報告するし。和泉は受験勉強頑張つてよ」

そう言つて笑顔を作る。

「さうか……？ ジャあ、江川に頼むよ。よろしくな  
「うん。任せて」

直史が立ち去つた後、明が呟いた。

「やひ、これが一番いいやり方なんだ……」

屋上に行くと斐羅はもうそこにいた。

「斐羅ちゃん、元気?」

「え、元気だけど……」

「嘘、吐かなくてこよ」

明が斐羅の隣に座る。

「訊いたよ? 和泉から。それに、元気ないの見てて分かるもん」「そつか……」

斐羅がうつむく。

「で、どうして里恵が自分のせいで酷いことをされたんだなんて思うの?」

「……」

斐羅は答えなかつた。言つてくれまるまでこつまでも待とひ。明はそう思つていた。

やがて、斐羅が躊躇いがちに口を開いた。

「……三日前、デパートで本村くんつていう小学校の同級生と偶然会つたの。そしたら……」

本村くん、とは杉沢のことだ。自分の心臓がびくん、びくんと鼓動を打つのが聞こえる。

「そしたら、『久しぶりじゃん。お前、相変わらず不細工だな。しかも不登校なんだって？人間のクズじゃん』って……まあ、それはどうでもいい話だよね。でも、その後言ってたの『

斐羅は顔を上げて明をまつすぐ見つめた。

「『里恵もお前なんかと友達じゃなかつたら、あんな思いせずに済むのにな』って言つたの。楽しそうに笑つて……。私の知つている本村くんじやなかつた。いつも優しい言葉をかけてくれた本村くんはもういなかつた

悲しそうに斐羅が言つた。斐羅はまだ、杉沢のことが好きなのだろうか？ もしかつたら、里恵のことを言つたら一重のショックを受けるだろ？ だから、うかつには口に出せない。でも、最低限の情報は言わなければいけない。私は、もつ覚悟を決めたのだか

ら。

「里恵、杉沢と無理やり付き合つてるよ。…………クラスで起きているいじめを止めるために」

## 第57章 名探偵。

明の言葉を聞くと斐羅は田を見開いて、

「里恵が……無理やり……？」

と叫ひた。

「うん……」

「里恵が言つたの？」

「うん。たまたま見ちゃって」

「どういう光景を？」

「え？」

まさか、そんなことを訊かれるとは思つていなかつたので明は困惑した。

「一緒にいるだけじゃ、付き合つてゐだなんて分からぬでしょ？」

「それはその……う、手！ 手を繋いで街の中を歩いてたの！」

「ふうん……。無理やつだつてのは何で分かつたの？」

「余話だよ。『付き合つてやるから、クボタをいじめないでくれつてお前から言つたんだろ？』って杉沢が言つてた

「……」

斐羅はあーを触つて何やら考へ事をしてゐる様子だつた。

「それで今いじめは止まつてゐんだけど、里恵が可哀想で。どうたらしいのかな？ 先生にいじめのことをチクリて里恵がもつと酷い目に遭つたら嫌だし」

「……逆の方法をとればいいんじゃないかな?」

「逆?」

「そのクボタつて人のことをいじめていたことを先生や親にバラされたくないね、里恵と別れる、って」

その発想はなかつた。名案だと思つたが、問題がある。

「それ、いい考えだけどまたいじめが始まるとじゃない?」

「それも、先生に言うぞって言えばいいんだと思う。一番の問題は、いじめられるのが怖くて誰も先生に言えないことなんだから。ともかくいい作戦だとは思えないけど、何もしないよりはマシじゃないかな」

「うん。私、杉沢に言つてみるよ」

「私も一緒に言つてやりたい。いいよね?」

それはまずい。杉沢が本村くんだとバレてしまう。杉沢に対する斐羅の気持ちが分からぬ以上、会わせるのは得策ではない。それに、本当は里恵は付き合つていることが嫌なんじゃなくて性行為が嫌なんだと分かつてしまつ。

「大丈夫だよ、私一人で。杉沢に別れるように言つたことが里恵に伝わる可能性もなくあらずじゃない? 里恵は多分、杉沢と付き合つていることを私たちに知られたくないんだと思うんだ。だから、せめて斐羅ちゃんだけでも知らないふりをしていてほしいの」

「……そうだね。分かつた」

明はほつとした。

「明日、言つてくれるね」

「いい結果を待つてるよ」

この作戦が上手くいけば、皆を救えるんだ。頑張れ、私！

決戦日。里恵は遅刻ぎりぎりで登校してきた。しかし、杉沢はいつもになつても姿を現さなかつた。せっかく覚悟を決めたのに。まあ、別に今田じゃなくていいか。まだこのときはそう思つていた。

休み時間、里恵は体育着に着替え教室を出て行つた。携帯電話を机の中に入れて。今まで里恵の携帯電話を覗き見したいだなんて思つたことなかつた。しかし、里恵は今隠し事をしている。もしかしたら、あの携帯電話を見れば何かいい案が浮かぶかもしれない。次の授業は体育。明は最後まで教室に残ると、思い切つて携帯電話を開いた。あつた、杉沢からのメールだ。送られてきたのは昨日。

『明日は田宮神社でお前の撮影会だ。綺麗な下着付けて来いよ』

撮影会！ そんなことをされたら、写真をネタにして何をされるか分かつたもんじやない。食い止めなければいけない。でも、どうやって……。やっぱり、あれしか方法は残されていないのだろうか。一番とりとくなかったあの方法を。

「ずっと辛いよりは、一瞬だけ辛い方がマシだもんね……」

明は自分に言い聞かせた。

放課後、明は田宮神社へ直行した。すでに里恵の姿があつた。まだ杉沢は來ていない。里恵は明らかに元気のない様子で、

「 もう、アタシも終わつたな……」

と独り言を呟いた。

「 杉沢のこと、待つてるんだね」

「 !?」

聞こえてきた小声に驚いて振り向くと、斐羅がいた。

「 斐羅ちゃん、何で!/?」

「 学校から里恵のことつけてきたの」

「 どうして?」

「 明ちゃんが何で嘘を吐いたのか知りたかったから」

斐羅の言葉にまたもどきりとする。

「 嘘つて、何のこと?」

「 どういう光景を見たか。明ちゃん、言つたよね? 街の中で手を繋いで歩いているのを見た、って」

「 うん。本当だよ、見たもん」

「 嘘。だって騒がしい街の中で、一人の会話が聞こえるほど近くを歩いていたらとっくに気付かれているよ」

まさか、こんなところ名探偵がいたとはね……。明は言つ返せなかつた。

「 早いな」

杉沢が神社の鳥居をくぐつてきた。斐羅が息だけで「えつー?」と言つた。

「どうして……本村くんが……」

本当のことは言じづらがもうまかしようがない、明は仕方なく口にした。

「……本村くんは今は杉沢って言つんだ……」

「でも前明ちゃんが杉沢と付き合つてこるのが説いてきたとき、なおくんはただの不良だつて」

「今の姿を知つたら斐羅ちゃんがショックを受けると思ったからだよ」

「……その口ぶりからして、知つてるんだね。私の気持ち」

「うめんな、黙つてて」

「ん？ 何か声聞こえなかつたか」

杉沢が言つた。明は自分の口を押さえる。斐羅も同じ行動をとつた。

「氣のせいだる」

「みたいだな。じゃあ、始めるだ」

里恵を押し倒す杉沢。そして行為に及ぶ。斐羅が息をのむのが聞こえた。明は思わず里恵から目を逸らした。代わりに斐羅を見てみると、無言で涙を流していた。杉沢が嫌いで、里恵ともまだ付き合いの浅い自分がただけショックを受けたのだから、斐羅のショックは計り知れないだろう。しかし今はそれに構つている場合じやない。早くしないと撮影が始まってしまう。

「めんね、里恵。

心の中で呴くと、隠れていた茂みから一人の前に姿を現した。

「…？」

「え、江川……！？」

里恵は胸を隠し、信じられないと言つた様子で明を見ていた。

「お前、何でここに……？」

「聞いちやつたの。体育館倉庫での里恵とあなたの会話を」

「め、い……」

「それだけじゃない。ここで今みたいなことじついるのも見た」

里恵が身体を起した。顔が赤くなっている。衣服をちぢらんと身に着けると、

「……杉沢、どうして

と言つた。杉沢もズボンを履き、

「まさか、見られてたとはな」

と言つて口を詰ませた。

「杉沢のせいだ、里恵がどれだけ辛い思いをしているか知ってるの

！　あんたさえ……あんたさえいなければ……」

「お前、何言つてんの？　俺と里恵は付き合つてんの。付き合つてる男女がセックスして何が悪い？」

「とぼけないで。ちゃんと聞いたんだから。クボタのいじめを止め  
る為に里恵が嫌々身体を差し出してるって」

「へつ、知らねえな」

「止めてくれなければ、先生に言つから。クボタをいじめていたこと」

「止めなきやいけない」となんて何にもねえよ。な、里恵

杉沢が里恵の肩に手を回す。里恵は頭を伏せながら、

「……やつだよ」

と言つた。

「里恵…」

「辛いことなんて一つもない。アタシは、杉沢が好きなんだから」「こんな奴のこと、本当に好きなの？ クボタをいじめて、斐羅ちゃんを中傷して。こんな奴が本当に好きなの？」

「ああ、やついえば安藤との前会つたな。相変わらずキモかったなー」

「杉沢、もう斐羅のことは悪く言わないって約束だろー。」

「そ、杉沢は斐羅ちゃんのことを酷く言わない代わりに、里恵の身体を無理やり奪つたんだ」

「」まで言つて、自分は大変な失言をしたことに気が付いた。

今、斐羅ちゃんいるんだつた。

自分の為に里恵がこんな思いをしていると知られてしまった……。

明は前髪をかき上げて頭を抱えた。

「そんな事実はない」

里恵が言つた。

「嘘！」

「明に危ない思いはしてほしくないんだよ。」この意味、分かるだろ  
？」「

杉沢を敵に回したら身に危険が及ぶところとか。

「もへ、誰にも辛い思いはしてほしくないんだよ……」

「あなたが辛い思いをしてるじゃない」

斐羅が茂みから出てきていた。里恵の身体の動きが止まっ  
た。杉沢は笑みを浮かべて、

「あやか出歯龜が一人もいるとはな

と呟つた。

「里恵、『めんね』

「……何で斐羅が」

今の里恵にはこれだけ言うのが精一杯といった様子だ。

「私のせいだつたんだね。里恵が辛い思いをしているの。『めんね、  
本当に……』

斐羅の顔は真っ赤だった。

「違う……。アタシだよ

里恵は立ち上がり、斐羅の前に立つと手を伏せて言った。

「謝らなきやいけないのはアタシの方……。豊羅の気持ち、知つてたのに」

「何言つてゐるの。里恵が謝る必要なんてない」

「お前、まだ俺のこと好きだったのかよ。俺つてやつぱもてるなー。まあ、こんな奴に好かれたつて困るナビ」

「本村くん」

「その呼ばれ方、久しづりい」

「昔、クラスメイトのお金がなくなつて、私が万引きしていぬ」とを知つていた先生が自分を疑つたとき、本村くん、必死でかばつてくれたよね？　なくなつたお金は自分が払つてもいいから、安藤さんのことは信じてくれつて。私、嬉しかつた。そんな本村くんの優しさは今でもどこかに残つているはず。だから、もつ誰かを苦しませるようなことは……」

「もうクボタはいじめねえよ。里恵さんいればこいつ」

杉沢が里恵の肩に手を置く。明がその手をパシンと叩いた。

「何すんだよ！」

「里恵に触れないで。別れてよ、このままじゃ里恵が……」

「いいんだ、明」

里恵が明の方を見た。

「アタシ、杉沢とは別れたくないんだよ

「どうして！」

「……気付いたら、後戻り出来ないくらい好きになつちやつてたんだよ」

そう言つて悲しそうに笑つた。空が赤く染まり、さつきまで鳴いていた蝉の声が聞こえなくなつていていた。

## 第59章 無力。

杉沢はにやりと笑って、

「ほら、俺たちは面想いなんだ。だから誰かに四の五の言われる筋合いはない」

と言つた。明が、

「じゃあ、撮影会だなんて止めてよ……」

と言つと、杉沢の眉がぴくりと動いた。

「お前、何で知つてんだ」

「明、もしかしてアタシの携帯……」

「『めん……』」

明が謝る。

「じゃあ、これは知つてるか？ 撮影会は今日が初めてじゃないことを

「！」

それは、つまり……。

「里恵の裸を[写]した[写]真は既にあるんだよ」

杉沢はそう言って笑つた。明はこの杉沢という悪魔に殺意が沸いてきた。元々いけ好かない奴だったけど、こんな奴だったなんて。

「里恵！ 『こんな奴のどこが好きなの？』

「……杉沢はアタシを助けてくれたんだ」

「え？」

そして里恵は語り出した。眞実が分からぬままだつた、あの日のことを。

「廊下でいきなり同級生の田淵たちに『放課後、俺の先輩の車へ乗れ。乗らなければ安藤斐羅をレイプする』って言われたんだ。アタシは、そんなことしたら警察に言つてやるつて言つた。でも、そいつらは『俺たちには何人も仲間がいるんだぜ』って。そして、『まずは今の状況を分からせるのが先みたいだな』って誰もいない教室に連れ込まれそうになつて……。その時、杉沢が現れた。そして、田淵たちを殴り始めた。その時、杉沢は男子のパンチをよけようと転落したんだ」

それが、杉沢が落下した真相だつたのか。田淵とは、学年でも有名な不良だ。仲間も同級生だけではなく先輩、後輩、沢山いるらしい。

「でも、杉沢はそんなことがあつて落ちたとは言わなかつたじやない」

「俺が言つたんだよ。ビクビクしながら病院に来た田淵たちに。『このことをばらされたくないければ、もつ今井に手を出すな』って

「それで、本村くんのことを？」

「……うん」

「でも、里恵無理やり杉沢と……してゐんでしょ？」

明が訊いた。

「それでもアタシが杉沢を好きなのに変わりはない」「まあ、別に里恵が別れたいなら俺も話を聞かないわけじゃないぜ？あの写真がどうなつてもいいとこいつならな」

里恵の裸の写真か。

「それって脅しじゃない」

明の言葉に杉沢は口元を緩め、

「違うな。誰もばらまくだなんて言つてないだろ？それに、俺は里恵をレイプしたわけでもない。それで俺を捕まえられるとでも思つていいのか」

確かに杉沢の言つとおりだ。今の段階では警察は動いてくれないだろう。本当に、一人は付き合つてているのだから。だからと言つてこのまま引き下がるのは悔しそう。でも、自分の頭ではいい案が思ひつかない。斐羅はどうだろ？斐羅の方を見ると、彼女は鋭い目で杉沢を睨んでいた。

「……もう一人は帰つてくれ」

里恵が言つた。

「里恵……」「帰つ、明ちゃん」

明は斐羅の言葉に驚いて顔を見た。斐羅は一度だけ頷き、里恵に背中を向けて歩き出した。明は斐羅と里恵を交互に見て、里恵がも

う一度、

「お願い。帰つて」

と叫びので仕方なく斐羅の後を付いていった。

「斐羅ちゃん、いいの？」

鳥居をくぐつた斐羅に尋ねる。そこで斐羅の肩が震えていることに気付いた。ああ、斐羅ちゃんは里恵に涙を見せたくなかつたんだな。明はそう思った。

「里恵が苦しんでいるのに何にも出来ない自分が悔しい……」

それは明だつて同じだった。助けたい。けれど、方法が思いつかない。結局、自分が杉沢との関係を知つていいことがバレて里恵を傷付けただけだった。

「どうして本村くんはあんなにも変わってしまったのかな……」

「うん……」

優しかつた杉沢といつのは明には想像じづらかつた。

「その……杉沢のこと、好き?」

明が遠慮がちに訊くと、

「今まで好きだつたんだけどね。あんな姿見たら、もつそんな気持ちどこか行っちゃった」

そう言って空を見上げた。

「それに

「ん？」

「本村くんと同じくらい好きな人、他にもいるから」

それは知らなかつた。明は一度だけ振り返り、里恵と杉沢を見た。小学生の頃、斐羅と両想いだつた杉沢。直史とも里恵とも仲が良かつた杉沢。里恵が杉沢のことを好きな限り、一人を離す方法も権限もない。

「なおくんなら、どうにかしてくれないかな」

斐羅がぼそりと言つた。

「和泉にこい」と言つたの？

「友達に隠し事してるのって、すぐ罪悪感ある

その気持ちは明にも分かる。しかし、これ以上里恵を傷付けて何の得があるのだろう？でも、直史なら、頭がいいから、何かいいアイデアが浮かぶかもしれない。

「言つて……みる？」

「今度屋上に来たとき、話してみよう」

「じゃあ私、月曜になつたら和泉に屋上に来るよつてみようかな

……でも、本当にいいのだろうか。異性の友達に知られたらどんな気持ちになるだろう。きっと、辛くて、恥ずかしくて……。

「待つて、斐羅ちゃん。やつぱり止めようよ、和泉に話すのは」

「でも、私たちだけじゃ知恵浮かばない……」

「……今、私たちに出来ることは何もないんだと思つ」

認めたくないが、それが現実だらう。

「無力、だね」

斐羅が悲しげに言つた。

「うん」

その時、ある案が思い浮かんだ。いい案とは思えないが、これが最後の手段かもしれないと思つた。

## 第60章 案

次の日から明は杉沢のことを探べ始めた。クラスの男子に話を聞いたり、杉沢の後を付けたり。情報を集めていくうち、カツアゲや薬をやつしているという噂は信用性が高いと感じ始めた。でも、まだこれだけじゃ足りない。証拠さえ掴めれば……。

「なあ、江川」

ある日、直史が話しかけてきた。

「何か最近、杉沢のこと調べてるんだって？ ビラして？」

まさか、里恵と別れさせる為に警察に捕まるような証拠を探している、とは言えない。

「うーん、ちょっとね」

「そういえば今井、まだ屋上に来てないのか？」

「うん……」

「どうしたんだろうな」

本当のことを見つてしまえたらどんなに楽だ。でも、これは里恵の為にも言つひやいけない。

「もしかして、杉沢のことと関係あるのか？」

「ギリとした」

「関係ないよ。全然」

「 セツカ……」

ナツキたちも同じ」とを訊いてきた。

「スマイリー、何で最近杉沢のこと調べてるの?」

「ちょっとね」

「もしかして、今井さんのことと関係ある?」

「……」

「それなら、うち協力するけど

「え?」

「私も協力するよ

「……本当に?」

「紀子と話してたんだ。もしかして今井さんは、そんなに悪い人じやないんじゃなかつて」

「今井さんね、この前私に言つてくれたの。『直史のことが好きなら早く告白した方がいい。彼女がいない今がチャンスなんだから』つて

「そなんだ……」

「今井さんはスマイリーにとつて大切な人なんでしょ? なら、協力してもいいかなつて。ね、紀子

「うん」

「じゃあお言葉に甘えるけど……。杉沢が逮捕されるような証拠を掴んでほしいの」

「ああ、薬をやつてる証拠とか?」

「そう」

「任せとけ!」

「私も頑張つてみるよ」

ナツキと紀子の力強い言葉が明は嬉しかった。駒は揃つた。あとは、どうやって駒を進めるかだ。

杉沢のことを調べてから一週間。未だに明は証拠を掴めずについた。カツアゲをする気配もないし、薬をやっているという証拠もない。「つしてこる間にも、里恵は傷付いているところの」と。

「もー、何で証拠見つからないんだろう？」

明は焦っていた。

「もしかして、ただの噂だったのかも」

斐羅が言った。

「そんなことない。絶対いけない」とやつてゐに決まつてゐ。あと一步なんだけど……」

「……案は一つだけあるんだけど…… やっぱり駄目、危険すぎる」

「どうこう案？」

「本村くんの仲間に入れてもいいの。そしたら薬だつて手に入るかも」

「どうやって、仲間に入れてもいいの？」

「簡単だよ」

そう言って斐羅が話した方法は、確かに危険だった。でも、これしか案はないんじやないか。問題は、どっちがその方法を試すかだ。

「私、試してみるよ」

「駄目。明ちゃんにこんな危険なことさせられないよ。私が、やらせる」

「私たって、斐羅ちゃんにそんな危ないことをさせられないよ。だから、私が」

しばらく押し問答が続いた。結局答えが出ないまま、話し合いは終わった。しかし、明の中ではもう結論が出ていた。

次の日、明は杉沢の仲間の矢野のげた箱に手紙を入れた。

『放課後、裏庭で待つてます

江川 明』

約束通り、矢野は来た。

「何だよ、江川」

「めんね、斐羅ちやん。これは、私がやらなくちゃいけないんだ。

「あの……実は私、矢野のこと好きなんだけど

「は？」

「お願い、付き合つて！」

「……マジかよ。はははー！」

矢野が声を上げて笑った。

「オーケーオーケー。付き合つてやるよ」

「本当？ 嬉しい」

誰が嬉しいかよ、ボケ。明は心の中で呟いた。

「これからは、なるべく矢野と一緒にいたいな

本当の感情を押し殺し甘えた声を出してみせる。

「オーケー。あ、悪い、これから杉沢たちと遊ぶ約束してるんだ。  
もう少ししたら江川も仲間に入れてやるからな。じゃ」

よし、作戦通りだ。仲間に入れてもらえれば、全てが分かる。な  
のに、この流れてくる涙は何……？

## 第6-1章 助けるから。

その日、屋上に行くと久しぶりに里恵がいた。

「あ

「よつ」

『わいわいなく手を上げる里恵。

「今日は、暇なの？」

「ああ。矢野たちと遊ぶつて」

矢野、という言葉に明が反応する。良かった、ビリや、り里恵は気付かなかつたようだ。

「あ、明ちゃん」

斐羅が缶ジュースを持って屋上に現れた。

「來てたんだ」

「うん」

「明ちゃんも何か飲む？ ジュース買つてくれるよ」

「あ、大丈夫」

「そうっ..」

斐羅は里恵にジュースを渡し、自分のジュースのフタを開けた。

「これホットココアじゃんか」

「それしかなかつたの。しょうがないでしょ」

「里恵、ホットココア苦手なの？」

「そう。アイスココアは飲む癖に」

斐羅が代わりに答えた。

「じゃあ、冷ましてから飲めばいいじゃん」

「夏だもん、なかなか冷めねえよ」

里恵は仕方ないといつぶつとホットココアを飲んだ。そして、気がまずい沈黙。杉沢のことが頭をよぎる。

「うめんね……私のせいだよね」

斐羅も同じことを考えていたらしく、ついに口を開いた。

「何度もこつけだぞ、斐羅のせごじやないから」

里恵が言った。

「でも……」

「絶対に斐羅のせこなんがじゃなー」

里恵の語尾が強くなる。

「私が、里恵を助けるから

気が付くと明はやく口元していった。

「助けるから。絶対」

「明は何もしなくていいんだよ……」

里恵のか細い声。救つてみせる。絶対。明はそう心に誓っていた。

矢野と付き合つて一週間。初めて彼と一緒に帰つた。繋ぎたくない手を繋いで。別れ道にさしかかったところでキスをされた。ファーストキスをこんな形で迎えることになるなんて、思つてもみなかつた。本当は好きな人としたかつた。そう思うと泣きたくなつた。でも、ここでぐじけちゃいけない。全ては里恵の為……。

「じゃ、バイバイ矢野」

「あ、待て、江川」

「何？」

「明日杉沢たちと遊ぶんだけど、江川もどうだ」

それをずっと待ちわびていたのだ。明は「行く行く！」と即答した。

「じゃあ、放課後昇降口で。またな

矢野の背中が見えなくなつた頃、明は「よつしゃー」と言つた。

次の日、昇降口で待つていると矢野とその仲間が来た。杉沢も一緒だ。

「え、矢野の彼女つてお前だつたの？」

杉沢は驚いた様子だった。

「や。俺たちラブラブだもんな？」

「うん」

は、誰が。表情に出さないよいつにして頷く。

「今日はどこで遊ぶ？」

「俺んちで飲むか？」

違う、自分が望んでいるのは薬をやることだ。明はそう思つたが  
口には出せなかつた。

「じゃ、杉沢んちで飲もつぜ。あ、江川酒飲める？」

「飲んだことない……」

「そつかそつか

そして明は矢野たちと杉沢の家に行つた。我慢して明は酒に口を  
運ぶ。不味い。杉沢は缶ビールを飲んでいた。  
その時、玄関のチャイムが鳴つた。

「あ、田淵だ」

え、田淵？ 杉沢が転落した元凶の？

「あれ、何で江川がいんの  
「俺の彼女なんだ」

矢野が言つたが、その声は明の耳には届いていなかつた。どうし  
て、田淵が？

「ねえ、杉沢。ちょっと来て」

明は廊下に杉沢を呼んだ。

「何だよ」

「どうして田淵が来たの？ だって田淵って里恵を齎したんでしょう？」

「仲直りしたんだよ」

「ふうん……」

何だか腑に落ちない気もしたが、とりあえず頷いた。部屋に戻ると、酔った矢野が突然胸を触ってきた。

「嫌！」

矢野の手をなぎ払う。

「俺の彼女だろ？ いいだろ」

「止めて！」

通学バッグで矢野の顔を殴つた。矢野は痛え、と言つと細い目で明をにらんだ。明は怖くなつた。私、こんなところで何してるんだろ。薬もやつていないのでから、もうここにいる意味はない。でも、矢野とは付き合つていないと杉沢との接点を失つてしまつ……。

「お前ら、セックスしちまえよ。俺ら観客になるから」

田淵が言つた。

「おお、それいいな」

と、杉沢。矢野はにやりと笑つて、

「江川。やるぞ」

と言つた。

「嫌！ 絶対嫌！」

そう言つて明は部屋を飛び出し、玄関のドアを開けて杉沢の家から出た。後ろを振り返らずに走る。杉沢の家が見えなくなつたところで、足の力が一気に抜けてその場に座り込んだ。怖かつた。いくら何でも、性行為なんて出来るはずがない。もう矢野とは付き合えない。

「「めん、里恵……」

これで里恵を救う方法がなくなつた。途方に暮れた明が行く先は、一つしかなかつた。

## 第61章 助けるから。（後書き）

ノクターンノベルズに、「15歳。～里恵の初体験～」を載せました。

<http://nkx.syosetu.com/n2196t/>

18歳未満閲覧禁止です。

## 第62章 グル。

屋上には斐羅と里恵がいた。

「里恵……」

「どひした、明」

明は里恵に抱きついて、

「「めん……里恵……」「めん……」

と言つた。

「何がだよ。どーしたよ」

里恵は困惑している様子だった。

「私、自己中だよね。ごめんね」

「明は自己中なんかじゃねーだろ。何があつた? 言つてみな

言えるわけがなかつた。里恵の為に矢野と付き合つているだなんて。

「「じめん、何でもない」

明は里恵から身体を離した。

「何か明顔赤くないか?」

酒を飲んだからだらつ、顔が火照っている。

「熱でもあるんじゃない？」

斐羅が心配する。明はなるべく明るい声で大丈夫と言へ、空を見上げた。雲一つない青空だった。

「何で、人生っていうのは思い通りにいかないんだろうね」

明は呟いた。

「里恵、まだ杉沢のこと好き？」

「……ああ」

「杉沢がどんな奴か知ってるでしょ？ あんな奴のどこがいいの…」

「……明には関係ない」

その時、斐羅が里恵の頬をはたいた。里恵は目を丸くした。

「斐羅……」

「苦しいのは里恵だけじゃないって何で分からないの？ 私たちは、里恵の親友なんだよ？ それが何で分からないの？ 私たちのこと、嫌いなの？」

斐羅は畳みかけるように質問した。目が潤んでいる。

「嫌いなわけ、あるかよ」

里恵が言った。

「二人とも、ごめん」

「里恵が別れないというのなら、方法は一つしかない」

斐羅が言った。

「方法?」

「本村くんがいなくなればいいんだ」

斐羅の言葉に明はぞつとした。まさか、斐羅ちゃん……。

「駄目だよ斐羅ちゃん、そんなの」

「でも、それしかない」

「止めるよ、斐羅。そんなことしたって誰も幸せにならない」

「そんなに本村くんのこと好きなの?」

「そうじやないよ。アタシは斐羅に殺人犯になつてほしくない」

しばらぐ明と里恵は斐羅を説得し、やつと諦めてくれた。そんなにも里恵のことを大切に思つているんだ。それに対しても自分は何をやつているんだろう。自己嫌悪。

「アタシは大丈夫だから」

それが嘘だということを明は知つてゐる。やつぱり、どうにかして杉沢と里恵を離れさせなければ。でも……どうやって?

光が見えるようになるのは、これから一週間後のことだった。

矢野とはあれ以来会つていない。明が避けているのだ。そして、またまた杉沢と田淵と矢野が教室で話しているのを見つけた。何となく、隠れて聞き耳を立ててみる。

「いやー、今井も単純だな。ちょっとお前に守られただけで好きになつてやらせてくれちゃうんだもんな」

「お前のおかげだよ。俺の頼みを引き受けってくれてありがとな  
「まさか、お前が落ちるとは思わなかつたけどな」

「ダイナミックだつたよな」

「あれは痛かつたぜ。ま、里恵が手に入つたんだから良しとするか

そう言つて三人は笑つた。明の身体に嫌な予感が走つた。まさか、  
田淵は杉沢に頼まれて里恵を襲おうとした？ そんな、まさか。し  
かし、そうとしか考えられなかつた。

……許さない。

「ねえ、今のどうこいつ」と

「うわっ、江川……」

「全部仕組まれてたことなのー？」

二人はふつと笑つた。

「ああ、そうだよ。女とやりたかつたからな

と、杉沢。

「それって、女なら誰でも良かつたってこと？」

「ああ。里恵が一番騙しやすいかなと思つてな」

信じられなかつた。こいつは普通の人間じゃない。おかしい。こ  
のことを、里恵に伝えなければ。

「おい、今の話を聞いてただで帰れると思つか？」

矢野が明の手を持つていた。そーっと血の氣が引く。

「嫌……」

自分の声が頼りない。そして明は床に押し倒された。

「大声出したらもうと酷い目に遭うからな」

明は手足をじたばたさせたが、男子の力には勝てない。Yシャツのボタンが引きちぎられた。

「止めて……！」

明は泣いていた。その時、教室のドアが勢いよく開かれた。

「明！」

そこにいたのは里恵だった。一瞬の隙をついて矢野から離れ、里恵に抱きつく。

「どういひことだよ……」

里恵は怒つているようだった。

「お前、知らねえの？ 僕と江川は付き合つてんの。やつて何が悪い？」

「明がお前なんかと付き合つはずがない！」

「……本当なの」

「え？」

「私、矢野と付き合つてる」

明の言葉に里恵は目を丸くした。

「まさか、そんな、どうして」

「杉沢がカツアゲとか薬とかやつているところを見つけたかったから。矢野に近付けば杉沢の悪事が分かると思つて」

明は本当のことと言つてしまつた。

「結局その証拠は見つからなかつたけど、証言なら手に入れた」

「証言？」

「 杉沢と田淵はグルだつたんだよ」

## 第63章 消えてしまえ！

里恵は田を丸くした。

「どういふこと?」

「里恵が矢野に襲われそうになつたのは、杉沢が仕組んだことだつたんだよ」

「……え?」

「里恵を助けることで、杉沢を好きになるように仕向けたことだつたつてこと」「まさか……そんな……」

里恵は呆然としていた。

「そうだよね？ 杉沢」

「ああ。正解だぜ」

杉沢は笑つた。

「里恵の単純さには笑つたな」

「杉沢……嘘だろ？」

「嘘じやねえよ」

やつと理解したのか、里恵の田から一筋の涙が零れた。

「……信じたのに。信じたのに。」

そう言つて杉沢につかみかかつた。杉沢は里恵を突き飛ばした。

椅子が倒れる。

「くそつ……」

里恵は杉沢を睨んだ。

「お前なんか消えろ！ 消えてしまえ！」

「消えるのはお前らじゃねえのか」

田淵が言つた。

「……どうこいつ意味だよ」

「江川と今井、黙つて教室を出る」

「どうこいつつもり？」

明が訊くと、田淵が懐からナイフを取り出した。明の身体から血の気が引いた。

「さあ、歩け」

「……先生に言つよ？」

「言つただろ？ 僕らこの仲間が沢山いるつて」

杉沢が言つた。

「明は逃げる」

と、里恵。

「でも……」

「早く逃げるー！」

そう言われて明は教室を飛び出した。

「待てやー。」

田淵の声が聞こえたが、明は振り返らなかつた。まづすぐ職員室へ向かうと、町田先生を見つけて話しかけた。

「先生！ 里恵が、里恵が田淵たちにいわれちゃいますー。」

職員室にいた教師全員が明を見た。

「江川、落ち着け。何があつた？」

「里恵を脅して、多分酷いことをしようとして……。」

「江川、どうした？」

話しかけてきたのは担任だつた。担任は頼りにならないことは分かつていたが、今起きている状況を一人でも多くの人に知つてもらう必要があると思つた。

「田淵たちが、ナイフで脅して里恵を連れ去るつもりしてこらんです

「……本当か？」

「信じて下さー」

明は担任の田を見た。担任はゆつたりとまばたきをして、

「今井はどうしているんだ

と訊いた。

「教室です

「町田先生、行きましょう」

明の後ろを担任と町田先生が付いて来た。教室に付くと、既に田淵たちと里恵はいなかつた。明は青ざめる。

「江川、今井の携帯の番号は知っているのか」

「あ、はい」

「先生の携帯貸すから、とりあえず電話してみる」

明は担任の携帯を借りて里恵に電話をした。しかし、何コールしても電話に出てくれない。

「里恵……」

明は不安になつて泣き出しそうになつっていた。

「今井を連れて行つたのは田淵と矢野と杉沢だな？」

「はい」

「町田先生はそいつらの家に電話して下さい。私は他の先生にも伝えて探しに行つて来ます」

「分かりました」

何もしてくれないと思つていた担任が動いてくれている。明は一人の教師に感謝しながら、

「私はどうしたらいいですか

と訊いた。

「先生たちに任せて、江川は帰りなさい」

「でもつー」

「お前も危ないかもしねないんだぞ。他の先生に付添つてもらつて帰るんだ」

そう言われると何も出来ない。明は他の先生の付添いで家に帰ると、すぐさま斐羅に電話をした。

「どうしたの、明ちゃん」

「里恵が、里恵が……！」

明は落ち着かない気分のまま今の状況を説明した。

「……そう、本村くんが」

「里恵、殺されたらどうじよつ」

「殺されはしなくて、犯される可能性は大だよね」

斐羅の声は冷静だった。

「ねえ、どうして斐羅ちゃんはそんなに冷静なの？」「冷静なように聞こえる？」

「うん」

「そしたら……私は演技が上手いのかもね……」

そう言つて受話器から斐羅の泣き声が聞こえた。そうか、斐羅ちゃんも不安なんだ。明は斐羅を安心させる為にも泣いたらいいと思った。

「今、先生たちが捜してる。だから大丈夫だよ、きっと」  
「車で移動してたら見つからないじゃない」

「……」

そのとき、キャッチが入った。担任からだつた。

「今井が見つかつたぞ」

「本当ですか！？」

「ああ……一応な」

明は担任の言い方が気になつた。

「一応、つて？」

「その……怪我していくな。あと……」

「あと？」

「……乱暴された後だつた」

明の足から力が抜けた。へなへなとその場に座り込む。

「今、里恵は……」

「病院だ。警察に連絡して、田淵たちは連れて行かれた」

「怪我つて、どれくらいの？」

「軽傷だそうだ。ただなあ……」

「何ですか？」

「江川、今から病院に来てくれないか？」

「勿論！」

担任から病院の場所を聞き、斐羅に里恵が見つかつたことを伝え

た。

「斐羅ちゃんも一緒に病院行かない？」

「行く。なおくんも誘つた方がいいんじゃないかな」

「分かった、和泉に電話してみる」

そして明は直史にも電話をし、乱暴されたこと以外のことを伝えた。犯された、というのはすぐデリケートな問題だ。異性に知られたくないかもしれない。そう思つてのことだった。

明、斐羅、直史は病院に着いた。病室に入ると、里恵は顔に氷のうを乗せていた。担任が里恵の近くに座っていた。

「里恵」

斐羅ちゃんが声をかけた。いつものように笑つて「何だよ、アタシなら大丈夫だから」なんて言ってくれるものだと明は思つていた。しかし、里恵はまづまづとしたまま表情を変えなかつた。

「今井、分かるか？ みんなが来てくれたんだぞ」

担任の言葉にも里恵は無反応だつた。

「里恵……」

明は戸惑つた。「んなの、私の知つている里恵じゃない。

「今井は怖い目に遭つて、一時的なショック状態になつているんだ」

## 第64章 サンキュー。

「ショック状態……」  
「め……」

里恵の口から言葉が漏れた。

「何？」  
「う……め」

ごめん、と言いたいのだろうか。明は微笑んで、

「里恵が助かつて良かつたよ」

と言つた。

「今井、もう終わつたんだ」

担任が言つた。

「辛い思いをさせて悪かつた。でも、もう大丈夫だからな」  
「信じ……て……た」

里恵が途切れ途切れに言つ。

「杉沢……こと……信じ……て……た」  
「もう杉沢のことは忘れろよ」

直史が言つた。そして、こう続けた。

「お前が杉沢と付き合っていたことくらい、知っているんだよ」

直史は知っていたのか。生ぬるい風がカーテンを揺らした。

「アタ……シ、田淵たちに……襲わ……れたん……だ」

里恵が告白した。そのことを知らない直史は驚いた顔をした。

「マジかよ……」

そう言つて唇を噛む。

「怖くて……。ここにいた……ら……殺され……る」

「今井、もうあいつらは逮捕された。大丈夫だ」

担任が里恵の肩を持つて言つたが、里恵は首を振つて、

「仲間……に……殺される……殺……られる」

里恵の身体は震えていた。氣の強い里恵がこんなに怯えているなんて……。明はいたたまれない気持ちになつた。

「大丈夫。私が、里恵を守るから」

そう言つたのは斐羅だった。

「私も守るよ。里恵のこと」

明もそう言つた。

「今井は一人じゃねえんだぞ」

と、直史。

「今井、こんなに守つてくれるという友達がいて幸せじゃないか。先生たちだつて、全力でお前を守る。だから、安心しや」

担任がこんなに頼もしい存在だつたなんて知らなかつた。

「先……生」  
「何だ？」  
「サン……キコ」  
「いのこいつとあはせりやんとありがと」「うううだぞ」

そう言いながらも担任は照れくしゃくしゃに笑つた。

「江川も疲れたろ？ 今日はゆっくり休めよ」

病院を出てからの別れ際、直史が言つた。

「うん。和泉もね」  
「ああ」  
「なおくん、」めんね。その……里恵と本村くそのこと、黙つて  
「気にすんな」

そう言つて直史は自転車で帰つていった。

「じゃあ、私も帰るね」  
「うん。気を付けてね」

「明ちゃんもね」

斐羅も帰つていった。明は一人、すっかり暗くなつた空を見上げて深呼吸をした。

「もう、終わつたんだ」

そう、もう終わつたんだ。田淵たちの仲間もどうせ捕まるだろう、と担任は言つていた。もう怯える必要はない。大丈夫。あとは、里恵が精神的にも肉体的にも回復するのを待つだけだ。

「頑張れよ、里恵」

そう呟いて、明は帰路についた。

一週間後、里恵が登校してきた。杉沢と里恵の噂が立てられることもなく、学校は平和だった。やはり杉沢たちは薬をやつていた。その件で多くの杉沢の仲間が逮捕された。

「今井さん」

ナツキが声をかけた。

「何?」

「良かつたら、うちらのグループに入らない」

里恵は一瞬目を丸くしたあと、笑って、

「よせよ。今更、入れねーよ。それに、アタシは単独行動の方が好きなんだ」

「でも、入りたくなつたらいつでも言ってね」

と、紀子。一人の優しさに明は嬉しくなつて、

「私は里恵の友達だから」

と言つて里恵の手を握つた。ナツキと紀子がトイレに行つていており、

「もう……大丈夫なの？」

と尋ねると、里恵は、

「大丈夫にならなきゃいけねえもん」

と言つて、少し哀しげに笑つた。

「辛かつたら、いつでも言ってね  
「ああ。サンキュー」

放課後、一週間ぶりに皆が集まつた。

「なんで和泉までいるの？」

明が訊くと、

「別にいいだろ」

と直史が言った。やつぱり、里恵のことが心配なのだろうか。

「里恵、本当にいいんだね。元はといえば私のせいだよね」

斐羅が言った。

「だから、斐羅のせいなんかじゃないって」

「やつだよ」

元をただせば自分のせいだから。自分が杉沢たちの話を聞かなければ、あんなことにならなかつただろう。

「もう、恋愛はこいつ、りだな」

里恵が笑つて言った。しかし、その瞳は哀しみの色を帶びていた。乱暴されたショックもあるだろうが、好きな人に裏切られた辛さもあるんだろうな。

「今井のことすら分れなかつたなんて、男失格だよな」

直史が言った。

「今井があいつと付き合つていることに気付いた時点で、あいつをぶん殴つてでも別れをせるべきだつたんだ」

「直史、そんなことしたらお前がボコボコされてただろうよ」

里恵が言った。

「それでも引き離すべきだつたんだ。幼なじみなんだから  
「例えアタシが殴られても、アタシの目は覚めなかつたよ。杉沢の  
証言を得ない限り」

「そうかもしれない。それほど、里恵は杉沢のことが好きだつたの  
だろ?」

「でも……守りたかつたよ  
「なおくんはやつぱり優しいね」

斐羅が言った。

「そんなことねえよ

「アタシ、そろそろ帰るわ。帰りが遅いと親が心配するし」

里恵の言葉で解散となつた。エレベーターに乗つてゐるとき、直  
史が、

「江川は大丈夫なのか?」

と訊いてきた。

「えつ、何が?」

「江川も色々と疲れたる。矢野とも嫌々付き合つてたんだろ?」

「あー……。私は大丈夫だよ」

笑顔でそう返す。

「あんまり、無理すんなよ」

直史の言葉が、素直に嬉しかった。

「また、明日からは来れなくなりそうだから、江川、安藤、今井を  
よろしくな

「うん」

「オッケー」

マンションを出てから、斐羅が言つた。

「なおくんつて、里恵のこと好きなのかな

## 第65章 好き。

「えー、エハだハハ」

直史は里恵のことを心配している。それは、ただの幼なじみだからだらうか。その手のことに鈍感な明には分からなかつた。

「明ひやんせ~」

「え?」

「なおくんの」と、ビヒ思つてゐ?」

「うーん……好きだよ。でも、ラブじゃなくてライクの方」

「やつか」

しばらく沈黙が続いたあと、叢羅が言つた。

「私、なおくんの」と好き」

明は驚いて、

「え?」

と匂を返した。

「なおくんの」と、好きなの  
「つて、ラブの方?」

「うる

斐羅が直史のことを好きだなんて、全く気付かなかつた。

「斐羅ちやん、杉沢のこと好きだつたんじゃなかつたの？」

「同じくらじ好きな人がいる、って言つたじやない。それが、なお

くん

「そりだつたんだ……」

「私、明日なおくんに告白つよいつと細ひ

告白。斐羅が直史のことを好きなり、素直に応援したいと思つた。

「やつか。頑張つて。いい結果になる」と、祈つてゐるから  
「あつがとつ」

もし、直史が里恵のことを好きだつたら。どうか、両想いでありますよつと。明はただ祈つていた。

次の日、屋上に行くと里恵しかいなかつた。

「あれ、斐羅ちやんは？」

「まだ来てない。珍しこよな」

「告白はしたのかな……」

「告白？」

つて、口にしてしまつた。明は慌てて口を噤むが、時は既に遅し、  
「告白つて何の」とだよ

と里恵が訊いてきた。「この様子じゃ、斐羅は里恵に話していないのだろう。でも、どうして私に話したの？」

「あ、もしかして斐羅のこと？」

「え？」

「違うのか？」

「あー……」

明は隠しきれないと思った。

「好きな人に告白するって言つた」

「てことは、直史か」

「どうして知つてるの？　斐羅ちゃんが言つたの？」

明は驚いた。

「見てりや分かるよ。付き合って長いんだから。そっか、斐羅思ひきつたなあ」

「ちなみに、里恵は？」

「へ？」

「好きなの？　和泉のこと」

里恵は一瞬きょとんとした顔になると、顎を上げて笑つた。

「ないない。アタシが直史を？　ねーって」

なら、斐羅に可能性はあるのかも知れない。

「アタシ、直史が誰を好きだか知つてるよ」

「え！ 誰誰？」

「明、知らないの？」

「知らないよ」

「お前つて鈍……」

里恵が言いかけたとき、屋上のドアが開いた。そこには、斐羅が立っていた。

「斐羅」

斐羅はまっすぐ明の元まで来ると、少しだけ笑って言った。

「悔しいな」

「え？ 何が？」

「なおくん、下で待ってるよ。明ひやんのこと」

「え？ 何の用？」

明は今置かれている状況が理解出来なかつた。

「明つて、本当鈍感」

里恵が呆れた顔をしていく。

「ほひ、早く行つてやれよ。流されるなよ？ 素直に自分の気持ちを言つてやれ」

里恵に背中を押されて、明は訳が分からぬままエレベーターで降りていった。

「よ

マンションの前には、斐羅の言つた通り直史が待つていた。

「何?」

「安藤から訊いてないの?」

「何にも」

「何だよ、じやあわざわざ言つた意味ねーじやないか……」

「斐羅ちゃんから、聞いた?」

明は表現をぼかして訊いてみた。

「ああ」

「何て答えたの?」

「俺には好きな人がいる、って

「え、斐羅ちゃんふつたんだ! 酷ーい」

斐羅が可哀想になつた。もしかしたら、つて想つていたのに。

斐

「俺の好きな人、つていうのがお前なんだよ」

時間が止まつたような気がした。

「……は?」

「俺、江川が好きだ」

明は混乱した。自分のことが好き? 和泉が? 菲羅ちゃんでも里恵でもなくて、私?

「……何をおっしゃっているのですか」「友達思いで、優しくて。いつの間にか好きになつてた」

菲羅の言つていた言葉の意味が分かつた。直史が自分のことを好きだつたからだ。

「江川は、俺のことどう思つてんの?」「どうつて……好きだけど、それは友達としてつていうか……そんな、恋愛対象として見たことないもん……」

明は戸惑つていた。

「すぐに恋人になりたいとかは思つていない。ただ、考えてみてほしいんだ」

直史の顔は、今まで見たことがないほど赤く染まつっていた。

「あんね、菲羅ちゃん」

屋上に戻つてきた明は菲羅に謝つた。

「謝る必要ない」

「和泉、馬鹿としか言つてはいけないよ。よつこよつて私? 謎すぎる」

「いやー、菲羅も長年の想いを告げたんだな」

と、里恵。

「セツセツ、何で今になつていつたの？　せき合こまつての」

明が豐羅に訊いた。

「本村くんが好きじゃなくなつて、本当になおくんが好きだつて気付いたから」

「そつか……」

「思いを伝えてすつきつした。明ひやん、私に気を使わなくていいんだからね。好きなら好きって言えばいい」

明は分からなかつた。直史のことは嫌いじゃない。でも、恋愛感情なんて……。

そんな中、明たちは模試を受けて、初めて自分の偏差値を知ることになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7456a/>

---

15歳。

2011年8月31日07時49分発行